

未来へつなぐ私たちのまちづくりの集い
～第40回公民館研究集会・令和6年度地域づくり市民活動研究集会～

記 録 集

日 時 令和7年2月15日(日)

会 場 松本市中央公民館(Mウイング)他

主催 松本市・松本市教育委員会・松本市地域づくり研究連絡会

主管 未来へつなぐ私たちのまちづくりの集い実行委員会

目 次

全体資料

開催要項	1
------	---

全体会

パネルディスカッション	3
地域が動き出す ～自治を紡ぐ語り合いの実践から～	

分科会

第1分科会	【地 域 防 災】	45
	いざって時、どう動く？	
	～地域で取り組むお互い様の防災対策と 行政との協働～	
第2分科会	【子ども・若者】	49
	地域は子育て応援団	
	～地域にある子どもの居場所を知ろう～	
第3分科会	【共 生 社 会】	54
	共生社会	
	～違いを力に、共に生きる未来へ～	
第4分科会	【高 齢 者】	58
	みんなが「集う」場所をつくるには？	
第5分科会	【地 域 資 源】	63
	身近な資源を活用した地域づくり	
第6分科会	【町 会】	69
	町会のシンカ	

実践事例の掘り起こし

活動実践事例一覧表	113
-----------	-----

未来へつなぐ私たちのまちづくりの集い

～第40回松本市公民館研究集会・令和6年度松本市地域づくり市民活動研究集会～

開催要項

1 趣 旨

社会経済環境の急速な変化や人々の価値観、生活スタイルの多様化等を背景に、私たちの地域はいま、様々な困難に直面しています。激甚化する自然災害に対する防災・減災の取組み、持続的な地域コミュニティの形成、個人が地域社会で自分らしく生きられるウェルビーイングの実現を図るためには、地域と行政とが協力し、住民主体の自立的・主体的な地域づくりを進めることが求められています。

本集会は、各地で取組みを展開する住民・職員が一堂に会し、身近な地域や生活・暮らしの課題について共に考え、互いに学びあうことで“気づき”や“つながり”を持ち帰り、再び地域の実践に生かしていくことを目的として開催するものです。

2 期 日 令和7年2月16日（日）

3 会 場 松本市中央公民館（Mウイング）他 （松本市中央1-18-1 電話:32-1132/FAX:37-1153） ※第2分科会 会場：第三地区公民館（松本市中央4-7-28） ※第5分科会 会場：ジャズ雅鳴きたや（松本市笹賀2993-1）

4 主 催 松本市、松本市教育委員会、松本市地域づくり研究連絡会

5 主 管 未来へつなぐ私たちのまちづくりの集い実行委員会

6 日 程

9:00	9:30～9:45	9:45～11:50	11:50～13:00	13:00～16:30
受付	開会式	全体会	昼食	分科会

7 開催内容

(1) 開会式

(2) 全体会（パネルディスカッション）

ア 演 題 「地域が動き出す」～自治を紡ぐ語り合いの実践から～

イ モデレーター 向井 健 氏 松本大学総合経営学部観光ホスピタリティ学科准教授

ウ パネリスト 山岸 勝子 氏 元松本市社会福祉協議会四賀地区センター課長

高山 拓郎 氏 島内島高松町会長

相馬 路子 氏 大野川小中学校コミュニティ・スクールコーディネーター

エ 内 容 地域づくりを進めるための対話の重要性を皆さんと一緒に考えます。

(3) 分科会

	テーマ	タイトル
第1分科会	地域防災	いざって時、どう動く？ ～地域で取り組むお互い様の防災対策と行政との連携～
第2分科会	子ども・若者	地域は子育て応援団 ～地域にある子どもの居場所を知ろう～
第3分科会	共生社会	共生社会 ～違いを力に、共に生きる未来へ～
第4分科会	高齢者	みんなが「集う」場所をつくるには？
第5分科会	地域資源	身近な資源を活用した地域づくり
第6分科会	町会	町会のシンカ

8 集会の配信について

集会に関連する動画を編集し、後日 YouTube にて配信する予定です。

9 参加申込について

2月7日（金）までに、専用フォーム（LoGo フォーム）へお申し込みいただくか、最寄りの地区公民館、または集会事務局（中央公民館）へ電子メール、電話、FAX、窓口でお申し込みください。

※ 申込み時の確認内容：氏名／住所／電話番号／参加希望分科会

※ 手話通訳、要約筆記通訳、託児保育が必要な方は参加申込み前にご相談ください。

【集会事務局】

〒390-0811 松本市中央1-18-1 松本市中央公民館（Mウイング）

電話：0263-32-1132／FAX：0263-37-1153

E-mail:gakushu@city.matsumoto.lg.jp

10 その他

松本市営中央駐車場（Mウイング北棟）は有料です。公共交通機関等での参加にご協力ください。

全体会（パネルディスカッション）

【テーマ】

地域が動き出す～自治を紡ぐ語り合いの実践から～

【モデレーター】

○松本大学総合経営学部観光ホスピタリティ学科 准教授 向井 健 氏

千葉県生まれ。北海道大学大学院を経て、2015 年度より松本大学総合経営学部観光ホスピタリティ学科専任講師として着任、2021 年度から現職。社会教育主事養成課程を立ち上げ、主担当として同課程をマネジメントする。専門は社会教育学、地域福祉論。長野県社会教育委員、松本市公民館運営審議会委員長

【パネリスト】

○元松本市社会福祉協議会四賀地区センター課長 山岸 勝子 氏

松本市(旧四賀村)生まれ。1985 年に四賀村社会福祉協議会に入職。在宅福祉ホームヘルパー、福祉活動専門員、通所介護管理者を経て、2005 年松本市合併に伴い松本市社協ボランティアセンター係長、2006 年四賀地区センター課長。2017 年松本市社協を退職後、四賀地区社会福祉協議会会長、同年 6 月より 4 年間松本大学に勤務。2022 年から松本市民生委員・児童委員協議会の四賀地区民児協会長

○島内島高松町会長／島高松未来づくり検討会会長 高山 拓郎 氏

松本市生まれ。2020 年 4 月より島内島高松町会長、2024 年 4 月より島内地区町会連合会会長。今年度から、住民一人ひとりが「我がこと」として様々な「場」に参加し、関わることでできる持続的な町会活動のあり方を総合的に議論するため、島高松未来づくり検討会を設置。職業は農業（水稻＋自家用野菜）。高校・大学を通じ合唱活動に勤しむ。現在は男声合唱団「クール・ビア」に所属

○大野川小中学校地域学校協働本部活動推進員 相馬 路子 氏

白馬村に生まれ、大町市で育つ。東京都内の学童保育所、認証保育所、県内の小学校、幼稚園、保育園、ベビーシッターなど子どもに関わる仕事に就いた後、2015 年冬に乗鞍高原へ移り住む。自分の思い描く理想の教育保育を追い求め、2020 年春に「のりくら自然保育木のこ」を立ち上げる。2023 年 4 月から大野川小中学校地域学校協働本部活動推進員（コミュニティ・スクール コーディネーター）として地域と学校をつなぐ活動に尽力

(向井健氏)

ただいまご紹介にあずかりました、モデレーターを担当いたします松本大学の向井と申します。

これからおよそ2時間、皆さんと一緒に、市内の三つの実践から、どのように地域づくりを進めていけばよいのか、示唆を得られる時間にしていきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いします。

本日のテーマは「地域が動き出す～自治を紡ぐ語り合いの実践から～」ということになっています。この「地域が動き出す」というテーマ、すごくいいテーマだなと思って拝見しました。

といいますのも、逆説的にいうと、なかなか地域は動き出しづらい側面もあるように思います。例えば、今日では地域づくりの担い手不足を始めとした様々な地域の課題や困難に直面しており、どうやったら地域が動き出すのだろう、地域を変えていきたいけれども、どうしていいのだろう、という悩みを持って日々活動している方がたくさんいるのではないかと思います。

その点において、本日取り上げる三つの実践は、次の地域づくりのステップにつながるヒントが得られるような実践だと思えます。「地域福祉」「町会」「コミュニティスクール」と、一見すると違った実践のように思うかもしれませんが、何かそのようなヒントが三つの実践から得られればいいかなと思っています。

それでは、報告いただきたいと思います。まず初めに、山岸さんからよろしくお願いします。



【実践事例の報告】

1 四賀社協の取組みと「ふくふく亭エル」

(山岸勝子氏)

改めまして四賀の山岸です。よろしくお願いいたします。

四賀では少子高齢化や人口減少が進んでいますが、住民の皆さんは昔からの隣近所の間を大事にしながら地域を作っています。

また、色々な困りごとが出てきていますが、それもみんなで支え合っていこうよという気持ちから、これからお話しする「かかわり隊」の活動が始まりました。

地域のお年寄りから、「布団が干せない」「重いものが持てなくなった」「草刈りができなくなった」といった声が聞こえてくるようになり、そういった話が地区内のお店の人や農協や民生委員さんなど、色々なところから社会福祉協議会に上がってきました。

社会福祉協議会としても、実際どんなことに、どんなふう困っているのかを調べなければならぬということで、まず、ニーズ調査を行ったのです。いっぱいやってみました。でも、本当に困っていることは上がってきませんでした。

だけど、町会長さんや行政の方からは「こういうことがあります」「ああいうことがあります」と言われます。そこでアンケート方式も変えてみましたが、結局駄目でした。

例えば、農協の方は毎月1回集金に行く、業者の方も何かお届け物をしている。色々な関わりの中で皆さんと話し合いをしていくと、やはり「一対一」で話すこと。その機会を作らなければいけないと思ったのです。

社会福祉協議会では元々、年3回ほど、ひとり暮らしの方々が集まる機会を作っていました。そこに来ていただいた方に、最初から「何か困りごとはありませんか」と聞いても、「はい、これが困っています」なんて、絶対言わないので

すよね。色々と会話をする中で、これはちょっと買い物が大変だろうなとか、病院はどうしているのかなとか、そういったことに気が付いてくる。それがニーズ把握だなと思ったのです。

それを何回も何回も繰り返していく中で、生活していくのにこんな不安がある、こんな困りごとがある。じゃあどうしたらいいのかなということを考えて、不安や困りごとをなくしていけば、四賀の中で安心して暮していけるのではないか。

介護サービスとして色々な施設でケアをしている。ヘルパーさんも入っている。だけど、それらを利用していない要介護者もいる。そういう人たちがなるべく介護保険を使わずにいられる方法はないだろうかということも含めて考えると、それにはやはり住民の関わりがあった方がいいのではないか。

でも、住民が支えるといっても、どう支えたらいいのかも分からないだろう、ということで住民向けの支え合い講座を開きました。お年寄りにはどんな病気を持っているのか、その病気はどうやったら治していけるのかなど、基本的なことを学ぶ勉強会を平成 22 年から 25 年まで実施しました。

「関わる」ということは、人と関わるわけですから、ただ技術を覚えるだけでなく、その人と良い関係づくりができる、そのための勉強会を行いました。例えば、笑顔があって訪問するのと、ただ言葉だけで「こんにちは」というのでは、やはり全然違うと思います。自分だったらどういう対応をしてもらったらその人とうまくいくだろうか、そういったことも含めて勉強をしました。

四賀の課題にはこんなことがあって、何とかそれをみんなで解決していきたい、そんな講座を開きたいと思っているという話をしたら、本当に大勢の方が集まったのです。でも昼間はやはりお仕事もある。だったら大勢の方に来ても

らうために、夜やろうということで、仕事が終わったあとの講座を開設しました。

最初は 1 年で終わろうかと思っていたのですが、皆さんが「もう少し学びたい。もう少し学んで、住民とちゃんと関わってみたい」というので、その後も毎年、毎月やったのです。そうやって、誰かのために何かをしたいという人が増えてきました。講座の内容はここ（スライド）に出ているとおりです。

最初はボランティアさんも「やってやってるんだ」という気持ちだったのですが、そうではなくて、やってあげることによって、自分がすごく幸せな気持ちになる。自己満足ではいけないよということも言いながらやってきました。

お金をどうしようかという話もありました。助けたり助けられたりだから、お互い様だよ、ね、といって始めたのですが、お年寄りのところへ行ってみると、「悪かったね」と言ってお菓子をくれたり、ハンカチをくれたりと、いろいろなことが起こってくるのです。

これはかえって負担になっているのではないかということで、ボランティアさんたちと話し合いをして、だったらお金をいただいた方が気楽ではないか、ということになりました。

最初 800 円ぐらいがいいかなと思ったのですが、最終的に 500 円になって、お金をいただくようになりました。それで平成 23 年から平成 27 年までの間に、いろいろな「隊」が出来上がっていきました。

「かかわり隊」は生活上の困っていることを支援する活動です。それができると、社協としてはまたニーズ調査を行います。他にどのような課題があるのか。そこで出てきたニーズをもとに「つながり隊」も始まりました。

民生委員さんから「月 1 回訪問するが、それだけでは足りない」という話があって、けれどもなかなか訪問回数を増やすことができない。特に四賀の場合、隣から隣まですごく遠いところ

があります。山と山とで向かい合って、対面で「ヤッホー」といえば「ヤッホー」と聞こえるかもしれない。でも、そこへ行くには山道を行かなければいけないところも多い。

そこを何とかしたいということで、固定電話を使いながら安否確認をする「つながり隊」を作りました。そうやって、都度ニーズ調査を行いながら、様々な「隊」が出来ていきました。

そして、そうしたことを何年も続けるうちに、やはり私も退職をしまして、色々な人と話をしていく中で考えました。

80歳以上の介護予防的なものは、社会福祉協議会でも色々なサービスを設けています。でも、その手前の方、70代後半から80代にかけての方たちの行く場所が無かったのです。

そこへ来てコロナが始まりました。コロナになると、どこにも出られない、人と会わない、喋らない。そういう状況を把握する中で、これは何とかその人たちが来られる場所を作って、生きがいを持った生活ができるようにしたいなと思っていました。その中で出てきたニーズを社会福祉協議会なり、色々な専門職なりにつなげることが大事ではないかということで、令和4年に「ふくふく亭エル」を立ち上げました。

先ほど言いましたように、ひとり暮らしで昼間一人で過ごしている方、また、老々で過ごしている方は、なかなか人と会えない。保健師さんなどと話していると、一人で居ると精神的に具合が悪くなってくるよね。いくら病気がなくても、気持ち的に落ち込んでしまうよね、という話になります。そこを何とか解決したいなって思い、その人が出向いてこられるような場所を考えました。

最初、公民館でやろうかなと思ったのですが、公民館では色々な行事をやっていますので、そこで毎週毎週やるというのは、かえって迷惑になるのではないかな。そこへたまたま社会福祉協議会が持っている「ふくふくの家」というのが

あったものですから、そこをお借りして「ふくふく亭エル」という名前を付けてやっていくことにしました。

最初は「ふくふく亭」だったのです。でもある方から、もっといい名前にしたらいいじゃないかという声が上がって、「友人をエル」「良きご縁をエル」「絆をエル」など、色々な意味を込めた「エル」という名前を付けました。

始めてみると、住民の皆さんが「場所が分からなくていけないから」と言って、看板を作ってくれるなど、色々な協力があって進められています。

スタッフについても、賛同してくださる皆さんがいて、看護婦さんであったり、元社会福祉協議会の職員であったり、ケアマネさんであったりと、色々な方が「私、何か協力できるよ」といって集まってきて、今は8名で対応しています。

皆さんが安心して来られる場所づくりということで、守秘義務を守りながら、もし何か相談があって、これを誰かに伝えなきゃいけないなということがあっても、勝手にやるのではなく、本人の了解を得てから進めています。

また、利用した方が、エルに来てよかったな、ここに来てあの人と会えてよかったな、話ができてよかったなという満足感を得て、「また来たいな」と思える場所にしたいと思ってやっています。

スタッフは常に反省会を行い、今日はどうだった、これはもっとこうやってやればよかったんじゃないか、あの人ちょっと最近元気がないよね、ちょっと顔色悪いよね、だったらどうしようかねといったことを、保健師さんや、包括支援員さんや、色々なところに相談しながら進めていく。私たちが何か解決しようではなくて、私たちは専門職につなげていく。

四賀は色々な方が協力してくださる。行政も包括も保健師も社協も公民館もみんな色々な方

が協力しているからこそ、このエルがうまく成り立っていて、皆さんに本当に安心して来ていただいているということは、つくづく感じています。

表（32 ページ）を作ってみたのです。時間もありますので長くは話せませんが、一つにまとめてみました。資料にありますのでご覧いただきたいと思います。

来ているメンバーは、コーヒーを入れたり、手作りのお菓子を作ったり。若い人も結構お見えになります。ここで対応するようになって、すごくいいなと思ったのが、最初来たときはこの人が元気ないな、暗い顔しているなという人が、2 回ぐらい来るともうニコニコした顔で帰っていくのです。その笑顔を見ると、やってよかったなと思うし、無口だった方が何かの会話の中に入ってくる、自分のことを少しずつ話してくれるということができてきているなと思っています。

色々な方が色々な話をしますが、ある時、テレビ番組の話が出たのです。「いつも何してるの?」「私、テレビ見てるよ。10 時過ぎにサスペンスものをやるのよね」「面白いよね」という話になって、そのうちにある人が「私、いつも途中で寝てしまって、誰が犯人か最後分からなくなるんだよね」って。

でも、2 回目に来たときには「私寝なくなった。あの話を一緒にするには、やっぱり寝てられないんだよね」と。ここへ来ることで周囲の話題に引き込まれていって、「昼間は寝ないでこれを見よう。話の中に入っていこう」となるのです。

それから、四賀に泥棒が入った話も出たのです。「どうしたら回避できるか」「回避はできないよね」「あの人はお金を出したから助かった」と。「私たちも少しお金を用意しておいた方がいいのではないか」とか、「いくら封筒に入れておいた方がいい」とか言って、そのような話題

で盛り上がりながらも、どうしたら安全に暮らせるかという話もしていくわけですね。

だから、そこに来ることによって自分が今まで知らなかった情報を得る。行政がどんなことをやっているのか、社協がどんなサービスをやっているのかを知ることができるという点は、すごく大事だなと思っています。

エルに来ているメンバーたちが、今地域の中で何が問題なのか、何が課題なのかを話しあう中で、災害の話になったのです。私たちはどこに逃げたらいいのか、何を持って逃げたらいいのか、そういったことについて話し合いをすることになりました。

エルに来ているメンバー、そしてそのメンバーが知り合いを連れてきて、約 60 名の方が集まりました。四賀は4つの地区が合併してできていますので、4 つに分かれて話し合いを行いました。地元の議員さんも参加して、そこで出た話やアイデアは、市の方にもつなげました。

だから、エルでやっていることは、エルだけでやっているのではなくて、本当に色々なところにつなげながらやっている。ここはそういった場所にしようと思いながらやっています。

時間が過ぎましたが、発表は以上です。

（向井氏）

山岸さん、ありがとうございます。

少子高齢化の中で、誰もが困りごとを抱えやすい社会になってきているように思います。そうした中で、誰かのために何かをしたいという思いを引き出しながら、互いに助け合い、支え合うような住民参加型の福祉サービスを創り出していく、そういった実践だったかと思います。

もっともっと「山岸節」を聞きたいところですが、また後ほど時間を設けますので、その際に話し足りなかったことをお聞かせいただければありがたいです。

それでは続いて、島高松町会の高山さんから

ご報告いただきましょう。

2 島高松町会未来づくり検討会

(高山拓郎氏)

島高松町会の高山です。よろしくお願いいたしますします。

島高松町会の紹介はスライドの1ページ目(35ページ)にあります。現在、会員戸数は533戸ということですが、アパート入居者の多くは非会員です。非会員でアパートの方は250戸ほど。もちろんアパートの方でも町会に入っている方はたくさんいらっしゃいます。

戸建ての住宅は360戸くらいです。人口全体としては1,469人という数字ではありますが、約1,500の方が毎日暮らしていらっしゃるかと思います。

この写真(36ページ)は、町内の公民館などの取組みの様子です。真ん中辺りにありますが、各組ごとの安否確認の取組みで、安否確認避難行動訓練というものを毎年行っています。

真ん中が各組に集まった状況で、左はそれが終わったあとに総合防災訓練をやったり、あるいは町会の話し合いを行ったりという状況を写真で示しています。

今日は「未来づくり検討会」について喋ってほしいと言われましたので、ここ(36ページ)に経過を書いています。

私も町会長になって、これで丸5年を過ぎようとしていますが、ちょうどコロナの真っ盛りの頃に町会長を引き受けました。

その当時といえば、皆さんも一緒かと思いますが、主な会議があるだけで、それ以外はほとんどなかった。

基本的に今までやってきたこと、今できていることを大切にしていこうということは大事ですが、今できないことを嘆いても仕方ない。できないことに目をつぶらないというのが一つの考

え方と言いますが、開き直ったような気分でスタートをしたわけです。

無関心を装うということが実に当たり前になっている世の中を何とかしなければと思ったことも事実ですが、一番はやはり、お互い何をしているか分からない、町会が何をしているかも分からない。町会費は払っているけれど、総会にも行かない。委任状で終わりというような実態があるわけです。そして、隣組は単なる回覧の手段でしかない。これを何とか思いました。

具体的にどうしていいかというのがあったわけではありましたが、たまたま松本市地域づくりセンター強化モデル事業というのが、令和3年、私が町会長になって2年目の年に、島内地区をモデル地区としてスタートしました。

さらに、島内地区でこのモデル事業をどうしようかというときに、町会連合会の中で防災を中心にやったらどうかという話がありました。そこで手挙げ方式でやろうということになって、なぜかすぐに手を挙げてしまい、「後先考えず」と言われたのが、思い出として残っています。

そんなことがスタートでしたが、せっかくやるのだから、みんなが参加する形でどう進めるかという中で、モデル常会事業として、一つひとつの常会できちっとやっていこうということになりました。

5つの常会がありますが、最初の年は一つ、次の年は二つ、最後の年に二つ、3年間かけて全ての常会をモデル常会に位置づけて、隣組の皆さんで、安否確認と避難行動計画を作ってもらおうということをやったわけです。

今まで隣組で動くということがまったくなかったところでやったので、最初の年は戸惑いの声もありましたが、それが徐々に徐々に広がって、来年はうちの常会にも来るのかなということも分かるようになってきました。

あとで申しあげますが、「町会だより」を最初の令和2年の9月頃からスタートさせて、毎月

毎月、こんなことがありました、こんな会議がありました、役員会でこんなこと決まりました、ということを回覧で回しました。それもあって、新年度初めの組長の皆さんに集まっていただく会議でも、「こんなことやって何になるんだ」とか「大変だとからやりきれない」とか「忙しい」とかいう声は、ほとんどありませんでした。

そこ(36 ページ)に経過が書いてありますが、そういうことをやりながら、安否確認についてはこれで5年目が終わって動き出していますけれども、常会長の一番の悩みはやはり役員選出であります。

町会長だとか、副長会長だとかは、うちの町会の場合、全体の中から一本釣みたいになされて、玄関に大勢の方がお見えになって、「うん」と言うまで帰らないというのが実態です。私もかつてそういうことをやっていましたので、これは大変なことだなと思いました。

しかし、常会長たちにしてみると、常会の中の役員を決めるために、数で攻めていくわけにはいかない部分があって、大変な場面がいっぱい出てくるわけです。そういった常会長の悩みをしみじみ語られまして、「よし、それじゃあ何とかしよう」ということで、この「未来作り検討会」というところに至ったわけです。

検討会に入るのは、町会の役員あるいは常会長、それからそれぞれの立場の皆さんで、それほど驚くような構成でやっているわけではありません。全体で40名という構成です。

最初は分科会形式でやろうかなとか、色々悩みましたが、分科会形式でやっても、一つにまとめていくのに非常にパワーが必要だなと思ひまして、「よし、みんなまとめてひとつの会議でやってしまえ」ということでスタートしました。

実はこれも単純にスタートしたということではなくて、課題を町会の中にきちんと落としていくという作業をしてきたつもりです。それから「来年はこういうことやりますよ」と、令和6

年の通常総会に課題をいくつも提起してきたということもあります。

それを実践するのにどうしようかということを考え、「未来づくり」という名前にして、未来を何とかいいものにしたいということで、未来づくり検討会をスタートしました。

ただ、難しい話をしてもいけない。私は町会活動のハードルが高いのではないかと感じています。そういう意味で、町会活動のハードルをどう下げるかということからスタートしないといけない。

それは命に関わる防災のこと。自分の命をどうするのか、隣の人の命をどうするかということが、最もハードルが低いのではないかと考えたわけです。そういうことで進めてきて、町会の中には、色々なことをお互いに話し合う雰囲気が出てきているのではないかと感じています。

そもそも、新興住宅といわれる団地ができてからもう30年になりますから、いつまでも新興ということではないのですが、同じ組の中でもどんな方がいるのか、名前は知っていても会ったことも見たこともないというのが、多くの組の皆さんの感想です。

今回の防災の取組みを機会に、「こういう方がいるのだ」とか「仲良しになれた」とか、そういう感想が寄せられるようになって、それもよかったかなと思っています。

そういう土台の上で、未来をどうしようかということで、色々欲張ってここに6点を挙げています(37 ページ)。すべて大変なことです。

2番目にあります財政については、昨年の総会で「町会の繰越金が少ないけれど大丈夫か」という意見が出ました。繰越金がないと3～5月くらいの支払いに汲々とするわけですね。このままではいけない、町会財政をどうするか。自分だけで悩んでも仕方がないので、みんなに悩みを分け与えてあげましょうということで、町会財政についても取り組むことにしました。

それから4番目の交通弱者対策です。昔はバスが豊科・穂高の方へ15分から20分に一本ずつ走っていました。大糸線の島高松駅はありますが、1時間に一本から少ないときは2時間に一本で、そこまで歩いていかなければいけない。駅から1キロとか500mとか何か基準もあるようですが、「本当にそこまで歩いていくのか？」という話にもなると思います。

スケジュールはここ(38ページ)にあるとおり、去年の10月から正式にスタートして、このあと2月24日に話し合いがありますが、10月11月は役員選出について、1月は財政について、2月は4月分を一緒にして交通弱者のあり方と助け合い活動について。ゴミ出しと雪かきですね。今年は雪がなくて幸いですけれども。そんなスケジュールで8月に全てをまとめたと思っています。

課題についてはここにあるとおりで、たぶん皆さんの町会で抱えている課題と同じかと思います。

話し合いの方式ですが、単に「意見ありますか」という一方通行にはしてはいけません。双方向の話し合いをやった方がお互いに経験値も上がるだろうということで、課題別の4つのグループに分けて、時間を決めてぐるぐる回って歩くというワールドカフェ方式をやってみました。これは非常に皆さんが楽しそうにやっていたのが印象的です。

先ほども言いましたが、言葉をお互いに重ねていくことでハードルを低くしながら、分かりやすい言葉で、分かりやすい課題を作っていく。これを一番大事にしていきたいと思いながらやってきているところです。

まだまだ大きな成果が上がっているわけではなく、「さあ、ここまでやってきたが、あとどうしたらいいのだろう」という、悩みもまだあります。

先ほども少し触れましたが、令和2年の9月

1日号から毎月1回、A4の両面で「町会だより」を出しています。これはあえて回覧にしています。一戸一戸配ると、多分そのまま押入れの不要広告へ捨てられてしまって終わりだなと思い、「みんなで読んでくださいね」という意味で回覧にしました。

役員会の様子だったり、行事の様子だったり、写真を交えながら、書くのも編集するのも印刷するのも町会長です。ということで今はやっていますが、これはまた体制が変われば考え方も変わるし、デジタル化もスタートしていますので、別のやり方もあるのかなと。

町会だよりには、島高松町会のシンボルマークを入れて、皆さん町会員ですよということをきちんと分かるようにもしてきたつもりです。

最後のところにもあるとおり、いつも町会の皆さんにも言っているのですが、「こんな町会になりたいね」と、みんなで声をかけていくことが大事だと思います。

用事だけ済んだら、伝えることだけ伝えたらおしまいの会議ではなくて、「オラが町会」を意識してもらうために、「こんな町会になりたいね」「みんなで動いていきましょう」ということを言ってきました。

一番は、参加してよかったと思える機会をたくさん作ること。先ほども言いましたが、会議はとにかく細かい資料を出してきて、よく分からないし、つまらない。「けど、義理だで行くわ」という人が多いわけですが、やっぱり「行って面白かった」という機会をどうやって作っていくか。

簡単ではないですけども、少しずつ少しずつ、そんな雰囲気を作っていければいいかなと思いますし、みんなで動き回れるように、みんなを励ましながら町会づくりができれば、なおいいいということです。

そして最後に、先ほども山岸さんのお話にもあったのですが、お互いが「助けて」と心

の底から言えるかどうかというところは、町会の肝だと思っています。「助けて」と言える町会づくりに取り組み、「オラが町会」を目指したいと思っています。

ちょっと尻切れトンボのお話で聞き苦しかったと思いますけれども、以上で私の報告とさせていただきます。ありがとうございました。

(向井氏)

高山さんありがとうございました。

町会は地縁組織の代表的な例だと思います。そうした地域の中での人と人とのつながりが、この松本、信州といえどもすごく希薄化してきている現状があるように思います。

その中で、どのようにすれば町会に対する無関心さを乗り越えるか、そうした色々なチャレンジ、町会改革といえるような取り組みをご報告いただいたかと思います。どうもありがとうございました。

続いて、国型のコミュニティスクールという形で取り組んでおられる大野川小学校のコミュニティスクールにて、地域学校協働本部活動推進委員をされている相馬さんからご報告いただきます。よろしくお願いします。

3 大野川小中学校コミュニティスクール

(相馬落子氏)

大野川小中学校のコミュニティスクールコーディネーターをしております相馬落子です。よろしくお願いします。

初めに、このコミュニティスクールのコーディネーターという肩書きですが、最初いただいた正式名称が大野川小中学校地域学校協働本部活動推進員という長い名前でした、これを覚えるまでに時間がかかりました。やっと覚えましたが、今2年目になります。

私が大野川区、乗鞍の地域に移住してきたの

が10年前です。元々、小学校や保育園、幼稚園で働いていて、子どもに関わる仕事を一通りやってきました。

乗鞍の魅力は圧倒的な大自然です。自然に癒されるし、私は人がいっぱいいるところが苦手なので、一人になれる時間が作れるというのが最大の魅力で、気づいたら10年住んでいました。

そうした中で、子どもと関わることをやりたい、子どもと自然の中で過ごしたいという思いから、「自然保育」というのを立ち上げたのですが、その活動も見ていただいた中で、このコミュニティスクールのコーディネーターという仕事をいただけたのかなと思っています。

地域づくりでは、移住推進の活動にも関わっていますが、初めに結論から言うと、地域づくりで一番大切だと思うことは、やはり連携することです。色々な立場の人たちが集まって、学校や地域、行政、保護者・家庭の皆さんが、コミュニケーションを取っていくことが一番大事だなと思いました。

そのためには、それぞれが受身ではなくて主体的に動くことが大切で、皆さんが主体的に動く中で、話し合いを重ねる。そして意見を出し合うだけでなく、決定していくことで進んでいく。そこで課題が共有されるので、それもすごく大切なことかなと思いました。

具体的にお話したいと思いますが、この大野川小中学校のコミュニティスクールは、2023年4月に、松本市では初めて導入となる国型のコミュニティスクールとして開始されました。

コーディネーターの業務としては、委託料をいただいて、その中で予算を執行したり、学校の授業の中で先生方から「こういう地域の講師の方いないかな」という要望をいただいて、地域の方を紹介したり、私の方から、「地域にこういうことできる人いますけど、学校の授業で子どもたちにどうですか」といった紹介もしています。

あとは行事の企画などしていますが、コーディネーターをやっていると、地域の人は学校の中のことをあまり知らないのだなということを感じます。学校に来るのはやはり保護者が多い。地域の講師になれば学校に入ることはできますが、なかなか敷居が高い場所なのだと思います。

地域の人たちがもっと気軽に学校の中に入れる仕組みを作りたいなと思い、例えば、「おやき作り」を子どもたちだけでやるのではなく、地域の人と一緒に作りませんか、というような行事を企画しました。

コミュニティスクールの中では、学校運営協議会という会議体がありまして、PTAの役員、町会長、地域の団体、地域づくりセンターや公民館の方、そして学校の職員という構成で会議が行われています。

会議の内容ですが、昨年度、今年度と主に話し合われてきたのは、学校登山についてです。これに一番時間を費やしてきたかなと思います。

学校登山は、今まで2年に1回行われてきたのですが、学校として運営していくことが難しい。学校の先生方にも登山をやる方が少なくなってきた、危険も伴う行事を学校の先生で企画していくということが難しく、存続が困難というところで、話し合いが行われました。

学校登山は、お隣の安曇中学校と一緒に合同で行っていて、一番難しいといわれている奥穂高岳に登っているのですが、頂上まではかなり厳しいので、頂上に行けなくても、途中の涸沢ヒュッテまで行けばよいのではないかと、というのが学校からの意見でした。

でも、地域の人からすると「行くからには頂上を目指してほしい」「登頂してほしい」「頂上に登ってこそ分かるもの、感じるものがある」という意見がありまして、地域の人の思いと保護者の方の思いと、それから学校の思いと、そこですり合わせができたのかなと思います。

学校としては存続が難しく、どうしようかというところでしたが、せっかく地域と学校とつながる組織としてコミュニティスクールがあるので、来年度からはそこで登山の運営をしようという形で今進んでいます。

まだ色々と課題はあります。

学校の運動会を町会の運動会と一緒にやっているのですが、地域の人も保護者も一緒に参加していて、「あの音響設備、すごく音が悪いね」という話が出ました。

学校だけで購入するのは予算的にも厳しい。だったら町会や観光協会でも使用する機会があるので、共同で購入して共同で使えるようにしたらどうかという話になり、学校だけでなく、地域のつながりによって課題解決ができて、すごいなと思いました。

あとは、中学生が総合的な学習としての地域の課題に取り組むということをしています。そこでも地域と学校をつなぎ、地域の人は今どんな課題に直面していて、どんな活動をしているのだろうということで、地域の協議会に中学生が参加したり、中学生の総合の学習で地域の人と一緒に課題解決に向けてやっというような動きをしたりしています。

また、松本市全体でもそうですが、部活動の地域移行の課題があると思います。地域移行の話が出たとき、ここ（安曇地区）ならではの登山やアウトドアとかに親しんでほしい、自分はガイドをしているので、登山クラブやアウトドアクラブをやりたいのだけれどどうですか、というような地域の方からの発信がありました。

あとコミュニティスクールと別にもう一つ、同じ2023年から始まった制度で、松本デュアルスクールという制度があります。この制度は、都会から住民票を移さずに松本市内の学校に通学できる制度ですが、これも大野川で積極的な受入れをしています。

大野川小・中学校合わせて30名ほどの小規模

な学校です。先ほど山岸さんのお話にもあったように、大野川区も高齢化、少子化、人口減少が問題になっているのですが、地域の方にとっては、この学校というのは無くしたくない、無くなっては困るという存在です。数年前、お隣の安曇と奈川と一緒にいるというような話もあったのですが、やはり乗鞍の人たちは、「自分たちの学校を残したい」という思いが強かったと聞いています。

実績としては、昨年度は4家庭、そして今年度は6家庭7名が、まさに今、冬の時期に利用しています。

課題として、この制度は1ヶ月から1年の受入れのため中期滞在になるのですが、その受入れ住宅が少ないということがあります。現状、シェアハウスや宿泊施設を利用していますが、一戸建てやアパートといった家族向けの住宅が無いというところが課題です。

まだ始まって2年ですけれども、地域の住宅問題の解決や受入れ体制の整備など、教育委員会や学校と連携していかないとやっていけない制度なので、週1回くらい連絡を取り合って、どうしようかという話をしながら、探りながらやっています。

まとめると、地域づくりというのは一人ではできなくて、だからやはり連携が必要なのだと思います。そしてそれぞれが主体的に動いて、自分ごととして捉えることが大切だと思います。

学校運営協議会で、なぜこんなに活発に意見が出るのだろうということを考えたときに、様々な立場の人が集まっていますが、それぞれがやらされているというような感じではなくて、皆さんが対等な立場で「これやったらどう？」

「こうしたらいんじゃない？」というこということを、対等に話せるのがいいのかなと。あとは、「こうしたんだよね」という希望、熱量がすごくあるなと感じています。

最後に個人的に感じていることですが、一つ

のことにとらわれすぎず、選択肢の一つになるということ。人口が減少しているから移住を推進しようというような意気込みも必要ですが、今は全国的にどの地域でも人口減少はあると思うので、移住だけでなく「こんな素敵な場所あるんだけど、滞在してみない？」とか、「こんな関わり方あるんだけど、1日でも2日でも一緒に作業してみない？」とか、移住までつながなくても、気軽に選択肢の一つになればいいなと思います。そして、この少人数の良さやメリットを感じてもらえたらなというのもあります。

私が一番大切にしていることなのですが、子どものためにと考えると、どうしても自分を置き去りにしてしまうのですが、やっぱり大人が楽しんでいる姿を子どもに見せることが、子どもも大人も幸せになる近道ではないかなと感じています。

簡単ですが以上になります。ありがとうございました。

(向井氏)

大野川小中学校のコミュニティスクールということで、相馬さんの話からは、地域に学校があることの意味というものを、すごく強く感じました。

子どもたちを核としながら、地域の人たちが協働し、そこである意味、子どもを核とした地域づくりが生まれていると。そうした地域と学校との協働を推進する核としてコミュニティスクールが機能していて、協働を促進する役割としての相馬さんのコーディネートというものを強く感じた次第です。どうもありがとうございました。

【ディスカッション】

4 地域に対する問題意識

(向井氏)

三つの報告を受けて、それぞれの共通点や意

義を少し深めていく時間を 30 分程度取れたらと思います。その後、フロアも交えて質疑という形で進めていきたいと思いますのでよろしくお願いします。

それではまず一つ目ですね。お三方ともすごく魅力的な実践をされてきたと思うのですが、その活動をする前提として、やはり地域に対する問題意識、危機意識があったことが活動の大事な出発点だったのではないかと思います。

それは山岸さんでいえば、困りごとといった中身であり、高山さんでいえば、町会の課題ですね。相馬さんは、魅力ってということも含めて、大野川区の魅力や課題ということについてどう考えられてきたのか、お三方からそれぞれお話しただければと思います。

では山岸さんからお願いします。

(山岸氏)

困りごとは、色々なところから「おばあちゃん、今まで元気だったのにできなくなった」ということがたくさん出てきた。

最初は、隣近所で助け合いができればいいなと思っていたのだけれども、隣近所も同じように年を取ってくる。若い人がいるから若い人に頼めばいいと思っても、若い人たちは朝早く勤めに行って帰りが遅くなってしまふ。土日ならいいかなと思うと、子どものクラブとか習い事とかでなかなかできない。

お年寄りも、そういう状況が分かっているのでもう少し我慢しよう、もうちょっと待ってみようとなる。結局、お年寄りも限界まで我慢した末にお願いしていることなので、やっぱり早くやってあげた方がいいのではないか気持ちもあるけど、やはり隣近所で遠慮している部分がある。

そういうことを知った中でも、せっかく住民同士の支え合いを大事にしていきたい四賀なので、この地域ではできないかもしれない、でも

隣の地域にだったら、もしかしたらできる人がいるかもしれない、というところまで考えを伸ばしていく。

そういうふうにして、その人を支える活動ができたらいいなということで、色々な「隊」ができたのです。どうしたらこの人が今日一日良かったと思える生活ができるかを考えて、その地域だけに限らず、違う地域に持っていったということですね。

(向井氏)

ありがとうございます。高山さん、お願いします。

(高山氏)

特に働き手の皆さんというのは「夜だけ町会員」みたいな、夜と土日は町会員という感じなのでしょうけど、高齢社会にあって、かつて壮年期に土地を買って住宅を建てた人も、ほぼりタイヤして地域に戻ってきている方は多いと思います。

ただ、そういう方たちがまだまだ町会のことにあまり直接タッチしてない。やっても組長だけだね、時々安協とか回ってくるよねという程度の話です。それもとっても大事なのですが、やはりどうしても町会活動の「表面積」が増えていかない、という気がしています。



(写真：左・山岸氏、中・高山氏、右・相馬氏)

自分もやってみて分かったことがいっぱいありますが、もっとみんなが関わることで、例えば、島高松の上に町会活動というネットがあるのだとしたら、そのネットがどんどん細くなっていくということが本当はいいのだろうけれども、それがなかなかそうならなくて、じれったい思いをしているところです。

でも、僕らにも見えない部分、町会の役員やっけていても見えない部分がたくさんあって、先ほども少し触れましたが、安否確認避難行動計画を作るということだけでも、助けなければいけない人はどこに何人いて、状況はどうなのかというところまで入っていかないと、「命の見える化」にはならないと思うのです。

ですから、僕らの見えない部分で色々なことが起きているのだろうと、楽観的に捉えることも大事かなと思っています。

リアクションがなかなか見えないこともありますが、ただ、安否確認避難行動計画で訓練をすると、参加戸数で見ると、8割くらいの会員は参加してくれます。できるだけ大勢、家族も参加してくださいという呼びかけもしていますが、去年の11月に行ったときは、町会員の50%の方が公園や四つ角に集まって確認をしました。

それから、寝たきりの方もいるお宅は、誰と誰が誰を助けるということまで決めて落とし込んであります。それがいざとなると動くかどうかという不安はありますけれども、それが一つの安心感であり、先ほど言った町会に張り巡らされているネットが、細くなってきつつあるということかなと思っています。

(向井氏)

ありがとうございます。相馬さん、いかがですか。

(相馬氏)

魅力と合わせてということなので、初めに魅

力をお話すると、自然が豊かで、私もそこに惹かれて移住をしたのですが、不便なことも多いのです。というのは病院がなかったり、スーパーがなかったり、コンビニも電車ありません。

それをあげたらきりがなくて不便なことだらけですけど、逆に私はないことで、それに頼らない暮らしができる。自分で考えて無いものは作るというスタンスでやっていけるので、すごく心も豊かになるし、楽しいというところで、私も10年住み続けているのかなと思います。

話し合いというところでいうと、積極的に動く、自分から「これやりたい」「やろうよ」と言って、人を巻き込んでいく力がすごいというか、積極的に動く人たちが多いなというのを感じています。

課題でいうと、デュアルスクール制度もそうなのですが、行政主体でいくと、どうしても住民は受身になってしまう。うまく伝えていくことが大切なのかなと思います。

制度が始まることを受けて、私たちはどうなるのかなと不安に思うことや、始まってからも何をやっているのかが伝わらないと、不安や不満になって、ネガティブな思いで憶測や噂が広まってしまう。

私自身は学校の中に入っていることで様子が分かり、やれることや苦勞していることも見えますけれど、それを学校の中にいない地域の人たちや保護者にも伝えていく努力は、必要だなということを感じています。

(向井氏)

ありがとうございました。

人口減少や高齢化が進んでいく中で、先ほどの山岸さんのお話では、元気だったおじいちゃん・おばあちゃんが、交流がなくて元気なくなっていったという話もありました。本当に命に関わるような、行政だけでは支えきれない、切実な課題というものが地域の中に山積しつつある

というのは事実かと思います。

一方、そうした中で、地域の中の助け合いということは非常に重要になってくるわけですが、ある意味では、高齢化社会になり、今まで会社人間だった人たちが地域に戻ってきている。高齢化社会だからこそ、多様な人材が地域の中にいるということもまた事実で、そうした人たちが何か地域の中で活躍できるような機会を作っていくということが潜在的に求められているのではないのでしょうか。

また、相馬さんのお話の中で、「無いからこそ作る」という話もありました。ただ受身になってサービスを享受するのではなくて、自分たちで、手作りで何かを作り上げるからこそその楽しさ、そうしたものをどのように分かち合っていくかがすごく大事になってきているということなのかなと、お話を聞かせていただきました。

5 「対話」することの意味

(向井氏)

続いて、本日のテーマの中で「対話」ということが掲げられていますが、この「対話」ということについて深めたいと思います。

先ほど申しあげたような様々な課題が地域にあって、何とかしなければいけないという状況があるわけですが、そうした中で、多様な人たちが参加し、連携しながら「対話」をしていくということを、お三方とも重視していたというのが、すごく印象的でした。なぜこの「対話」ということが重要なのかということを考えてみたいと思います。

山岸さんのお話の中に、そもそも「対話」についてどのように考えているのかということについて、ヒントがあったように思います。「困りごととはアンケートでは聞けないんだ」とか「対話を通して困りごとは見えてくるんだ」という話

がありました。高山さんのお話にもそのような観点があったかと思います。

ともすれば、人と人とやり取りをしながらやるというのは、手間がかかるし、労力もいるし、時間もかかると思われがちですが、なぜ皆さんは「対話」を重視しているのでしょうか。また、そこに込められた「対話」ということの意味をご説明といただければと思います。

この「対話」の意味について意識的に書かれていらっしゃるのが山岸さんだったと思います。山岸さんのいう「対話」は、どういう意味で書いたか教えていただけますか。

(山岸氏)

例えば、「かかわり隊」もやりっぱなしではなく、関わった人のところに再度訪問して「どうでしょうか？」と確認をしに行くのです。おじいちゃんならおじいちゃんのところに行って話をして、「どうですか?」「うまくいってるよ」くらいの感じで。

そのうちに様子を見ていたら、庭に軽トラが止まっていたのです。「おじいちゃん、軽トラでどこかへ買い物に行ったりするんだね」と言ったら、「こんなのただ置いてあるだけだわ」と。

「鍵は子どもが持っていっちゃって、乗っちゃいけないって言われるから、ただ置いてあるだけだ」と。それで、どこにも行けないという話になって、「じゃあ今まで車が使えたときは、どこへ行ったんですか」と聞いたら、「友達とそばを食べに行ったり、寿司を食べに行ったり、落語を聞きに行ったことがあるな」というような世間話をしていくのです。

徐々に会話をしていくと、お蕎麦屋さんはどこへ食べに行った、地域の誰と行ったといった話がどんどん出てくる。「多分あの人も車運転できなくなって、俺と同じだわ」と。

それから「こっちの部屋に上がってみろ」と言われて行ってみると、「このカレンダー、今は

1、2個しか予定がないけれど、昔はびっしり書いてあったんだ。それがどこも行けなくなると、このカレンダーには何も書くことがない。テレビを見ていてもつまらない」と。

そんな話をしていく中で、「お買い物に行けないね」という話をしたら、「子どもがたまに来てくれるし、『かかわり隊』の人も食べ物を持ってきてくれるから何とかやっている。野菜も自分でいっぱい作っているけれども、やっぱり温かい弁当が食べたいな」という話になるのです。

でも、農協だってコンビニだってあるから、その弁当を買ってくればいいねと言うと「そうじゃない。俺は俺のために弁当を作ってほしい。そういう弁当が食べたいんだ」という話なのです。「自分のために作ってくれと嬉しいですよ」みたいな、そんな話をしてくる。

何が言いたいかというと、何度も足を運ぶことで関係性ができてくる。そうすると、今までの会話じゃなくて、もっと具体的になってくるのです。自分はこんなことが困っていて、こうなったらいいなとか。

そういう具体的な話を社会福祉協議会に持ち帰って、今こんなことが上がってきているのだけれどどうしよう。温かいお弁当が食べたいって。だったら、地域の人たちにお弁当づくりやりたい人がいっぱいいるはずだよね。その人たちに声かけてみようかな。やってくれそうな人に、実はおじいちゃんたちから俺のために温かいお弁当を作ってほしいといわれていると相談したら、「私、作ります」となったわけですよ。

今もその活動はやっていて、大体平均30個～40個を作っています。弁当づくりに関わっている人は15人くらいで、本当にみんな「あの人のために弁当を作るね」みたいな感じで、食材もなるべく地産地消にしようとか。

そうすると配達する人が「四賀で作った野菜」だよと対話をしながら関係ができてくる。「今度ばあちゃん何食べたい？何がいい？」「ちょっと

こないだのはしょっぱかった？」といった話が出てくる。

そんなふうにして会話から対話になってきて、そこで色々な本当の困りごとを拾うことができると私は考えています。

(向井氏)

普通の会話だと、なかなか本音を話さない。最初から自分自身の困りごとをペラペラと喋る人なんていないですよ。

「地域づくり」といったとき、確かに会議体はあるけれども、そこで住民の人たちが本音の思いを話しているかということ、必ずしもそうではない。

山岸さんは、「会話」と「対話」を分けて語っていらっしゃるんですけど、そこでいう「対話」は、形式的な付き合いとしての会話ではなくて、その人自身の本音の思いが引き出された、そうした水準でお互いに双方向にやり取りするものを、「対話」と言っているのだなと思いました。

つまり、その人自身がこうありたいというような、初めは「声ならぬ声」なわけですがそれでも、そうしたやり取りを重ねながら、自分自身は本当に何を求めているか、それを一緒に探り当てながら、それを掴み合い、さらに居場所や配食事業のような形で具現化をしていく。「会話」から「対話」へ、そうしたアプローチを非常に大事にしているなと思いました。

それから、皆さん、山岸さんのお話にも引き込まれましたよね。軽トラやカレンダーの話から本音を引き出していく、山岸さんと地域の方たちとのやり取りの深さみたいなものをすごく感じましたが、そうしたところからその人の暮らしの背景にある思いを探って、お互いに共有していくということの大事さをすごく感じました。

6 課題を共有する仕掛け

(向井氏)

時間が迫っているので次に進めますが、そうした「対話」を促進するために、どうしたら「対話」が生まれるのかを少し考えてみたいと思います。

お三方の話の中では、そうした対話が生まれるような色々な仕掛けを作られていたように思います。一つは、課題を共有していくこと。地域の皆さんにはそれぞれに思いがあるわけですが、それぞれの立場を超えて自分たちはこういったことに取り組んでいこうよというような、課題を共有していくことを丁寧にされていたように思います。

異なる属性を持つ多様な意見を持つ人たちが、共通に地域の中で課題を持つ、そうした仕掛けはどうすれば作っていくことができるか、高山さん、お話しいただけますか。

(高山氏)

山岸さんのお話に引き込まれて、ちょっと考えている時間がなかったのですが、やはり、会話をどのように対話にするか、それはとても大事なことだなと思っています。

一方通行の言葉は、対話とも会話とも言わないのでしょうか、町会の中で「俺が言ったってさ」とか「俺が喋ってもさ」という感覚をお持ちの方が多いいのは感じますよね。自分にもそんなところがありまして、「どうせ俺が喋ったってさ。静かにして早く帰った方がみんなに喜ばれる」というような、極論をいえばそうなのです。

防災の取組みにしても、組長の皆さんは、当然戸惑いがあるわけですね。自分で好きで組長をやっているわけではない。順番で今年組長だからという思いが本音の部分ではあると思いますが、その人たちをグループワークの中に投げ込む、と言ったら失礼ですけど、一緒に始め

ると、やっぱり組長の皆さんから色々な反応がある。

あるいは、司会をしている人が「それいいね」とか、ポストイットに書いて貼り付けたりとか、それをグルーピングしたりとか、そういう作業をしながら、そこに一体感が生まれる。その経験値が大事ななと感じました。

それともう一つは、自分たちの心得として、例えば、組長会議がありましたと。組長会議で出た意見は、こういう意見ですということを、また町会にフィードバックするというか、落とし込んでいく。すると、もしかしたら、俺が言ったことがここに書かれている、ここにこんな反応が出ている、ということを経験する。その繰り返しで大事ではないでしょうか。

普通、町会の会議で手を挙げて、理路整然と物を言える人は、実はそんなにいないのです。色々と思いがあって、ああしたらいいのに、こうしたらいいのに、自分ならこうやるのと思う人も多分いると思います。

ですから、小さなグループで話すと意見がたくさん出てきますが、それを主な意見でまとめるのではなくて、細かな意見も、こういう意見がありましたということで、町会の役員が「ああだね、こうだね」と書いていく作業を、この辺の言葉で言えば「ずく」を惜しんではいけないと思っています。

語れば何とかなるという経験をして、自分の思いを言葉にして、その言葉を形にしていくプロセスが、町会全体としてもエネルギーが出てくるのではないかと感じています。

(向井氏)

ありがとうございます。すごく大事なことを高山さんがおっしゃってくださっていました。なぜ一歩が踏み出せないのかと言ったときに、自分自身の意見なんてたいしたことないという

諦め感がすごく強くあるのではないかと。

だから、そんなことを言葉に出しても、という気持ちにならずに済むように、声を出すことが大事であると。声が発せられるとそれに賛同してくれる人たちが地域の中にはいて、勇気を持って声に出してみた。そうしたら、すごく共感してくれる人がいたということがある。それで、実際にやってみた。そうしたら喜んでくれる人たちがいて。というような、そうした連鎖を実際に「見える化」してく中で、自分たちが関わって、こんな町づくりがしたいんだよということが共有されていく。

その相手からの反応が自分自身にも帰ってくることで、その人自身の喜びにつながり、次の行動へと連鎖していく。このような善意を回していくような関係を作っていくためにも、一人ひとりの持っている力にフォーカスを当てて、みんなで共有していく。そうすることで諦めずに済むような環境を意識的に作っていくことが重要だと思います。

7 「対話」が生まれる環境づくり

(向井氏)

もう一つお聞きしたいのですが、単にそうした会議の場や組織体があれば、対話が生まれるというわけではないとすると、対話が生まれるための環境をどう作っていけばよいかということについて、ご示唆いただきたいと思います。

山岸さんでいえば「ふくふく亭エル」というみんなが集える場を作ってらっしゃる。高山さんでいえば、双方向のやり取りができるようなワールドカフェ方式のグループワークで、対話が生まれるような意識的な場を作られている。相馬さんでいえば、学校運営協議会を対話の場にしようという努力があったと思います。

いかなるような場であれば、人々が対話し、諦めずに済むような期待を持てる場になるのか

ということです。なかなか難しい問いですね。相馬さん、何かありますか。

(相馬氏)

今、高山さんがおっしゃっていたように、自分が勇気を出して声を上げたことが紹介されて反映されると、自分やってよかったなって。自分がやったことが認められているということが、すごく大事だなと思いますが、やはり声を上げるのも大切だけれど、声を上げっぱなし、意見の言っぱなしではなくて、その場にいる人たちが聞くという姿勢。耳を傾けることが大事だなと思います。

(向井氏)

双方向にするということですね。「言う」。そして「聞く」。そのような双方向のやり取りがあるような場であること。そしてその意見が受けとめられる、そうした受容的な関係がある場であるからこそ、対話や具体的、協同的な活動が生まれるのではないかと思います。

8 つなぎ役として意識すること

(向井氏)

お三方は、そのような対話を促進するコーディネータ的な役割を担われているのも特徴的でした。つなぐ役割のことを高山さんが「つなぐ専門性」とおっしゃっていたかと思いますが、それはすごく大事なことはないかと思います。

多様な人たちをつなぎ、力を引き出していく、そのような役割をお三方が担っているとするならば、どういったことを意識して取り組まれているのでしょうか。

(山岸氏)

色々な人が集まると、色々な価値観や思いがあります。だけど、この会議の目的は何か、何を

質問しようと思って来ているのかということをよく話をすることで、これを実現するにはどうしたらいいのかということを考えて、調整していかなければいけない。

面倒なことがあると「そんなの無理に決まっている」「人がいないからできない」となりがちですが、そうではなくて、人がいないなら人をどうやって集めたらいいのかというところから話をしていく。そういう調整ですね。

色々な意見があって、どれもこれも良い意見でまとまらなかったら、「今年はこれをやりましょう」みたいにしています。でも、やはり色々出た意見をなるべく実現できるように努力しています。

楽なことを考えたら楽なのです。でもそれって面白くない。いろいろ考えて実現できたときの楽しさがあって、それをみんなに味わってもらいたいなど。

（高山氏）

自分もそうなのかもしれませんが、高みの見物をする人を減らしたいと、いつも思っています。何でもそうですが、ネガティブなことを言うことは、とても楽なのです。「あれできてねじゃねエか」「これ駄目じゃねエかい」「どうしてあのときやってくれなんだだい」とかですね。それはそれで対応する必要があるとは思いますが、それでも。

以前、会議で一度やったのは、「否定的な発言はしないで、前向きな発言だけをしてください」というやり方。そうやってやると、脳が温まるというか、「いいこと探し」をしようとする。それを自分たちでやるためには、どういうプロセスが必要かというところに落とし込めれば、最も良いことだなと思います。

そういう意味では、ポストイットに書いてもらって貼り付けて、それをまた我々が集めて、大変だけれどもパソコンに落としてグループ化

して、考え方はこうだねと整理していく、このプロセスをしっかりとやらないといけない。手抜きしてしまうと「まあいいわ、また次にやれば」となってしまうので、大事なことはきちっとしておいた方がいいかなと思います。

町会のハードルを下げるというのは、言った意見に対してこう反応してくれたね、という経験値をいくつ積み重ねていくか。やがてはその人が役員の立場になったときに、またその繰り返しをやってくれるかなど。そういう意味も含めて、「未来づくり」と名付けたつもりです。

（相馬氏）

意見が色々出てまとまらないとき、何か自分の意見だけで押し通すとか一方的に決めるとか、そういったことなく、コーディネーターの役割は、結婚相談所みたいな感じだと思っています。

今でいうと、マッチングアプリかなと思っていますが、双方の意見を聞いて、こちらはこういうことをしたい、あちらはこういうことしたい、こことここだったら上手くいくのではないかなとか、ここは困っているからあの人を呼べば解決するのではないかなとか、そういう解決の糸口を見つける役なのかなと思っています。

自分も意見は言いますが、出過ぎず、受身になりすぎずという、バランスを保つことに気をつけています。

（向井氏）

相馬さんから、結婚相談所やマッチングアプリにたとえた話がありました。相馬さんの立場を考えると、学校教員としての経験もお持ちで、また地域住民でもある。つまり学校教員のまなざしと地域住民のまなざしという二つの立場に立てる。そうした役割を担える方なのだと思います。

ともすれば、物事の議事進行をするときに、

自分自身の意見を絶対視してしまい、そこにいきなり誘導するかということに意識が向けがちですけれども、それではよいコーディネートというものはできない。0か100かではなくてお互いの意見を調整しながら、色々な人たちが納得感を持って前に進めていく。そうした調整をしながら進めていくことは大変さや面倒さはあるけれども、そのような進め方だからこそできる地平というものもあると思います。

相馬さんの発表の中で、学校登山の話がありました。これはすごく典型的な話です。危ないから止めるという話だったら、「それまで。」となってしまうわけです。

しかし、地域住民の学校登山を大事にしたいという思い、でも生徒たちが安全に登山をするだけの支え手がないという学校側の思い。それぞれの思いを大事にしながら、どうすればそれぞれの思いが叶うのか。お互いの意見をすり合わせ、調整をしながら、互いに「ずく」を出し合いながら、よりベターなやり方を、みんなで手足を動かしながら考えていく、そういうプロセスだからこそできるものがあるのではないかな。そのような地域づくりの可能性を、お三方のお話の中から見せていただけたかなと思います。

9 質疑応答

(向井氏)

それでは残り 30 分程となってしまいました。フロアにもお三方にお話を聞きたい方がいらっしゃると思いますので、どなたか質問した



いという方がいましたら、手を挙げてご発言いただければと思います。いかがでしょうか？

(質問者①)

私は、子どもたちの自然体験学習を 10 年くらいやっていて、その関係で割と地域に入っているのですが、それと同時に、10 年以上前から小学校のコミュニティスクールに関わっています。

当時の校長先生がすごく力を入れてくださって、地域住民がたくさんクラブ活動にも応援に入っていたのですが、コロナ禍で地域の人たちが学校に入れなくなる、その間に引き継ぎがされなくなってしまいました。

先ほど相馬さんのお話の中で、学校のことを地域の人知らない、もっと地域の人に入ってきてもらいたいという話がありましたが、地域からすると、逆に地域のことを学校が知らない、もっと知ってもらいたいということ、公民館長さんや地域の人とよく話をしてきました。

それで、何年か前に市長さんや教育長さんと直接お話をさせていただいたときに、どんどん学校に入って、いいことを地域の人でやってくださいと言われたのですが、コロナ禍で 10 年間積み上げてきたものがゼロに戻った。振り出しに戻ってしまったということを実感しています。

またみんなで先生たちを応援できたらいいねと、公民館長さんや地域の有志も学校に入りたいと思っているのですが、学校にそれをお伝えしてもなかなか進まない。何回か話はしていますが、諦めつつあります。先生方も異動があるので、入れ替わりがあるとまったく以前のことを知らないということがあって、その辺をどうしたらいいか、アドバイスをいただけたらと思います。よろしくお願いします。

(向井氏)

コロナ禍の中で色々な地域活動、コミュニ

ティスクールも含めてですが、1回止まったものをもう一度動かしていくということの大変さがあるように思います。そうした中で、学校と地域との連携ができていないという現状に対して、アドバイスをいただきたいということなので、相馬さんいかがでしょうか。

(相馬氏)

10年以上活動されているということで、2年経ってない私が言うのもなんですが、改めてコーディネーターの役割が重要だなということを思います。

学校の先生たちは、やはり地域のことを知りません。なので、私の役割としてできることは、学校の先生たちに地域を紹介することで、「休日でも朝早くでもいいから、ここの山、綺麗なのでこのスポットに行ってください」とか、「この飲食店すごくいいですよ」とか、地域について自分がいいと思ったこと、地域の人たちがいいと思っていることを学校の先生に伝えていくしかないなと思っています。

学校の先生も2、3年で異動になるというところがネックだとは思いますが、それはもう仕方がないことなので、毎年毎年同じことでもいいから伝えていくということをしていきたいなと思っています。

学校の先生たちは地域のことを知らないけれども、知ろうとはしてくれているので、知り方が分からないというところで分断されているのだと思います。

地域の人たちは地域の人たちで、子供たちのためにやりたいことをたくさん持っているのです、そこをつなげるという意味で、学校に入る敷居を低くして、地域の人たちに入ってきてもらう。学校の先生たちもそういうマインドになるようにするのが、私の役割だなと思っています。

(質問者①)

ありがとうございます。

学校は、教頭先生や校長先生が窓口なので、そこにお話をするのですが、そこで終わっていることが多くて、とても残念に思っています。

例えばですけど、教育委員会から確実につなげていく、引き継ぎをしていくということをしてもらえたら、もしかしたら止まることなく、話をつなげていかれるのかなと思っています。

2ヶ月ぐらい前に小学校の先生とお話することがあって、「実はこういうことしていたのです」と言ったら、「全く知りませんでした」と言われました。

私も自分の子どもが在籍しているときは、もっとコミュニケーションを取れたのですが、もう成長して学校にはいませんので、今は地域のおばあちゃんとして関わっています。もう少し学校の方にはっきりした窓口があったらいいなと思います。ありがとうございました。

(向井氏)

ありがとうございます。

教員の多忙化という中で、どのように教員が地域とつながっていけばいいのか、学校の先生自体もなかなか見えない、地域のことが分からない部分が多々あるのかなと思います。

でも、もちろん学校の先生たちは、子どもたちの成長を強く願っていて、その子どもたちを大事に思う思いは共有できると思います。地域と関わることで子どもたちがこんなに成長し、変わるのだ、そのような姿をみんなで共有しながら、こういうふうに関わっていけばいいのかといった気付きを学校の先生たちと重ねていく、味方を増やしていくといったことが大事なのかなと思いました。

また、地域と関わりたくないと思っている教員ばかりではないように思います。必ず心のある教員は学校の中にいらっしゃいますので、そうした人たちをうまく発見して、手を取り合っ

ていくことが大事かなと思います。

学校には学校の事情、地域には地域の事情があるので、そうした両方の事情をよく見ながらコミュニケーションを取っていく必要があるのかなと思います。

フロアから他にありますか。

(質問者②)

民生委員をやっています。夫は町会の町会長です。よくあるパターンかもしれないですけども。

高山さんにお聞きしたいと思います。そもそも基本の基かもしれませんが、常会という言葉がよく分かりません。私の町会には、組はありますが常会というものが無いので。時々聞くのですが、常会というものが何なのか。

それから先ほどのお話の中で、審議会というのがありました。これはうちの町会にはありませんので、審議会とは何なのか。

学識経験者の方もいるようですが、そういう方は自分の町会では、全然把握していません。審議会とも関連するのかもしれませんが、学識経験者はどのように選ばれているのか、その辺のところも知りたいと思います。

それから、未来づくり検討会では役員選出についても議題になったようですが、それは決まったのか決まってないのか、今まだ検討中なのか、その辺のところもお聞きしたいと思います。

(高山氏)

「常会」という言葉ですね、あまり馴染みがないとおっしゃいました。私も昔は、馴染みがない感じがしていたのですが、組が集まって常会という、昔のからの古い言い方だと思います。

私の子どもの頃、父親が今日は常会だと言ってよく出て行っては、酒飲んで帰ってきていました。「何それ？」とは思っていましたが、その意味は深くは分かりません。組が集まったもの

が常会ということですよ。

うちは今、全部で53組あって、それが一常会から五常会の5つに分かれていて、それぞれに常会長がいます。役員の話になりますが、細かい役員は、常会で全て選出してきます。正副町会長や正副公民館長という役は、全体の中から役員選考委員会が編成されて、役員選考委員会が選任して、それぞれにお願いをしに行きます。

役員の選任については、未来作り検討会で2回やったのですが、名案はないのです。ある常会がやっている方針が提案されて、その内容は、基本的に全ての役員は次の組、次の組と回していくやり方がいいのではないかとということで、それが現実的だね、という話になりました。

今はもう70歳過ぎまでお仕事をされる時代ですから、全体の中で選ぼうとすると、皆さん「仕事をしているから無理だ」ということになって、なかなか受けてもらえません。常会中の安協や防犯、防災ですら受けてもらえない。

ですから、それをとにかく今度はあなたの組だから、今度はあなたの番だよということで回していけば、次に組長をやる人は「自分がやるんだ」という覚悟ができるので、突然回ってくる感覚はないと思います。

ただ、これで解決したとは思っていませんので、この8月くらいまでに各常会で話し合いをして、自分たちなりのやり方を決めてくれというのが結論です。町会全体でまとまった方針を決められなかったというのが本音なところですが、できるだけ各常会でやりやすいようにやってもらおうようにしました。

それから、審議会は、言ってみれば牽制機能を持った議会みたいなものですね。役員と、常会から3人、五つ常会がありますから15名の方がいらっしゃいます。

重要な事項については、町会規定で決まっていますが、審議会の議を経なければならない事項について、審議会が了とすればできるという

仕掛けになっています。

常会からは3人選出いただいています、1人以上は女性でなければいけないという決まりにもしてあります。そのため、比較的柔らかに話は進むかなと思っています。

学識経験者については、例えば町内で生活している役所の職員や町会のことに造詣の深そうな方もいらっしゃる、そういう方に入らせていただいています。

それから、地域づくりセンター長には入らせていただいています。島内地区の地域づくりセンター長はとっても頑張ってくれていて、いろんな相談にも乗っていただいているし、話し合いのファシリテーター役も上手ですし、島高松に住んでもらって、町会長でも頼みたいと思っていますくらいです。経験の豊かな人ということでご理解いただければと思います。

また、審議会に入っている常会の人は、組長とは限りません。たまたま、組長になる場合もあります、組長は1年任期で、審議委員の任期は2年です。審議会はそんなに頻繁ではなくて、基本的には年4回の開催です。

(質問者③)

町会長がなかなか決まらなくて困っています。

一昨年、88世帯をAブロック・Bブロックに分けて2年ごとに町会長をやるという輪番制を組みました。今年4月からは町会長をBブロックの方から選出することになっています。

Bブロックはマンションで、マンションの中にある各組の組長が色々探してみたのですが、そもそも組長をやってくれる人がいないから、もう町会を抜きたいですみたいな話まで出ています。そういう状況で、どうやったら町会長をうまく選出できるか伺いたいです。

(高山氏)

私もやり方を教えていただきたいです。

うちはさっきも触れましたが、選考委員を各常会から出してもらって、町会長、副町会長、公民館長など、通称「五役」と呼んでいます、それは全体から一本釣りで選出しています。その方がいいのかもしれないです。

(向井氏)

今はすぐく答えの見えにくい時代に入ってきているのかなと思います。世界の様々な制度だとか、社会のあり方が大きく変動していく中で、これが確たる答えというものが見出しにくい。町会のあり方もそうですし、役員選出も今までのやり方だとうまくいかない。そういう様々な課題にぶち当たっているというような時代状況なのかもしれません。

そうした中で大事なものは、「これが答えだ」という正論を振りかざすのではなくて、みんなでよりよい答えを見つけていくということが、すごく重要になってくるかと思っています。

誰もが諦めを感じずに自分らしい役割を持てるよう、地域の活動に入っていくことのできる入口のハードルを低くしながら、多様な人たちが対話、協働をしながら考えることができる、そうした場を地域のあらゆるところに作っていくこと、それが今の時代に求められているのではないかなと思います。

最後に、公民館について話します。戦後、寺中作雄氏が公民館を構想したときに、まさにそのような場として戦後の地域復興の拠点として位置づけたのが公民館であったように思います。

住民参加、協働そしてボトムアップによる地域づくり、そうした中での地域の民主的な政策づくりということに期待をかけて、公民館という場が設けられていたのだと思います。

翻って見たとき、現在の公民館が、お三方が示してくれたような、人と人をつなぐコーディネート機能をきちんと果たしているか、また、地域のみんながここに来れば希望を感じられる、

そういう場になっているのか。これからの公民館のあり方や地域づくりのあり方として活かし、それらの在り方を問うていく必要があるのかなと思います。また、そういった場を、私たちの地域の中に広げていくことが、すごく大事なのかなと思います。

これからの私たちの地域での活動に対して勇気を与えてくださる、お三方の発表だったと思います。

拙い進行役ではございましたが、どうもありがとうございました。

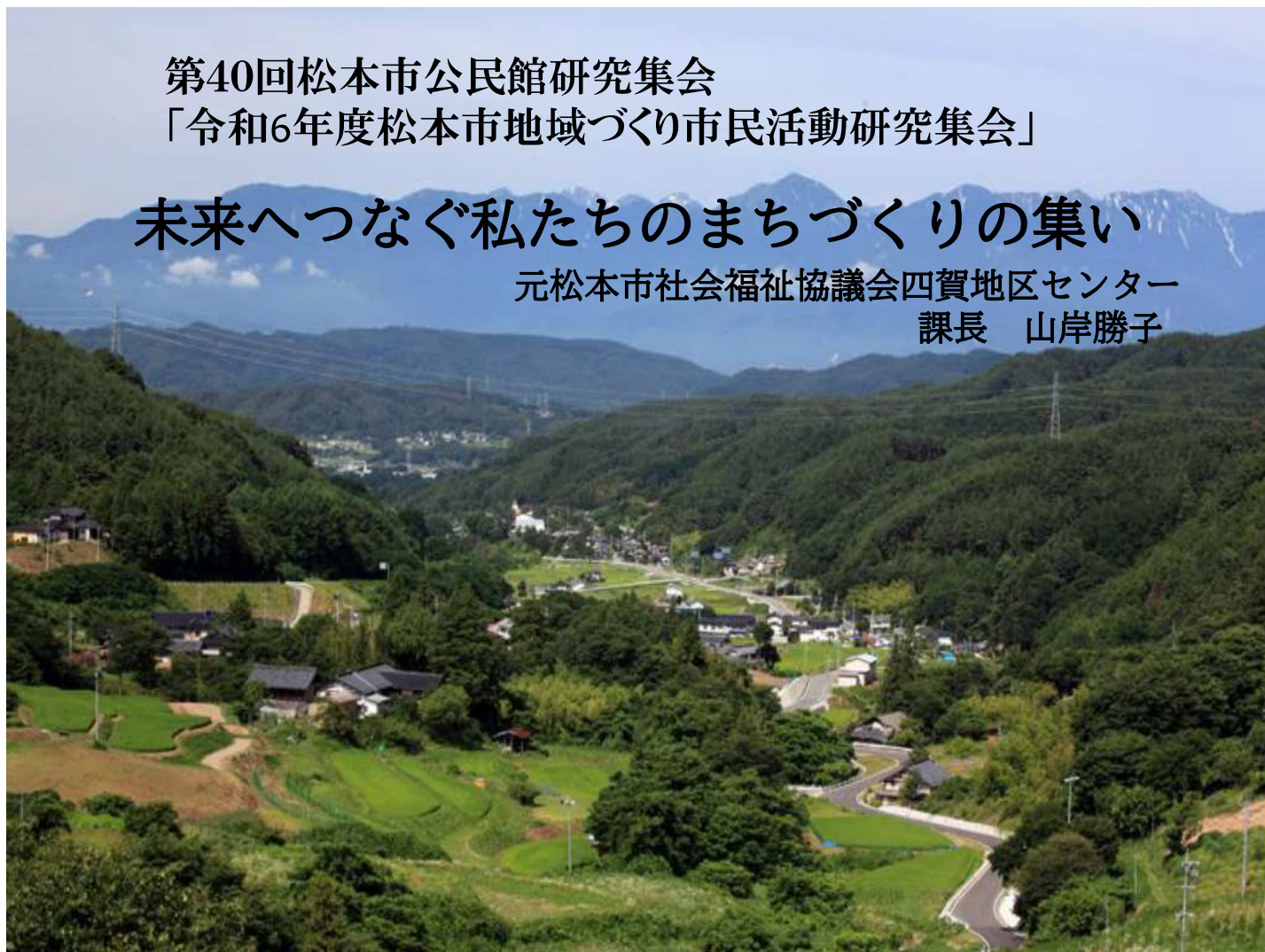
第40回松本市公民館研究集会

「令和6年度松本市地域づくり市民活動研究集会」

未来へつなぐ私たちのまちづくりの集い

元松本市社会福祉協議会四賀地区センター

課長 山岸勝子



松本市四賀地区の概要



四賀地区の概要

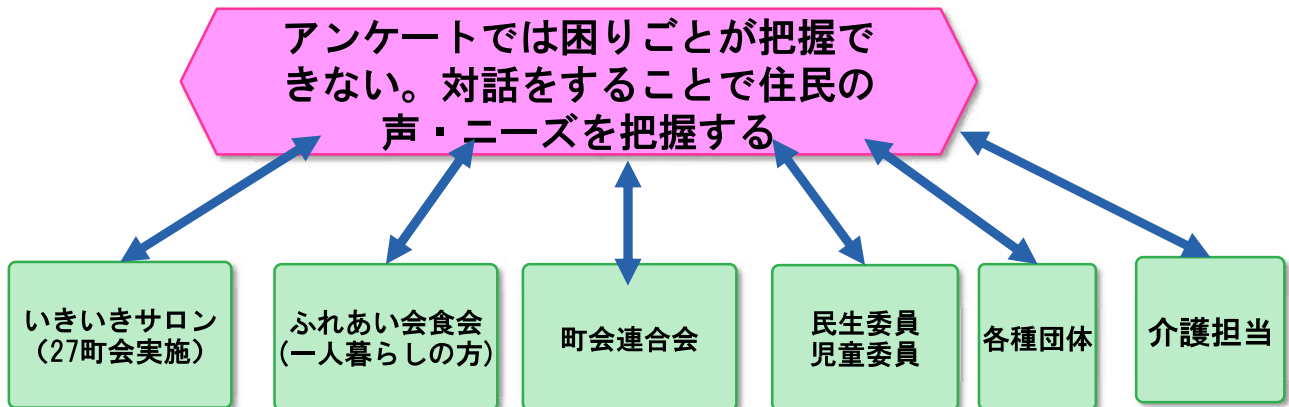
- 地区面積：90.25km²
- 地 勢：松本市の北東部に位置し、四方を1,000m級の山々に囲まれた小盆地
面積の82%が山林
- 人 口：3837人
(2025年・1・1現在)
2005年5,800人から半減
- 高齢化率：46.8%
- 一人暮らし人口：320人



2023年オープン 四賀バラ公園

今から15年前 住民からの困りごとが増えてきた

地域で開催する「いきいきサロン」や「一人暮らしの集い」また町会長、民生委員、各種団体などを通じて日常のお年寄りの困りごとを耳にするようになった



困りごとに対して、住み慣れた地域で、また家で暮らし続けるためにどうしたら良いのか……考えた！

助け合いによる支援がめざすもの

住民の生活課題を解決するには、公的介護サービスを投入するだけでは解決しない。

社会から孤立してしまう前に、住民同士が気楽に支え合える「お互いさま」の人間関係をつくっていくことが重要になる。

お互いさま・・には「人材の育成」が必要

住民が住民をささえるための「担い手」「理解者」「協力者」になってくれるくれる「受け皿の人材」を募り講座を開催

「ささえあい介護と医療講座」 平成22年～25年 4年間

「地域づくり人材育成講座」 平成26年



<仕事を持っている受講者のために夜の開催とした>

講座内容

四賀地区の実状を知り、安心して暮らせる地域づくりのために
住民として何ができるのかディスカッション

- 地域にどんなサービスや社会資源があるのか
- 地域にどんな課題や問題点があるのか
- 地域住民が助け合いについてどんな感覚を持っているか

プログラム

- 高齢者の身体の変化と病気について
- 身近な介護技術(車いす・ベット移動・トイレ介助等)
- コミュニケーション(会話・笑顔・傾聴)
- ボランティアの心構え(ボランティア活動の基本)
 - ・ まず自分が何をしたいかを自覚してから始める
 - ・ 自立を支援するという気持ちを基本とする
 - ・ 相手のプライバシーを守る
 - ・ 自信過剰と自己満足について

「住民参加型の在宅福祉サービス」 `みんなで互いに助け合っていこう`

活動の特徴

- ・制度にとらわれない、地域でのあたりまえの暮らしを支える活動
- ・「助けられたり、助けたり」の支えあいの活動
- ・「ここでずっと暮らしたい」と思えるまちづくりを目指す活動
- ・会員制と有償制の2つの仕組みでささえる活動
会員制…利用者、サービス提供者ともに会員。
有償制…無償のサービス提供では、利用者が遠慮や気詰まりを抱きがちになるので、有償にすることでそれらを取り除く。

「ささえあい事業」 の始まり



講座受講者が「〇〇隊」を結成。ささえあいの受け皿ができたところでつぎは・・・課題をかかえた対象者の確認と状況把握をすすめた。

行政ではできない多様なニーズに即応する

住民主体とする地域の福祉活動の促進

ひとつの隊が始まる前にニーズ調査を行い、新しいサービスの隊が立ち上がる

ニーズ調査 → ニーズ調査 → ニーズ調査 → ニーズ調査

平成23年～
かわり隊

ちょっとしたお手伝いをする

平成24年～
つながり隊

電話での安否確認

平成25年～
お届け隊

手作り弁当の配食と見守り

平成25年～
お仕え隊

生活に張り合いとお楽しみのご案内

平成27年～
ささえあいサロン
ぷくぷくの家

住民同士の仲間づくり
生きがいがづくり

人とつながる場所づくり

目 的

地域の多様な方々が垣根を超えてつながり新たな関係づくりをするなかで、地域の課題やそれぞれの困りごとを把握し専門機関につなぐことや、エルを利用する方同士、スタッフが関わり合うことでつながりができ、楽しみや生きがい生まれ、住み慣れた地域で頑張っ
て暮らしていきたいと思う場所づくり

* ふくふく亭エルを令和4年にオープン

地域のなかでつながりをつくる

* 一人暮らしの方や昼間一人で過ごしている方が日頃誰とも会わない、話さないことが日常的になり病気の早期発見もできない、又人に会うことや外出もおっくうになり引きこもりになりがちになることから、家から一歩でることで自分が知らなかった地域の話題や福祉サービスを知る機会になりつながりができる場所になっている。又、誰かと話しをすること、相談してみたい人が気楽に来て、お茶やお菓子を楽しみながら対話することでつながりを作り、又エルに行ってみたいと思える居心地の良い場づくり、一緒に地域のことを考えてアイデアが出せる場づくりにしている。



「エル」に込めた思い



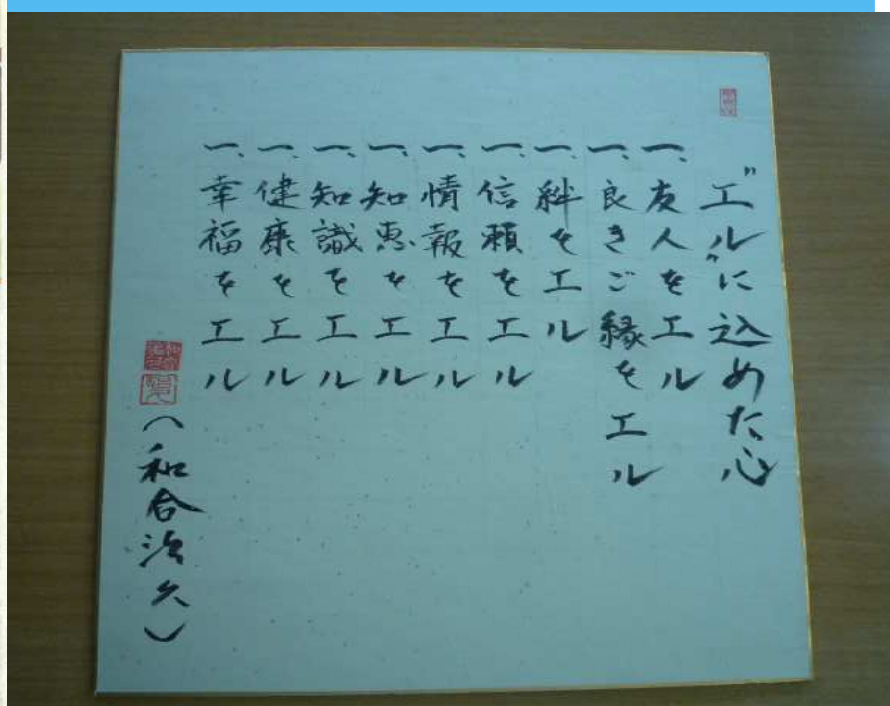
四賀の「ふくふく亭エル」
住民交流のサロン人気

松本市四賀地区の住民有志が運営する交流サロン「ふくふく亭エル」が住民に人気だ。喫茶を楽しむだけでなく、趣味の発表や困りごと相談の場となっており、さらに利用者を増やそうと、サロンのマークと、マークをあしらった看板を新調した。

地区でボランティア活動などに携わる人々が昨年4月、介護士は「どこかいね」といって、

松本市四賀地区の住民有志が運営する交流サロン「ふくふく亭エル」が住民に人気だ。喫茶を楽しむだけでなく、趣味の発表や困りごと相談の場となっており、さらに利用者を増やそうと、サロンのマークと、マークをあしらった看板を新調した。

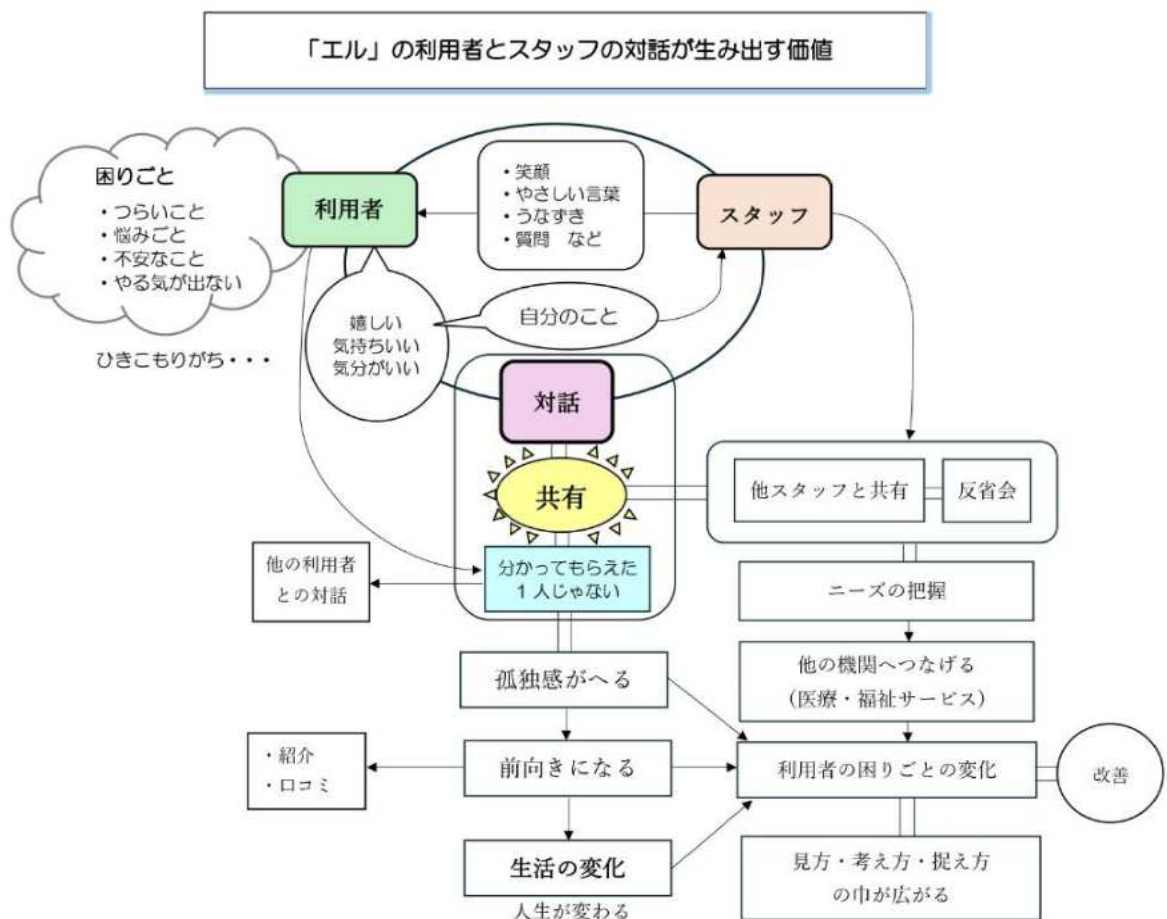
地区でボランティア活動などに携わる人々が昨年4月、介護士は「どこかいね」といって、



手作りの看板や色紙は住民のみなさんからの心のこもった贈り物です

チームスタッフの役割

- * スタッフは、守秘義務を守り活動している。
- * 利用者から相談があった場合は、本人の了解を得て専門職につなげている。
- * 初めて来た方が、また来てみたいと思ってもらえるよう笑顔と優しいことばの対話や対応をする。つながりができるキッカケづくり
- * スタッフ同士は常に反省会(振り返り)を行い、利用者の変化・状況についてそれぞれが持っている情報を共有し、つながりが出来ているか課題認識をもって関わるようにしている。



今日も美味しいコーヒーはいりましたね！



若い世代もエルに参加して話す機会が増えた



対話することで新たな価値が生まれる

- ・ 隣近所が遠く、話す機会や出会う機会もなく引きこもっていた友達を誘って来るようになった。
- ・ 久しぶりに、大きな声で笑った。日頃一人で過ごしていると不安に思うことが多かったが「エル」に来て対話することで、スタッフや来ている方々と話を聞いたりしていると嫌なことが忘れられ精神的に安定してきた。
- ・ 無口だった方が、自分から話すようになり笑顔と前向きになり自分から積極的に話をするようになった。
- ・ 自分の事を知ってもらい、相手のことも知ることができた。
- ・ 日頃不便に感じているいる事、困っていることを伝えることができた。
- ・ 自分の生活に楽しみと張り合いができた。

利用者が集い地区の課題に取り組みます



参加者が自らこれからの生活課題を
考えるようになった

未来へつなぐ私たちのまちづくりの集い

松本市島内 島高松町会

島内地区は、松本市の北西部に位置し、西からの梓川、南からの奈良井川、倭橋上流で分かれ新橋の上流で奈良井川に注ぐ樽木川（古梓川）に囲まれた平地と、奈良井川の東側の丘陵地帯からなる。

「島内」は、梓川と奈良井川の間で島をなしていることから、「嶋之内」とよばれたといわれている。また、梓川と奈良井川が合流した犀川周辺は、松本市で一番低い標高555m。

島高松町会は、昭和53年に人口の急増による都市化が進展し高松町会から分離して新たな町会としてスタートした。公共施設としてはし尿処理施設としてのあずさセンター及びあずさ運動公園が地区の北側に位置している。



令和6年5月1日現在
松本市高齢化率 28.6%
島内地区 26.9%

常会数 6

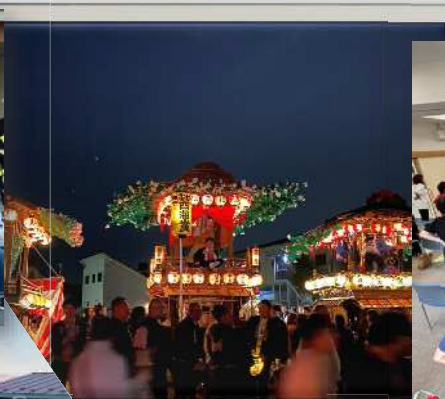
会員戸数 533

非加入はアパート入居者がほとんど
(250戸)

2025/02/16

	世帯数（戸）	男	女	計
島内地区	5,497	6,014	6,361	12,375
島高松	708	700	748	1,469

1



2025/02/16

2



「未来づくり検討会」設置に至る経過



検討委員会の構成



2025/02/16

5

島高松町会未来づくり研究会

□基本

町会総会で決議した活動報告及び活動計画に基づき課題を検討

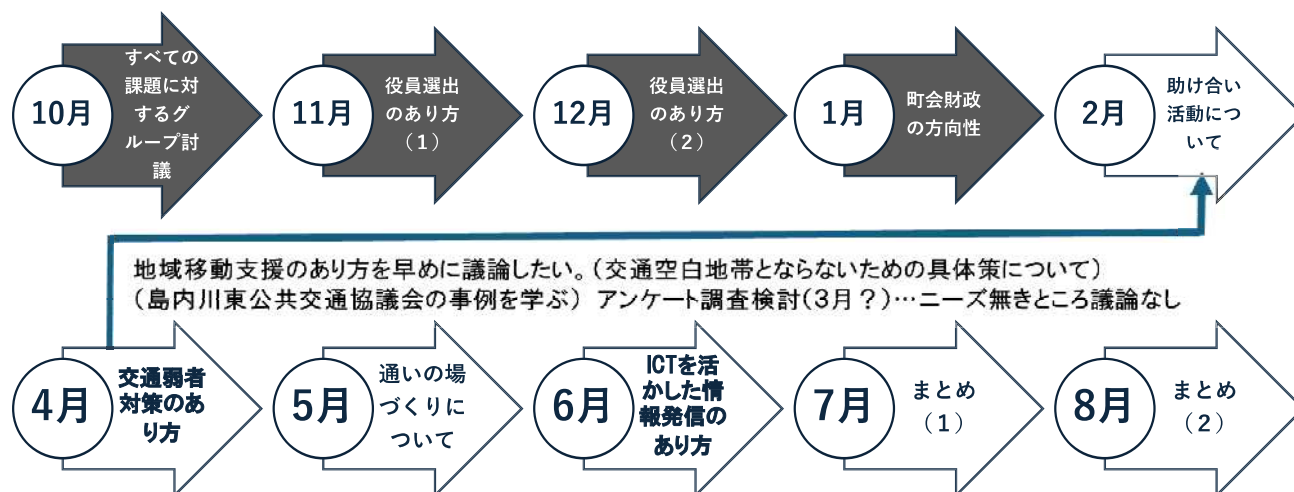
□検討事項

- 1 活性化につながる役員選出のあり方について
- 2 長期的な視点に立った町会財政の方向性について
- 3 助け合い活動による地域の安全安心の確保のあり方について
- 4 超高齢社会を見据えた交通弱者対策のあり方について
- 5 町会員が自由に交流できる場づくりや通いの場について
- 6 ICTを活かした情報発信のあり方について

2025/02/16

6

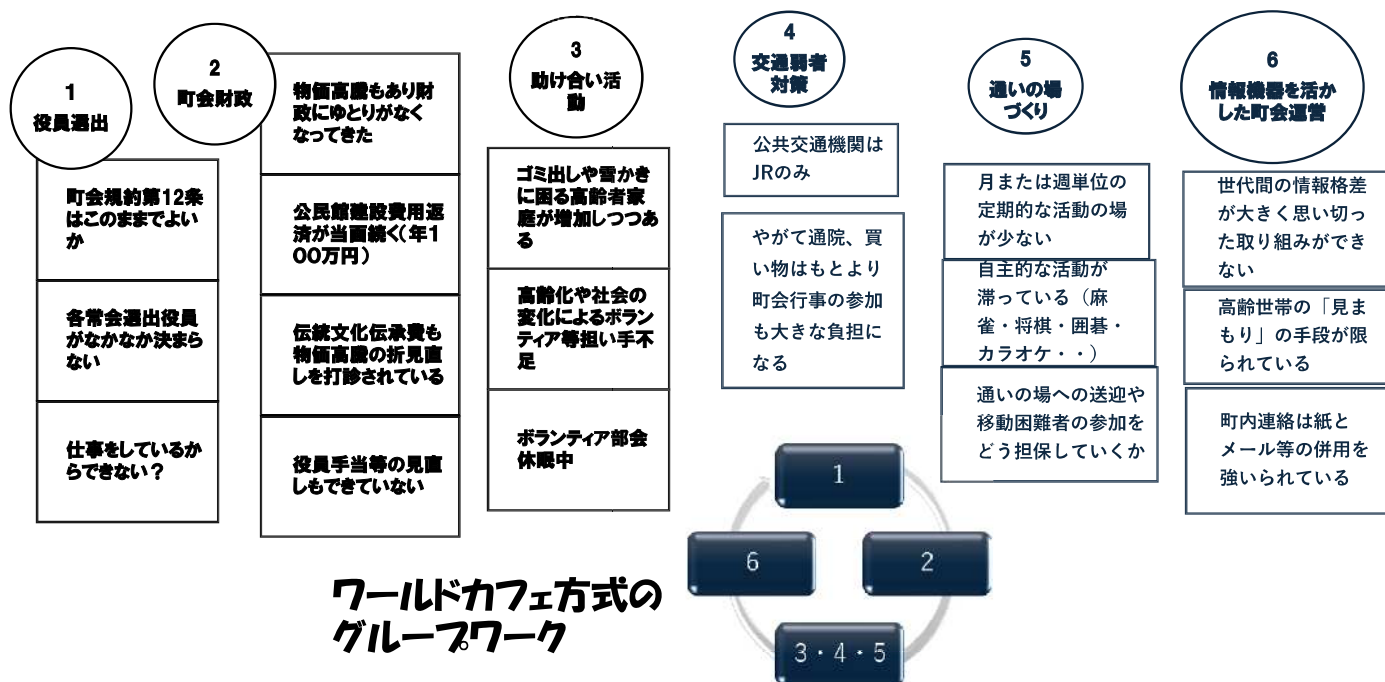
検討スケジュール進行状況(R7 2/1現在)



2025/02/16

7

一体何が課題か？



2025/02/16

8

「町会だより」を通じて身近な町会に

回覧

島高松町会だより

(令和6年11月1日号)

1 「島高松未来づくり検討会」スタート

町会通常総会における活動方針として、町会の抱えるいくつかの課題への対応について研究会を設置して検討することとなったことはすでにお知らせしておりです。その検討の場として、持続的な町会活動をすすめるため一人ひとりの町民が「我がこと」として様々な「場」に参加し、かかわることのできる町会活動のあり方を総合的に検討するため「島高松未来づくり検討会」が設置されその第1回検討会が10月6日(日)開催されました。この検討会にはメンバーは町会10役をはじめ審議委員代表、各部長代表、相談役、識見者及び民生児童委員の皆さんの39名から構成されています。第一回目の検討会は4つの大きなテーマごと、ワールド・カフェ方式により少人数に分かれたテーブルで自由な対話を行い、旅人の様に他のテーブルとメンバーをシャッフルして対話を続けることにより、参加した全員の意見や知識を集めることができる対話手法を用いて熱心に行われました。今後、論点を絞りながら検討を行い、令和7年前半には一定の方向を出すこととしています。

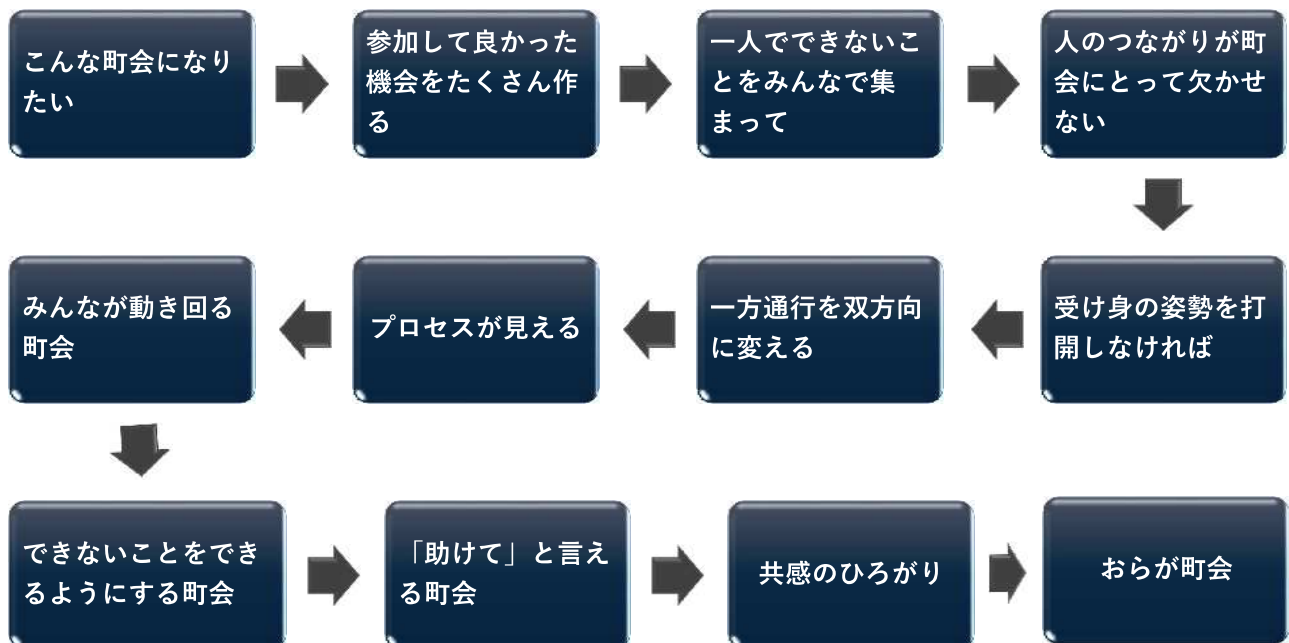
2025/02/16



令和2年9月1日号より
毎月1日発行
(A4版両面)

町会の会議や公民館活動を中心に回覧に情報提供を行っている。町会規模が大きいこともあるが、町会が何をやっているのか全く見えない状態であったことが、見える化されたことと好評。また、総会はもちろん主要活動で寄せられた意見に対する町会としての考え方を開示している。読むか読まないかは個人の判断ではあるが・・・町会長！楽しみにしてるよとか、コピーして大切に綴っているよとか多くの心強い言葉もいただくようになった。自画自賛のような気もするが、町会員が町会をより身近に感じてくれるようになったのではないかと日々感じている。

9



2025/02/16

10

学校と地域をつなぐ

大野川小中学校地域学校協働本部
相馬 露子

CONTENTS

- 01. これまでと現在の活動
- 02. 地域づくりで大切だと思うこと
- 03. 事例①コミュニティスクール
- 04. 事例②松本デュアルスクール
- 05. なぜみんなが動くのか？
- 06. 今思うこと



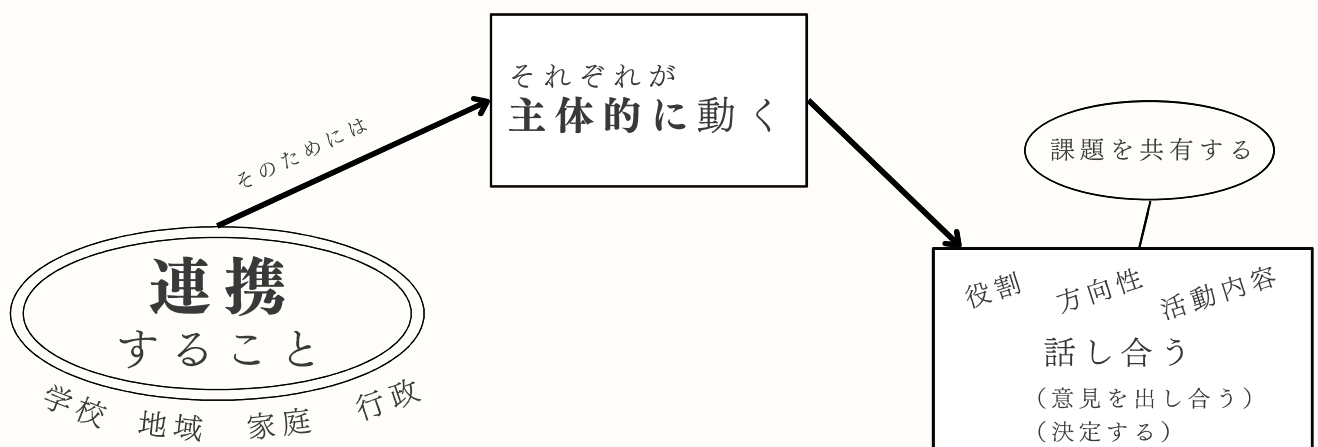


相馬 路子

東京や県内で保育園、幼稚園、小学校、
学童保育所、ベビーシッターなど子どもと関わる
仕事を経験し、2015年冬から乗鞍（大野川区）
に移り住む。

〔現在の主な活動〕

- 2020年～ のりくら自然保育木のこ
放課後の子どもの居場所づくり
- 2022年～ 大野川の移住推進活動
- 2023年～ 大野川小中学校CSコーディネーター
子育てサロン開催





大野川小中学校コミュニティスクール

- 2023年4月国型コミュニティスクール導入（松本市では初めて）
（松本市は信州型まつもと版コミュニティスクール）
- コーディネーターの業務
（予算執行、地域講師紹介、行事企画運営等）
- 学校運営協議会（年3回）
（主な協議内容：学校登山、町会合同運動会、総合学習、部活動）
- 委員構成：PTA会長、町会長、地域団体、地域づくりセンター、
公民館、学校



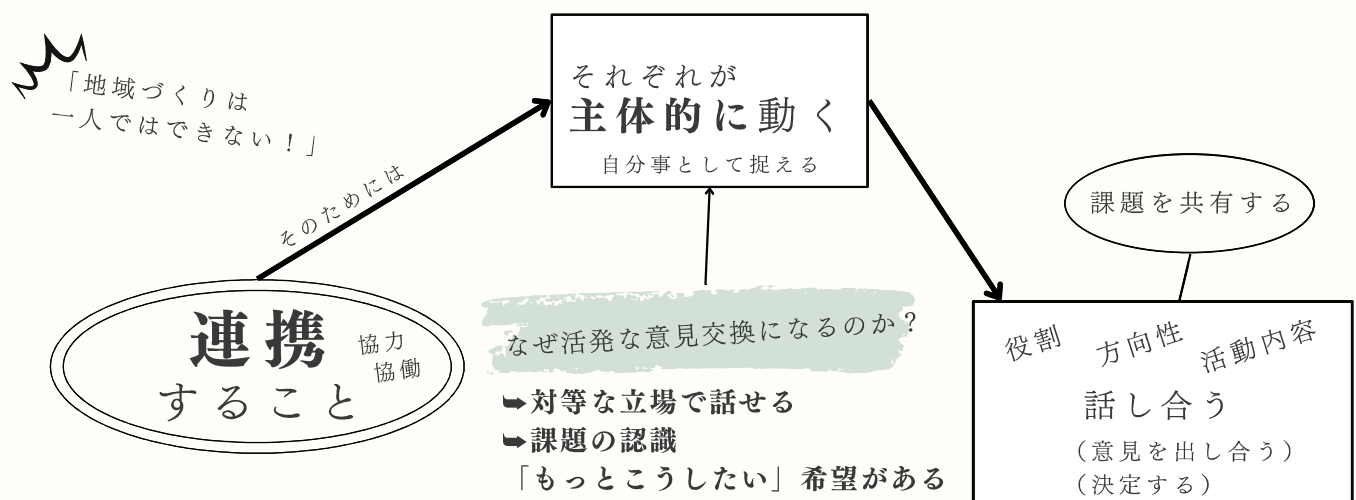
学校運営協議会での意見

- 学校登山の継続困難に対して委員から「地域には山岳ガイドがたくさんいる」「子どもたちにぜひ地域にある山に親しみをもってもらいたい」「登頂を目指してほしい」という意見があり、学校と地域が協力してコミュニティスクールでの運営として継続していくことに。
- 「運動会で使用する音響機器が古くなってきている」→「町会や観光協会と共同で購入使用できるようにしてはどうか」学校だけで問題解決するのではなく、地域全体で考えていくことができる。
- 中学生の総合的な学習として、地域の協議会と連携して活動ができないか。中学生が協議会に参加する、協議会を学校で行うなど。
- 部活動の地域移行に関して、「登山やマウンテンバイクのガイドに携わっている、この地域ならではのアウトドアクラブをつくりたい」



松本デュアルスクール制度

- 2023年5月から開始。住民票を異動せずに松本市内の学校に就学できる制度。大野川で積極的な受け入れ。
- 大野川では移住や関係人口増加を目的に、制度と合わせて移住推進活動を行っている。
- 実績：2023年度4家庭5名（内2家庭が移住）、2024年度6家庭7名が利用。
- 課題：受け入れ可能住宅が少ない、教員体制
- 受け入れには、教育委員会・学校・地域の連携協力が必要。密に連絡を取りながら協議を重ねている。





○選択肢のひとつになる

“人口減少を食止めよう！”
“地域存続の危機を何とかしよう！”
と意気込みしすぎるよりも、
「こんな場所があるよ」
「こんな人におすすめ！」
「こんな関わり方があるよ」

○大人が楽しむ暮らし

“子どものために”

“子どもの居場所をつくろう”

このためには、

- ▶ 大人が熱意を表し、やる気になり、
楽しんでいる姿を子どもにみせること
- ▶ 子どもと対等な立場で見つめ、話す

第1分科会 いざって時、どう動く？ ～地域で取組むお互い様の防災対策と行政との協働～

話題提供者：	野村 茂	（ 松本市安原地区元原町会 町会長 ）
コーディネーター：	神田 孝文	（ 信州大学グリーン社会協創機構 地域防災減災センター 特任助教 ）
司 会：	保科 黄	（ 内田公民館主事 ）
会場：中央公民館 6 階 ホール／参加者：59 名		

1 協議の柱

災害時には様々な懸念事項がある中で、地域防災を住民主体の活動の観点から整理し、地域防災活動に大事な視点やプロセスについて事例を交えながら学び、地域への生かし方を考える。

2 話題提供

- (1) 地域で取り組む防災 ～避難所開設初動リーフレット作成～
（安原地区元原町会 野村 茂）

ア 安原地区と元原町会の概要について

安原地区は元原町会を含む9つの町会があり、843世帯で1,620人が住んでいる。保育園から大学まで教育施設が豊富である。

元原町会は松本城から北東の位置にあり、町内に川が流れ、大きな断層も存在していて、何が起きてもおかしくない地形である。過去には大きな水害が発生したこともある。

イ 取組みの概要について

(ア) 取組みのきっかけ

平成29年に信州大学附属松本小学校が元原町会の避難所として松本市から指定を受けた。それまでは地区内にある旭町小学校が避難所で、地区をまたぎ多数の町会が携わる中で、町会内の数人の役員のみが携わる範囲であった。

避難所の単独指定を受けてからは町会の防災組織が運営委員会となり、自主防災会が設立された。そして、住民に災害に対する意識を持ってもらおうとする取組みが始まった。

(イ) 取組みの内容

はじめは自分たちではなかなか取組みが上手くいかず、松本市の危機管理課に助言をもらいながら運営委員会を開催。住民に対する勉強会を行った。参加者は役員や組長等、限られた人数だった。

そのような中、信州大学附属小学校の4年生が防災の授業を行っており、学校での防災訓練に見学や参加をさせてもらった。また、子どもたちの地区

の防災に対する疑問点等について、授業の時間を使って町会長が電話で答えるといった営みもあった。

同じ頃、信州大学防災減災センターと関わりを持つようになり、地域と学校、そして行政との研修会をスタートさせた。毎月、避難所班長クラスを中心に防災センターの先生から指導を受け、2年ほどかけて課題をまとめて解決方法を考えてきた。そして、町会の避難所における、マニュアル作成の取り組みを始めた。

毎月1回、信州大学防災センター協力のもと、公民館で勉強会を行い、町会単独の「避難所開設初動リーフレット」を完成させた。リーフレットは防災訓練、勉強会、研修会で配布し住民に周知を図った。

昨年3月には、リーフレットをもとに、避難所開設初動訓練を実施。訓練後には班ごとに反省を出してもらった。後日反省会を実施した上でリーフレットの修正を行った。

(2) 防災、減災について～他自治体の事例を交えて～

(信州大学グリーン社会協創機構 地域防災減災センター

特任助教 神田 孝文)

ア はじめに

(ア) 防災、減災とは

防災とは・・・災害時に被害を出さないよう事前に備えること

減災とは・・・災害による被害をできるだけ少なくすること

我々はこの2つについて、自分が置かれている立場で取り組んでいかなければならない。

(イ) 自助、共助、公助とは

自助・・・自らの命は自分で守る

共助・・・誰かの命を守る

公助・・・自助、共助で足りないところを公の力を借りる

災害時に落としてしまった命を誰かのせいにするのではなく、自分の命は自分で守っていかなければならない。ただし、身体の不自由な方等、共助からでないと助からない命があることも、また事実である。

イ 防災、減災の転換期と他自治体における災害の事例から見えること

防災、減災において転換期となったのが平成7年に発生した阪神淡路大震災。この時、通信・交通の混乱、被災地の状況把握の困難さ、人的・物的資源の限定等が問題となった。そのような状況からの新たな取り組みとして、自助・共助・公助の力を備えていくための「防災士」という話が生まれてきたのも、この頃からである。

平成23年に発生した東日本大震災の翌日未明に、長野県栄村で発生した震度6強の地震と、平成26年に白馬で発生した神城断層地震は、いずれも非常に

大きな地震で、建物等に甚大な被害が出たにも関わらず、地震による直接の死者はゼロだった。

栄村は地理的に、災害時は陸の孤島になってしまう点があったが、住民たちは自分たちで日頃から備えていた。また、自分たちで避難訓練を重ねておりその成果が表れた形となった。

白馬村は日頃から隣近所で顔の見える関係性が築けていた。また、避難所にいない人を住民が探しに出たということもあった。これを、地域性という言葉で片づけるのではなく、都市部に住んでいたとしてもせめて隣に誰がいるのかくらいの関係性は持っていく必要性はあるのではないか。

栄村、白馬村に共通するのは、日頃のコミュニケーションが取れていた点である。

ウ 防災に関する新たな考え方について

近年耳にする言葉にフェーズフリーというものがある。これは防災、減災において日常、非日常を分けないという活動であり、例えば缶詰について、災害のために備えるのではなく、日常的に買って食べていればそれが非常時の備えにも繋がっているというもの。こういった取り組みを取り入れてみることも一つの有効な手段である。

(3) 行政からの情報提供

(福祉政策課、保健総務課、危機管理課)

ア 避難行動要支援者名簿と福祉避難所について（福祉政策課より）

避難行動要支援者名簿は、避難時に誰かの支援が必要となる方を記載している名簿。大規模災害の発生時は地域の皆さんで名簿に基づく行動をするようお願いしている。

福祉避難所は一定の配慮を必要とする方の避難所。発災から3日ほど経ってから設置される。それまでは地区の避難所で生活を送ることになる。

イ 医療救護所について（保健総務課より）

医療救護所は、震度6弱以上の地震が起こった場合に市内23カ所（中学校区毎）に設置され、基本的には避難所と併設されており、怪我人や具合が悪くなった人の手当てを行う。市内の診療所等を閉鎖し、医師等が配置される。医療救護所は、発災後すぐに設置され、3日ほど経過後に閉鎖される。

ウ 災害時の生活用水確保等について（危機管理課より）

家庭や会社で持っている井戸について、災害時に井戸水を地域のために提供いただける方は登録をお願いするもの。また、災害時の断水時に備え、携帯トイレの備蓄を各自でお願いしたい。

3 意見交換

ここまでの内容を踏まえ、防災のために自分ができることについて、自分の地区の取組みとその強みと弱みを交えながら話し合った。内容は以下のとおり。

(1) 現在の地区の取組み

「避難パンフレットの作成」、「安否確認の練習」等の地区単位での活動だけでなく、「身近な単位での避難訓練」のような、町会や班単位での取組みも出されていた。

(2) 地区の強み

「災害時に炊き出しをしたことがある」という経験を強みにしている地区がある一方、「水、食料の備蓄が豊富」といった今までの備えの活動が強みに繋がっているケースも多く見られた。また、土砂災害や川の氾濫がない地区のような、地理的な強みを持っている地区もあった。

(3) 地区の弱み

「町会未加入者とのコミュニケーションが取れない」「町会加入率が低い」「役員の高齢化」「担い手不足」「外国人への情報伝達手段」のような、防災のカテゴリーに限らず、松本市全体の弱みとして定番化している課題が多く出されていた。

(4) 明日から取組みたいこと

「食材の備蓄」、「携帯トイレの購入」のような個人単位でできることに加え、「地区内の店舗等を巻き込んだ避難訓練」のような、地区や町会単位で他団体との協働する取組みを模索する発言もあった。

4 まとめ

本分科会は、災害時に行政の支援が展開されるまでの自助、共助こそが地域に求められる重要な取組みであることを確認し、その営みに必要な視点やプロセス等について事例を交えながら学び合うことを軸に進めてきた。

分科会当日は、まず導入としてそもそも防災の目的とは何なのかという根本的な部分を問いかけることで、防災を手法やテクニック論ではなく、各自が地域づくりの視点から考えられるように構成した。実際、安原地区元原町会と他自治体の事例において確認されたことは「住民による地道な活動の継続」や「身近な人同士の繋がり」といった、本市が公民館を核にした地域づくりにおいて大切にしてきたことこそが、防災活動においても重要であるという点である。

後半のグループワークでは、参加者各自が明日から取組みたいことについて、個人や町会において、身近かつ自分の手の届くところから始めていきたいという内容の発言が多く聞かれた。今後の各自（各団体）の取組みが、有事の際の大きな力となるようお願いしたい。

第2分科会 地域は子育て応援団 ～地域にある子どもの居場所を知ろう～

話題提供者：	西口 恵利子	(庄内地区子ども会育成会 会長)
	中垣 美希	(松本大学地域づくり考房「ゆめ」 『寺子屋』代表)
	百瀬 あき	(島立こども広場 代表)
	濱本 初美	(島立こども広場 ボランティアスタッフ)
司 会：	三村 恵美	(第三地区地域づくりセンター長)
会場：第三地区公民館 大会議室／参加者：38 名		
料理実習室／参加者：17 名		

1 協議の柱

保護者世代や子育て支援に関わる人々が、子どもの居場所づくりの実践事例を共有し、子育ての悩みや地域の子どもの居場所について話し合い、気づきや発見を得て、各地域での実践へつなげます。

2 話題提供

(1) 庄内地区フリースペース

ア 地区子ども会育成会、庄内盛々会、庄内地区ボランティアの会の3つで運営
イ 実施までに、関係者で5回会議を行い、マニュアル、各種様式、シフト管理
表などを作成し、広報活動も行った。

ウ 市の委託料の半額を子どもと地域の交流事業費として確保している。子ども
達からはゲーム、地域清掃、理科実験をやりたいといった希望がある。

エ 事例発表を受け、質疑応答を行った。

Q 1. 勉強する子と遊ぶ子をどう分けている？

A. 遊ぶ子は庄内地区公民館内にある図書スペースに誘導している。

Q 2. 見守りは何人で行っている？

A. 1人で行っている。子ども達は多い時でも8人程度で、特に1人でも問題
になったことはない。

Q 3. 見守りは具体的にどんなことをするのか？

A. まず受付をお願いし、その場で見守る。時々声をかけたりしている。見
守る側も読書やパソコンなどを持ち込んでいる。

Q 4. 市からの委託について、かかっている経費は人件費だけか？

A. 市の生涯学習課と委託契約を結び、人権費として委託料をもらっている。
その他必要な消耗品などは庄内地区公民館の予算から執行した。

(2) 寺子屋～学生が営む子どもの居場所～

ア 事例発表を受け、質疑応答を行った。

Q 1. 大学の勉強との両立で課題はあるか？

A. メンバーの入れ替わりがあるため、継続性に課題がある。また、授業に
行きながら企画をするため、本当はもっと開催したいが、難しい。

Q 2. 資料集 P 37 の 1 の(1)のウを詳しく

A. 例えば野菜が育ち収穫するだけで子どもは感動してくれる。学生の多くは感動しない。そういった子どもの姿から吸収することがある。

(3) 島立こども広場

ア これまで4年活動してきた。誰にとってもメリットがあるようにしたい。

イ 最近取ったアンケートの満足度は100%だった。

ウ 事例発表を受け、質疑応答を行った。

Q 1. 定員は？

A. 初めは設けていなかったが、現在は30名としている。徐々に口コミなどで広がり、定員を設けるようになった。家庭での孤立が増えていることの裏返しでもある。3月の春休みの定員は30名を予定している。

3 グループワークによる意見交換

(1) 事例発表の感想

ア 地域と若者が関わる場、大学生や高校生と小中学生が関わる場が他でもあればよいと感じた。

イ 大学生が関われる環境、地域に多くの協力者がいることが羨ましい。

ウ 学校にいけない子どもの居場所にもなり得る。

(2) 子育てや子育て支援での悩み

ア 3歳までの愛着形成が大切だということを学べる場が欲しい。

イ 地域と関わるための場を提供する必要がある。

ウ 地域で子どもを育てたいが、親世代が地域にあまり関心が無い。

エ 放課後子どもが安全に過ごせる場が欲しい。公民館がその場になれる。

オ 祖父母のいない家庭は本当に困っていると思う。

カ 活動しているとスタッフの確保が難しい。誰でもいい訳ではない。

キ 子ども食堂に本当に来て欲しい子は家にこもっている。

ク 両親が共働きで、学校が終わってからの子どもの過ごし方が不安。

(3) 地域はどうあるべきか

ア 多世代交流ができる場があればよい。

イ 地域に愛着を持ってもらえるよう、お祭りや伝統行事（三九郎・青山様・ぼんぼん）などの学習会を開催する。これらの経験は、大人になって自然と地域とつながるようになる。

ウ 家庭を補完する役割として、子どもが安心し、喜びを感じられる「居場所」が地域にできるとよい。

エ したい人、できる人が参加・参画し、できる範囲でやる。

オ 公民館を知らなくても情報に辿り着けるようにする。

カ やりたいという想いを実現できるように支援し、さらに運営側を育成し増やしていくために動くのが公民館。

キ 子ども達に「公民館は楽しい場所」という印象をもってもらえる工夫。

4 小学生向けお楽しみ体験会

保護者世代が分科会に参加できるように、食生活改善推進員及び松本大学生の協力を得て小学生対象にチーズケーキ作りとお楽しみ会を行った。

(1) チーズケーキ作りの感想

ア 売れるなっていうくらい美味しかった。

イ みんなで一緒に作れてよかった。

ウ ハンドミキサーが難しかった。またおうちで作りたい。

食生活改善推進員に丁寧な指導の下、子ども達も楽しく調理ができた。

(2) お楽しみ会

チーズケーキを焼いている時間やチーズケーキ作りの後、ボッチャや遊びをするなど楽しんでいた。学生や職員が足りず、十分な見守りが出来なかった場面もあった。子ども食堂など子ども向けのイベントでのノウハウやポイントなどを実践者から学ぶ機会が必要だと感じた。

5 まとめ

協議の柱に対し、達成できたことは以下のとおりである。

- ・ 計 38 名の子育て支援に関わる実践者や保護者世代が集い、子育ての悩みを共有し、情報交換を行うことができた。
- ・ 子どもの居場所に関する実践事例を共有する事ができた。

(1) 参加者アンケートより（抜粋）

ア 気になったこと、やってみたいこと

(ア) 単独ではできないが、いくつかの団体に呼びかければ子どもの居場所づくりは可能。公民館に音頭を取ってほしい。

(イ) 公民館で長期休暇中に学生ボランティアを募り、遊びや宿題を見る居場所

(ウ) 小学校高学年の子たちも勉強に集まれる活動もいいと思いました。

(エ) 仕事、子育てしながらでも出来ることがあるか考えました。すぐは難しいかもしれませんが声をあげていけたらと思いました。

(オ) 50～60 代の子育ての終わった男女が休日活動のできる体制づくり。

(カ) 今やっている寺子屋を、回数を増やして多くの子どもと喜びを共有したい。

イ 子育てに関する意見・要望

(ア) 町会やPTA関係なく、地域みんなで子どもたちを支えるシステムが必要。

(イ) 子育ての活動が公民館でできる事をもっと広めてほしい。

(ウ) 子どもや保護者のニーズやアイデアを出し合える目安箱フォームがあったら面白いと思う。

(2) 振り返り

ア 後日、運営委員で振り返りの場を設け、出た主な意見は以下のとおり。

- (ア) 会場を地区公民館にしたことで、保護者の参加が多かったと思う。
- (イ) 集いでお菓子作りをやった事は良かった。子ども見守りには専門の人が必要だった。
- (ウ) 当日楽しかった。ワークショップ→シェア会、反省会→アフターミーティングといった気軽な感じを出せば、知らない人と話すことに慣れていない方も参加してくれると思う。
- (エ) 他のグループの人とも話したかった（⇔事例発表とのバランス）。
- (オ) この分科会を通じて何か持ち帰って、何かを始めた人の情報が欲しい。情報があればこちらから支援もできる。
- (カ) 子どもの居場所の見学会を開いてはどうか？
- (キ) 子どもの居場所の運営等についての問合せが出来る仕組みはどうか？
- (ク) 地区によって様々であるが、そもそもの育成会という組織の理解を。育成会＝PTAではない。学校・家庭・地域の関係づくりが改めて必要。

(3) 今後の方向性

協議の柱の後半部分「…を得て、各地域での実践へつなげます。」を実行するために、分科会の活動を途切れさせず、今後も継続的に活動することが確認された。また、地域での実践を促すために、以下について進めることとなった。

ア 分科会参加者への情報発信

イ 本分科会がきっかけとなって動き出した参加者への支援

ウ 子どもの居場所の見学会の企画、実践している団体の視察



未来へつなぐ私たちのまちづくりの集い
第2分科会

地域は 子育て応援団

～地域にある子どもの居場所を知ろう～

2025

2/16 日

13:00-16:30

会場：第三地区公民館
大会議室

参加無料

教えてください、子育ての困った！地域はあなたの子育てを応援しています。
子どもの居場所に関わる地域や学生の取り組みを知り、
子育てに「地域」という選択肢を持ちませんか？

小学生
対象



事例発表
ワークショップ
(13:00～15:00)



意見交換会
(15:00～16:30)



お菓子作り体験
お楽しみ会
(13:00～16:30)

お申込みは第三地区公民館へ

☎ 0263-36-7040

二次元コードからも
申し込みができます



<参加対象者>

子育て中の方、子どもの居場所に関心のある方、
町会役員、学生、教育関係者、市職員など

※途中参加や途中退出も可能です。
※託児はありません。

<お菓子作り体験に申し込まれる方へ>

食生活改善推進協議会による小学生対象の料理教室です。
お子様にエプロン、マスク、三角巾を持たせてください。

第3分科会 共生社会 ～違いを力に、共に生きる未来へ

話題提供者：	橋 本	和 子	(松本市民)
	松 原	慧 太 郎	(橋本氏の自薦ヘルパー・ボランティア)
	瀬 端	こ こ ろ	(橋本氏の自薦ヘルパー・ボランティア)
	諏 訪	智 子	(特定非営利法人ハートラインまつもと 常務理事)
	青 木	茂 人	(元寿公民館長)
司 会：	山 岸	清 治	(岡田地区地域づくりセンター長)
会場：中央公民館 ネットワーク室／参加者：25名			

1 協議の柱

障がいのある人もない人も、笑顔で共に生きていくことができる社会とはどんな社会でしょうか。

お互いの違いを認め、尊重し合える「共生社会」を目指した地域の実践を通じて、未来への共生の心を育みませんか？

2 話題提供

(1) 「共に生きる ～橋本和子さんの人生～」

ア 概要

(ア) 橋本和子さんとは

脳性まひにより身体に重い障がいがあり、24時間全面的な生活の介助が必要。施設入所はせず、自薦ヘルパーやボランティア等の手助けを借りて一人暮らしすることを選択した。

(イ) 自薦ヘルパーとは

ケアマネージャーがケアプランを決定し事業所からヘルパーを派遣するのではなく、利用者が自分自身でヘルパーになって欲しい人を推薦する方式。介助資格のない方は研修を受けて資格を取得してもらい、利用者専属のヘルパーになってもらう。利用者に合った柔軟性の高い介助を受けられるメリットがあり、利用者自身で選んだことによる気楽さもある。

(ウ) 自薦ヘルパーに行きついたきっかけ

一人暮らしを始めるにあたり、生活の介助者が必要となるため、信州大学に何十回とビラを配りに行き、学生のボランティアを募集した。

30年近く学生ボランティアと関わる生活を続けていたが、近年学生ボランティアが著しく減ってしまい、一般のホームヘルパーを利用するようになった。しかし、ホームヘルパーは提供できるサービスの内容があらかじめ決まっているため、自薦ヘルパーという方式に行きつき、現在も一人暮らしを続けている。

(エ) 学生が自薦ヘルパーになったきっかけ

大学で配られたボランティア募集のチラシに興味を持つ。橋本さんとの暮らしに「居心地の良さ」「人と人とのつながり」を強く感じ、自分もその一員

になりたいと感じた。介助をするために橋本さんの自宅へ行くというより、友達に会いに行くような感覚を抱いている。

イ 話題提供

(ア) 対話形式による橋本さんとのお話

橋本さん、自薦ヘルパー・ボランティアの方2名、橋本さんと旧知の仲である運営委員2名にて、橋本さんの来歴や自薦ヘルパーとの日常生活等について対話形式にて語り合った。

(イ) 主な内容

- ・ 自薦ヘルパーは、橋本さんの畑の様子を写真に収めたり、コーヒーを挽いたり、ご飯を作って食べたりと、橋本さんと共に普通の暮らしをしている。時には遠出をすることもある。
- ・ これまで大勢の方々が橋本さんに関わってきた。時には海外のバックパッカーが、「畑仕事をするからタダで泊めてほしい」と訪れることもある。その人脈の広さは誰もが驚くところである。
- ・ 障がい者のためにユニバーサルデザインや施設整備が進んでいるが、一方で人情が薄くなっている気もする。例えば、車イスの方が段差で困っているのを見かけたとき、「(近くの人に声をかけて) みんなで持ち上げて運ぼうよ」という地域があれば、「あそこにスロープがあるから」という地域もある。
- ・ ユニバーサルデザインや施設整備は必要だが、障がい者の方の行動の幅を狭めないことが大切だと思う。

(2) 「寿地区福祉の文化祭 ～この街で生きて～」

ア 概要

(ア) 寿地区福祉の文化祭とは

寿地区内の福祉施設、小中学校、地域住民が集まり、それぞれが自己を表現できるような催し。福祉施設は当日の進行やブースの出店、学校はダンスなどの発表、地区公民館（行政）は会議資料や物品の準備及び会計の補助などを行う。

(イ) きっかけ

寿地区内の福祉施設と町会との協同事業が、町会側の負担になってしまったことで終了した。地域と福祉施設がお互いを知る場がなくなることにより危機感を覚えた当時の施設長は、地区単位の事業として行うことができないかを公民館に相談する。

話し合いの中で、地区に住み、地区事業に携わっている公民館長が、地区内の福祉施設数を答えることができなかった。この点から、住民は地区内の福祉施設の存在を知る人が少なく、施設関係者も地域のことを知らないという課題が見えてきた。そこで、福祉施設と地域が交流する方法の模索が始まり、地区事業である文化祭とは別の、福祉をテーマにした文化祭を開催することとなった。

(ウ) 開催に向けて

地区内すべての福祉施設に声をかけたところ、他の福祉施設も地域との交流を求めている。また、寿小学校の地域連携係にも声をかけたところ、前向きな返事があった。

最初は障がい者施設のみだったが、後に高齢者施設も参加。さらに他地区の福祉施設や、地区内に新設された福祉施設も参加するようになった。

イ 話題提供

(ア) 当時の関係者からのお話

この事業は、教育と福祉、それぞれに携わる二人が出会い誕生した。当時の福祉施設長である諏訪氏と元寿公民館長の青木氏から、当時のできごとについて話を聞いた。

(イ) 主な内容

- ・ 当初は福祉施設だけの参加を考えていたが、小学生にも参加してほしいと思うようになった。小学生の年代で障がい者と出会い、地域で普通に暮らしているということを、やわらかい脳が理解してくれるはずだと期待した。一方、中学生の参加は部活や学業を理由に断られる時期が続いた。しかし、あるとき中学校側から参加の意向が伝えられた。
- ・ この事業で重要な点は、当日の成功ではなく、当日までの準備にある。あるとき、施設利用者が買い物をしていた際、事業に参加した地域住民が声をかけてくれたことがあった。これは事前準備の段階で施設利用者と地域住民が関わりを持てたことの成果であった。こういったことの積み重ねが、自分たちも地域の一員なのだという認識に繋がっている。
- ・ (困ったときは) お互い様の心になるには、お互い支え合う感覚になる必要がある。
- ・ 福祉の文化祭は施設側にとっても貴重な社会活動になっている。

3 意見交換

分科会参加者が3つのグループに分かれ、話題提供の内容について意見交換を行った。話題提供者もグループに参加して頂き、より具体的な話を伺った。

(1) 橋本さんにかかる内容

- ・ 橋本さんは平日の日中は事業所のヘルパーに来てもらい、平日夜間と土日は自薦ヘルパーに来ていただいている。事業所ヘルパーは制度上対応できないことがある。例えば、畑の管理や猫のエサやり等。自薦ヘルパーにはこのような面を補ってもらっている。
- ・ 自薦ヘルパーの募集はチラシを配ったり、Webを活用したりと様々で、大勢の方に声をかけている。参加してくれる人はいるが、活動の定着となると声掛けした1～2割くらいの人数に留まる。
- ・ 自薦ヘルパーに参加してくれる人のきっかけは、在学中に松本で活発に活動をしたという人や、橋本さんとウマが合ってハマってしまう人等、様々。
- ・ 自薦ヘルパーたちと橋本さんとは友達のような感覚で、一緒に買い物をした

り県外まで出かけたりすることもある。いずれも橋本さん自身が主体的に「こういうことをしたい」という意思がある。

- ・ 橋本さんの自薦ヘルパーとして学生時代を過ごした方々は、現在百人近くになっている。経験者の方々は今も橋本さんとなつながりがあり、顔を出したり協力したりしてくれる。
- ・ 自薦ヘルパーとして学生さんのサポートがなくなってしまったときのことが心配である。
- ・ 自薦ヘルパーとしての経験値が、介護資格取得の際に考慮してくれるようになればいいのだが……。

(2) 福祉の文化祭にかかる内容

- ・ 以前は地域の団体が歌を教えに来てくれるなど交流が多かったが、コロナ禍で変わってしまった。
- ・ 福祉の文化祭を実施したことで、公民館長が頻繁に施設に来てくれるようになった。
- ・ 福祉施設の関係者が共に事業をすることにより、施設同士のネットワーク（情報共有）ができる。
- ・ コンビニで会った時に名前を呼べる関係（顔見知り）になっていたことがとてもいいと思った。
- ・ 7年度は6月を予定しているが、もう準備していかないと間に合わないため忙しい。
- ・ 事業をやっていると「その事業を実施する事」が目的になってしまう。
- ・ 実施までの過程が大切。
- ・ 役員（職員）が変わったときに本来の目的を引き継いでいく。

4 まとめ（編集後記）

本分科会では「共生社会」をテーマとして取り上げ、性別・国籍・文化・価値観等様々なジャンルがある中で「障がい」に焦点を当てて議論を深めた。

橋本さんの事例の場合、ご本人に一人暮らしをしたいという意志があり、その上で学生らに協力を仰ぐという行動力があつた。一方、そういった声を上げられない、声を上げにくいという状況に置かれた方々もいる。自分自身で手を挙げることの大切さだけでなく、声なき声を地域や公民館がどう拾い上げて広げていくかがポイントだろう。

福祉の文化祭については、寿地区の住民と福祉施設が共につながりを求める声があつたことで形となった。共通の悩みを持つ者同士が集うことでネットワークが形成され、それが地域づくりに発展していく。福祉の文化祭は寿地区に限った事例ではなく、他地区でも実践できる可能性を秘めている。

人は皆年齢を重ね、ハンデを抱えるようになる。福祉制度は必要だが、それだけでは足りない。「困ったときはお互い様」の心を育めば、誰もががお互いの違いを認め、尊重し合える「共生社会」があるのだろう。

第4分科会 みんなが集う場所をつくるには

話題提供者：	伊 藤 牧 絵	（ 田川小学校6年2組 担任 ）
	子どもたち 17 名	（ 田川小学校6年2組 ）
	遠 藤 彰	（ 大手公民館 館長 ）
司 会：	荻 原 し ほ み	（ 田川公民館 館長 ）
会場：中央公民館 会議室4-4／参加者：64名		

1 協議の柱

地域の人と顔を合わせほっとできる場所。人と人とのつながりをつくる場所。生活の困りごとを相談できる場所

そんな「集う」場所があれば、様々な世代の方、特に高齢の方は安心して暮らせるのではないのでしょうか？

そんな場所づくりを、各地区の事例をヒントに学びます。

2 話題提供

(1) 田川小学校にこわく交流会（松本市立田川小学校6年2組）

ア 概要

総合的な学習の時間の活動として、地域の人に気軽に田川小学校へ来てもらうことを目的とした「にこわく交流会」を開催。5年生の時から始め、2年間で計8回開催した。

参加した地域の人にほっと一息してもらうためにお茶のもてなしや、「なかよしすごろく」などで遊び、交流を深めた。公民館、福祉ひろばの利用者、児童センターや保育園、低学年の保護者や祖父母などに周知をし、様々な世代が参加した。



イ 活動の経緯

田川小学校では従来から、調理や製作、体験などの講師として地域の人が学校を訪れる機会が多くあった。しかし、その場のみの関わりになりがちであったこと、児童から地域の人のために何かをしたいという思いから活動を始めた。

ウ すごろく体験

「にこわく交流会」で実施している、児童製作の「なかよしすごろく」を体験した。

交流会を始めた当初は、地域の人と何を話せばよいか分からないことが多かったため、仲良くなるきっかけとしてすごろくを製作した。すごろくの中には

マスごとに「好きな食べ物は?」「今欲しいものは?」等の質問や「動物の鳴き声のものまね」「早口言葉を言う」などのお題があり、誰もが楽しめる工夫がされている。

子どもから高齢の方まで自然に会話が弾み、笑顔になることができる、交流を深めるきっかけづくりを体験した。



(2) みんなが集う居酒屋公民館（松本市大手公民館 遠藤館長）

ア 概要

各それぞれの地区において、若い人から高齢の方、様々な属性、考え方の人がいる中、人を集めるということ、みんなで色々な意見を交わす場を作ること、住民の外出のきっかけを提供することに苦労している。

その中で、今年で100回目の開催にこぎつけた、大手公民館の「居酒屋公民館」の事例を紹介し、他地区の公民館においても「居酒屋公民館」実施に向けたヒントとなるような要素を持ち帰っていただくというもの

イ 居酒屋公民館を始めるにあたっての課題

・目的

→みんなが集まれる「場所の提供」、地区の住民が「話をする事」。

そこにお酒の力を借りる。酒を飲むこと自体が目的ではない。

・開催へのハードル

→飲食物の準備

飲食店ではないので、みんなで持ち寄ればよい。公民館は場所の提供

→予算

持ち寄れば、公民館としての予算は不要。会費で消耗品程度は賄える。

→ルール

酒席でもあるので、事前にある程度のルール決めは必要

ウ 大手公民館での取組み事例紹介

実際に大手公民館で実施した居酒屋公民館におけるルールやバージョンアップの具体例を紹介していただいた。ただ単に開催するだけでなく、BBQやワイン講座、縁日といった背景や想いを汲んだテーマを設定した。各開催、地域住民や学生に運営をお願いし、住民たちが自ら作り出していくスタイルの確立をしていった。最初は数名の参加から始まった取組みであるが、回数を重ねテーマに工夫を凝らしていくうち、大勢に参加して頂けるようになった。



運営費用については、基本は持ち寄りで、消耗品やバージョンアップ等に充当するために、会費を徴収し、運営費用にあてる。

実施した結果、高齢者や男性といった層をはじめ様々な層が集まってきた。お酒の力を借りることで意見交換が進んだ。顔見知りが増え地域の結束が高まった。等の効果があり、住民が集まれる場所として「居酒屋公民館」が機能していることを実感しているということが紹介された。

3 意見交換

「どうしたら気軽に集まれる場を作ることができるか」をテーマとして、1グループ7人程度の6つのグループに分かれ、2回の意見交換を行った。各自が関わる事例や悩み、新たなアイデアなどについて話していただいた。また、居酒屋公民館の疑似体験として、飲料とお茶菓子を用意し、参加者の皆さんが飲食しながら意見交換を行った。

なお、トークでは最終的に何か答えを出したり、グループごとに内容をまとめて発表したりはせず、気軽に話してもらう中で、参加者が「気軽に集まれる場を作る」ためのヒントを得てもらうことを目的とした。

(1) グループトークの手順

ア テーマについて、参加者各自が付箋に事例やアイデア、悩みなどを簡潔に記入する。

イ 付箋を模造紙に貼付けながら、記入した内容についてグループ内で話す。

ウ 話された内容に関して、他の参加者からの意見やアイデアなどを話してもらい、取り組む上での悩みを解決したり、改善したりするアイデアを得る。

エ メンバーを入れ替え、1回目のグループ（入れ替えした先のグループ）で話された内容について、模造紙を見ながら説明して共有する。

オ 共有された内容に関して、1回目のグループで話された意見やアイデアなどを参加者が話すことで、より多くの意見やアイデアを得る。

(2) トーク内容の要約

ア 事例

カフェ、スマホ教室、男の料理教室、子どもの夏祭り、お役立ち講座、映画会、カラオケ道場、出前講座、百歳体操、誰でも食堂、多世代対抗ゲーム大会、ボッチャ、子どもに関わる事業 など



イ 悩み・課題と、それに対するアイデアなど

・男性が参加しない→居酒屋、男の料理教室（家で簡単にできるもの）、役割があるとやってくれる。

・参加者の固定化→クチコミ、地区を超えた参加、誰でもできること、やめて

しまうのではなく継続して行うこと、新しい人も入りやすい雰囲気

- ・スタッフ、参加者の減少（高齢化）→あまり負担にならない、多世代交流（子供を巻き込めば親や祖父母もついてくる）
- ・交通手段→送迎サービス（ボランティア、タクシー等）、地区単位でなく町会や自治会単位での催し

4 まとめ

(1) 事例発表について

- ・すごろくは誰にでもわかりやすい内容で工夫して作っており、わずかな時間の中でも、みんなを笑顔にできる素敵な発表だった。
- ・核家族化が進み、子どもたちも祖父母と同居する家も減っており、福祉ひろばに来ている人たちも、子どもたちと会えばきっと笑顔になると思うので、他の地区でも同じような取組みが広がって欲しい。
- ・居酒屋公民館は、人口密度が高く、広さが限られている市街地の公民館ならではの活動で、全ての地区でそのまま実施はできない。昭和や平成の合併地区などでは、町会単位で実施するなど工夫が必要
- ・完全な形でやろうとするとハードルが高い。まずはやってみたいという有志で集まってえんがわ事業といった形で動いてみる等、できるところからまずはやってみることが重要
- ・地域のイベントへ男性の参加が少ないという課題がある。居酒屋は参加のきっかけにもなるし、カラオケなど新しいことを取り入れることも新しい集客につながると思う。

(2) 分科会を通じて

本分科会では「協議の柱」を設定する中で、分科会会場を一つの「集いの場」に見立て、事例を聞いたり話したりするだけでなく、参加者に実際に模擬体験をしていただくことに重点を置いた。さらに、今回の分科会で答えが出るというものではなく、自分たちが「聞く」「話す」「体験する」ことを経て、各地区での集いの場づくりに関わるヒントを数多く持ち帰ってもらうことを目的としてきた。

意見交換を行う中で、どの地区でも悩みは一緒で、「①男性の参加者が少ないこと」「②参加者が固定化してきていること」が挙げられていた。しかし、課題があるからと活動をやめるのではなく、継続していくことが必要である。

同じ事業をやろうとしても、地区の事情は様々であり、やり方は変わってくるであろう。今回の分科会を通じて得た情報や新しいアイデアをそれぞれが持ち帰り、周りの人と共有しながら今後の活動につながることを期待したい。

みんなが

A PLACE WHERE
EVERYONE GATHERS.

集う

場所をつくるには？

2月16日(日) 時間：13:00～16:30

会場：松本市中央公民館（Mウイング）

地域の人と顔を合わせほっとできる場所。人と人とのつながりをつくる場所。生活の困りごとを相談できる場所。そんな「集う」場所があれば、様々な世代の方、特にご高齢の方は安心して暮らせるのではないのでしょうか？

各地区の事例を実際に体験（疑似）しながら、
みんなで楽しく考えましょう！

お茶を飲みながらざっくばらんに話ししましょう！！

事例発表①



写真：大手公民館提供

公民館居酒屋

大手公民館での取組を紹介いただき、実際に体験（疑似）してみます（お酒の代わりにお茶、コーヒーで行います）。

事例発表②



ニコワク交流会

（世代間交流）

田川小学校6年2組が行っている取組みを児童の皆さんに紹介いただきます。取組みの中で作成した「すごろく」を一緒に体験しましょう！



第5分科会 身近な資源を活用した地域づくり

話題提供者：	北山 英実	(JAZZ 雅鳴きたや)
	： 南 麻里子	(農家レストラン&カフェO l u O l u)
	： 関 谷 健 司	(だいじ屋)
司 会：	田 中 貢 治	(岡田公民館 主事)

会場：JAZZ 雅鳴きたや／参加者：27 名

1 協議の柱

松本市の魅力をそれぞれの価値観で捉え、熱意を持って住民とともに歩もうとする事例から、地域資源に対する視野を広げます。

地域を見つめなおし、自分ができる活動と、人と人とのつながりづくりを一緒に考えてみませんか。

2 話題提供

- (1) アルウィンの歓声とジャズが響き合う喫茶店 (JAZZ 雅鳴きたや 北山 英実氏)
ア 概要

川崎生まれ東京育ちで 30 代半ばから自然豊かな土地に移り住もうと考えていたところ、サッカー観戦で初めて松本へ赴き、景観の素晴らしさと臨場感あふれるアルウィンに惚れ込み松本への移住を決断する。そこから令和3年に積年の夢であったジャズ喫茶を開業



イ 身近な資源と地域づくり活動

(ア) 松本山雅

元々、サッカー観戦が趣味であり、地域密着型の松本山雅の存在を知った Jリーグのクラブがある市町村は限られているため、そのクラブがあることは大きな資源である。

(イ) 自然と融合したコンパクトシティ

北アルプスをはじめとした山々が見え自然豊かでありながら、文化・歴史的建造物等がコンパクトにまとまっている松本市に魅力を感じた。

(ウ) 松本に関わる人々

「JAZZ 雅鳴きたや」は、ジャズ喫茶でありながら、ジャズを聴くだけではなく、おしゃべりをしたり仕事をしたりと、好きに過ごしてもらえる場所にしたいという思いで営んでいる。山雅サポーターや地元の方など様々な方とお話する中で、人も地域資源であると感じている。将来は、ゲストハウスやシェアキッチン等、人と人がつながる場所になることを目指している。



(2) 中山間地域 奈川の農産物を伝える

(農家レストラン&カフェ 0lu0lu 南 麻里子氏)

ア 概要

「奈川の美味しい農産物、伝統野菜を守りたい」という夫の強い意志から、夫の生まれ故郷である奈川にUターン。標高1,200mの農地で少量多品目の野菜作りに励む。見えてきた課題に様々な工夫で立ち向かい、奈川の農産物の美味しさを伝える活動を続けている。

イ 身近な資源と地域づくり活動

(ア) 奈川のマルシェ

奈川の農産物を伝えるために、県内各地のマルシェ等へ出店しながらも、販路確保の苦勞を感じていた。

そんな中、奈川でマルシェの開催が検討されていたため、実行委員として参加することにし、近隣農園やジェラート屋さんとコラボして、若い世代にも知ってもらえるように商品を工夫した。当日は予想以上に多くの方が来場され、好評だったと感じると同時に、奈川の農産物を求めている人は多くいるのに対して、地元民が応えられていないと感じた。課題はあるが、マルシェはこれからも継続していくことが大事であると考えている。

(イ) 農家レストランの開業

厳しい環境下で育った農産物の美味しさをわかってもらうには、やはり食べてもらうのが一番伝わるだろうと考え、いつかはお店を開きたいと思っていたときに、奈川内の老舗そば屋さんが閉店するという話があり、居抜きで引き受け、令和6年7月に農家レストランをオープンした。

自家農園野菜の少量多品目の強みを活かし、色んな野菜を使った彩り豊かなメニューの提供を目指した。

地域の人がお茶をしてゆっくりできる
地域住民の憩いの場も目指しており、

今後はシェアスペースなどコミュニティ
広場として開放したいと考えている。

(ウ) 伝統継承イベントの開催

祖父母から教わった、農産物栽培のノウハウや山菜取りなど、奈川らしい暮らしを発信したいと考え、去年の秋に初めて伝統継承イベントを開催した。

伝統野菜である「保平カブ」の収穫から甘酢漬け体験、郷土食「えだんご」作り体験など、地元の方々にも手伝っていただいた。

また、農業の担い手不足も課題であることから、泊まりながら農業体験をする農泊イベントの実施も検討している。



(3) 地域で作る 奈川の魅力発信ツアー（だいじ屋 関谷 健司氏）

ア 概要

乗鞍・上高地エリアで自然案内ガイドの仕事をしていたが、生活している奈川の住民の優しさや自然環境の豊かさから、たくさんの恩を感じ、いつか恩返しをしたい、奈川の力になりたいという思いが強くなっていき、奈川の魅力を発信するツアーをしたいと考えた。

葛藤がありながらも、令和5年に住宅兼事務所として「だいじ屋」を開業。ツアーガイドを通じて感じたものから今後の展望がみえてきた。



イ 身近な資源と地域づくり活動

(ア) 奈川を愛する地元住民

どうやったら地域に貢献できるか、自分に何ができるかを考えた結果、奈川を愛している地元住民にガイドしていただき、奈川での暮らしを外の人に伝える役割として関わってもらい、その対価を支払うことにした。

この仕事で感じるやりがいや幸せ、喜びを、地域の人と共有したいという思いもあった。

今後も、奈川でツアーガイドをしながら、想いを発信して、地域の方と共に楽しみながら、生きがいを感じながら進めていきたい。奈川の魅力は、何よりも奈川の人が一番の地域資源であり、一番の宝である。

(イ) 悪い面も地域の魅力

奈川の良い面も悪い面も観光客に共有すると、悪い面も地域の魅力のひとつとして感じてもらえることがある。また、課題を発信すると、奈川の一員として何か協力したいと寄り添ってくれる人もいて、自分の思いが通じていると感じ、自分に何ができるかの再確認ができたと感じる。

観光業者として、奈川の魅力や問題に、外の人が触れられるハブの役割を意識して、取り組んでいる。

3 意見交換

(1) 発表を通じて、共感したことや新たな気づき等

ア 当たり前だと思っているものでも、視点を変えると一つの資源になり得る。

イ マイナス面を嘆くばかりだったが、身近にある資源に気が付いていない可能性があると感じた。

ウ 『「人」が地域資源である』ということが大きな発見であり、人に焦点を当てることで、気付いていない地元の良さを新たに発見できるのではと感じた。

(2) 更に活動に広がりを持たせるためのアイデア等

ア 地域で熱意を持って活動されている方と公民館とのタイアップで、人集めや周知が更に強化されることで、活動の広がりにつながると考える。

イ イベントのなかに楽しさだけではなく学びも取り入れていく。

ウ 地区間の協力や往来が増えるといい。

(3) 自分の地区に活かしたいと思った点、課題になりそうな点

ア 地区ごとに特色・資源が異なるため、情報発信を継続していくことが必要

イ 行政と市民が連携しつつ、市民主体の活動を盛り上げていくことが大事

ウ 地区内の課題等を、観光客を含めた地区外の方に共有すること。

エ それぞれが補い合い、価値を作っていくことができるといい。

オ エネルギーのある人を活かす方法を考えたい。

4 まとめ

地域資源とは何か、松本市を移住先に選んだ方々から、きっかけと現在の活動の発表を聞いた。熱意を持って様々な活動に取り組む姿勢は参加者の心を惹きつけ、普段当たり前にあるものでも、視野を広げ見方を変えることで地域資源と成り得るものがあることを気付かせてくれた。

また、地域資源（魅力）と併せて、地域にある様々な課題を発信し共有することで、地域に関わりたいと願う人たちが増えるケースもあり、今までにない魅力発見に繋がる可能性を秘めていることも学んだ。

多様な立場の者が気軽に集い、つながり、お互いが得意なことを持ち寄り、必要なところを補い合うことが重要であると考えます。

この点で、本分科会では、準備段階を含めて、発表者の良さを実感できるように、以下の取組みを行った。

◎ J A Z Z喫茶「J A Z Z雅鳴きたや」を会場としたこと。

◎ 奈川の伝統野菜を使用した「農家レストラン&カフェO l u O l u」のお弁当の販売をしたこと。

◎ 昨年度の本集会の成果から、分科会の最後に「だいじ屋」によるストレッチ体験を取り入れたことで、参加者同士、一日を振り返りながら、リフレッシュできたこと。

地域資源は「物」だけでなく「人」も含まれると考える。普段の生活では、当たり前と捉えて気付きにくい地域の資源（魅力）を愛し、熱意をもって活動する人々は、地域の大きな資源（魅力）だと言い切ることができ、松本市35地区すべてに言える。どれだけ地域を巻き込み、人と人がつながれるか。広い視野で地域の資源（魅力）を捉え、さらに付加価値をつけながら今後の地域づくりに活かし、地域に愛着をもった考えが波及していくことを期待する。



身近な資源を活用した 地域づくり

未来へつなぐ私たちのまちづくりの集い
第40回松本市公民館研究集会
令和6年度松本市地域づくり市民活動研究集会



農家レストラン&カフェ
OluOlu

第5分科会 事例発表者



だいじ屋



JAZZ雅鳴きたや

2.16 2025
sun
13:00-16:30受付12:30～

会場：JAZZ雅鳴きたや
松本市笹賀2993-1
裏面に地図あります

松本市の魅力を
それぞれの価値観で捉え、
熱意をもって住民と
共に歩もうとする事例から

地域資源に対する視野を広げます。

67 地域を見つめなおし、自分ができる活動と、
人と人とのつながりづくりを一緒に考えてみませんか

【参加申込】 松原地区公民館まで電話(0263-57-2322)又は、FAX(0263-85-3103)
「2月16日きたや参加希望」「身近な資源を活用した地域づくり参加希望」等でお伝えください。

【申込締切 2月7日(金)】

※当日、午前中開催のパネルディスカッションは、当会場でオンライン視聴できます。

詳細は右記の2次元コードよりご確認ください。

※農家レストラン&カフェOluOluのお弁当(要事前予約)、JAZZ雅鳴きたやのドリンク販売をします。



主催：松本市、松本市教育委員会、松本市地域づくり研究連絡会

MAP

車でお越しの方は、(有)ガレージ・ササガ様の駐車場に駐車してください。(会場まで徒歩1分)



MENU

※お支払いは現金払いをお願いします

- OluOlu特製弁当 ¥1,000-
旬の野菜を食べましょう。冬の貯蔵野菜を使いながらお作りします。
伝統野菜保平かぶの甘酢漬もお入れします。
- コーヒー ¥500- HOT
自家焙煎の豆をペーパードリップで淹れた香味溢れる珈琲。
嫌な苦みや雑味がないので、ブラックがおすすめです。
- カフェオレ ¥500- HOT
- 紅茶 ¥500- HOT
- りんごジュース ¥400- COLD
- オレンジジュース ¥400- COLD
- ジンジャーエール ¥400- COLD
- コーラ ¥400- COLD

第6分科会

町会のシンカ

話題提供者：	浅	野	尚	志	（島立地区町会連合会長）
	大	谷	聡		（和田地区西原町会・情報部長）
司 会：	宇	治	樹		（中山公民館・主事）
会場：中央公民館 会議室3-2／参加者：36名					

1 協議の柱

「町会」ってなんだろう？

日々、ヘンカしていく地域社会や住民ニーズに対して「町会」もシンカが必要ではないでしょうか。

町会の負担軽減・効率化に関する実践事例、アプリを使った回覧板の負担軽減の実践事例から「町会」について一緒に学びませんか？

2 話題提供

(1) 働きながらでもできる町会長・町会役員 ～町会の負担軽減・効率化～

ア 町会とは（地域づくり課 内山係長）

イ 松本市町会連合会の取組み（浅野尚志氏）

(ア) 町会依頼業務の棚卸し

市全部局へ町会依頼業務について調査、町会依頼業務の棚卸し

(イ) 町会活動の見直し

島立地区住民意向アンケート調査

(ウ) 町会のデジタル化

町会連合会三役へモバイルPCの配布を検討

(2) 町会DX推進による地域コミュニケーションの向上（大谷聡氏）

ア 西原町会の現状と課題

(ア) 情報をタイムリーに発信、受信、共有することができない。

(イ) 回覧板の頻度が多く、ゆっくり読むことができない。

(ウ) 役員から重要な情報の発信ができない。

イ 町会DX推進の目的

(ア) リアルタイムな情報発信を行う。

(イ) 相互コミュニケーションを目指す。

(ウ) 安否確認、防災等の備品管理を行う。

ウ 「J i c h i N a v i」アプリの利用

(ア) 電子回覧板

(イ) イベントカレンダー（中止の連絡もアプリで行う。）

(ウ) 公民館予約をネット申請に変更

(エ) ファイルの共有（書類の電子化）

(オ) 安否確認、防犯情報の配信

エ 成果と今後の展望

- (ア) 情報共有スピードが向上した。
- (イ) 安否確認の迅速化が進んだ。
- (ウ) 町会活動への参加意識が向上した。
- (エ) アプリ利用者の加入率向上を進めていく。
- (オ) 防災機能をより強化していく。

3 質疑応答

(1) 松本市町会連合会の取組み

- ア 町会の加入率はどうなのか。町会は世帯数が少ない町会や多い町会様々ありますが、町会の合併をすすめているか？
- ・町会加入率は 74.06%、年々減っているが、中核市の平均は 66%なので高い方ではないか。
 - ・市では町会合併のお手伝いをしますが、合併してくださいと要請はしていない。ご相談をお聞きすることは可能です。

(2) 町会DX推進による地域コミュニケーションの向上

- ア アプリの導入費用について
- ・登録料と利用料が発生する。初期費用は 12 万円くらい、
 - ・利用料は町会の収入の 2%（収入には補助金・助成金は含めない）
- イ 情報発信は、すべて情報部長が対応していますか？
- ・それぞれ部会等の担当者が対応しています。
- ウ アプリを導入して、誹謗中傷やいたずらなどはないか？
- ・今のところはありません。管理者権限があるため、書き込みを制限することも可能です。

4 意見交換

分科会参加者が 6 のグループに分かれ意見交換後グループ発表を行った。
主な意見は以下のとおり。

(1) 事例発表を聞いた感想

- ・アプリの存在を少しでも知ってもらいたい。
- ・現場でコーディネーターをされている方々で、かつポジティブな姿勢を持たれていることに感心しました。それゆえに信頼されるコミュニケーションが成立しているのだと感じた。
- ・アプリを導入していく必要がある。
- ・現在、町会の役員は 65～75 才が多いため紙と併用が必要ではないか。
- ・町会負担軽減・効率化は継続して進めていただきたい。
- ・町会DX推進については、町会の高齢化等で配布物が大変なので取組みたい。
- ・DXの必要であるが地域のつながり、顔の見える関係も大事と感じた。
- ・町会連合会の取組みは削減件数など目に見えて結果が分かった。
- ・大谷さんの事例は目から鱗だった。DXの導入で若い世代との交流が生まれる。

D X推進のため地域づくりセンター・公民館の支援も必要ではないか。

- ・アプリの全てを行うのではなく、公民館予約、安否確認などできることからやってみたい。
- ・D Xに詳しい人が役員でなくなった場合でも大丈夫なように後継者を育成することも重要

(2) 今、町会で取り組んでいること等

- ・引継ぎのルール化を進めている。
- ・公民館が改築されたため、従来の活動を厚くすることと新たな使い方を検討している。
- ・隣近所の交流の促進している。
- ・行事、イベントなどの魅力ある町会づくりを目指している。
- ・役員の担い手については、町会内での全員参加でもあり、役員については順番が数年先まで決まっている。町会戸数も50戸弱で全員がある程度納得して理解している。
- ・庄内では小学校が場所、イベントに絡めて防災について活動している。
- ・役員を1年任期にして輪番にしている。
- ・マンションの住民は簡単な役員をお願いしている。
- ・防災キャンプの実施を計画している。
- ・新しい事業に取り組むのではなく、既存の事業を縮小し、無くならないように工夫している。
- ・1年前まで、信大生が空き家を利用し地区住民と交流していた。

(3) その他

- ・町会の負担軽減でデジタル化を進めていただいています、D X化についても、松本市・各地域づくりセンターで、配布物について削減に繋がられないか検討をお願いしたい。
- ・役員不足、ゴミ出しの課題が多い。
- ・防災の安否確認をLINEでやりたい。
- ・公民館居酒屋をやってみたい。
- ・住民がふらっと来て、お茶を飲みながら集まり、子ども達も放課後に立ち寄れる町会公民館を目指したい。

5 まとめ

松本市には35地区、485町会あり、それぞれの地域性、地形、環境、人口、世帯など異なっている中で、分科会に参加していただいた方が、事例発表や意見交換を通じて、町会活動が快適になるような発見が1つはあったと思います。

各地域づくりセンター・公民館は町会のお役に立てるよう、協力や相談を続けていきたい。



公民館研究集会 第6分科会

町会のシンカ

令和7年2月16日(日)

町会とは

住みよい地域を地域住民が主体となって取り組む
相互扶助組織

- ① 一定区域に住所を有する住民等で構成された団体
- ② 住民自らが、良好な地域社会の構築に向け、共同活動を行う任意の自治組織
- ③ 地域に住む住民全員が参加できる公共的な性格を有する
- ④ 地域住民の意見を代表する組織としての役割を持っている

町会の歴史

町会の起源については諸説ありますが、
農耕牧畜生活を営むために一定の地域に定住した
集団による「共同体の自治」が原点とされている

農村における「村落共同体(ムラ)の自治」を
社会秩序の基盤とし、中世末期には
既に町会の起源となる
地域生活の協力単位があったとされている

町会の歴史

現在に直接つながる住民の自治組織としての町会は、
明治維新を経て、大正時代に組織体制が形成された

【昭和戦前期の町会】

- ① 1928年(昭和3年)、行政事務の円滑な遂行と、区長同士の連携を図るため
「松本市区長会」が結成、区長会には会長・副会長・評議員・幹事を置く
- ② 1940年(昭和15年)、戦時下の国策遂行のため、内務省から都道府県に
「部落会町内会等整備要領」が通達
※ 町内会を市町村の下部組織に位置付ける

町会の歴史

終戦直後の町会

- ① 1947年(昭和22年)、連合国軍総司令部(GHQ)から戦争遂行組織として機能した町内会への解散令(ポツダム政令第15号)
- ② 生活維持のための相互扶助組織は不可欠であり、町内会解散後も防犯協議会や町内公民館として町会の一部の機能は維持
- ③ 1948年(昭和23年)、住民自らの手でつくる理想的な自治組織が必要との動きから、各町内で選ばれた委員により「松本市生活協議会」が組織
- ④ この組織が後に「松本市町会連合会」へと引き継がれる

町会の歴史

昭和戦後～現在の町会

- ① 1952年(昭和27年)、サンフランシスコ講和条約による日本の独立回復に伴い、町内会が復活
- ② 戦争遂行手段に利用された経験を踏まえ、復活後の町会は民主的な町会活動の推進を目指す
- ③ 1954年(昭和29年)、昭和の市村合併を機に「松本市町会連合会」が組織「生活協議会」を「町会」に、「協議会連合会」を「町会連合会」に、「協議会長」を「町会長」に改称
- ④ 会則に「市民全般の福祉、市行政の運営に協力」という目的が加えられる
- ⑤ 現在、松本市の町会は485の単位町会、35の地区町会連合会、松本市町会連合会の三層構造

町会と市との関係

町会と市は、より暮らしやすい地域の実現
「地域づくり」を推進する
重要な協働のパートナー

町会は、町会員が自分達の住む地域を
良くするために組織された
任意の住民自治組織で、
市の下部組織ではない！

住みよい地域づくり

基本的な市の活動の上に、町会独自の活動が上乗せされることで、
より暮らしやすい地域が実現されていく

町会の活動

親睦事業
スポーツ大会
レクリエーション
懇親会 等

環境・衛生事業
ごみステーションの管理
ごみの分別収集
一斉清掃、景観整備 等

町会保有財産の管理
町内公民館の貸出 等

防災・安全事業
交通安全対策
防災訓練
防犯活動 等

広報事業
町会だよりの発行、回覧板 等

町会団体支援
高齢者クラブ
子ども会育成会
PTA 等

市の活動

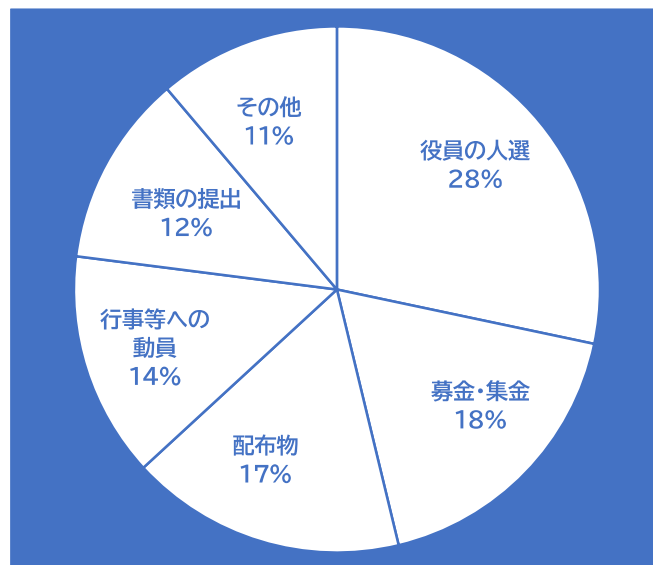
地域づくりセンター
地区公民館
地区福祉ひろば 等

包括支援センター
児童センター
社会福祉協議会 等

道路等の整備
上水道・下水道
小・中学校、公園
消防署、保育園 等

市役所
関係部署

町会長が負担に感じていること



地区・町会の負担軽減に関する調査(R3.1実施)

町会長が負担に感じていること

【役員の人選が負担となっている理由】

- ① 人選を負担に感じる理由として最も多いのは、「なり手がいない」
- ② 次に多いのが、「引き受けてもらえない」、「住民の高齢化」

【配布物が負担となっている理由】

- ① 配布物に係る負担の理由として最も多いのは、「量が多い」
- ② 次に多いのは、「ほとんど読まれないものを配る負担感」、「配布回数が多い」

【動員が負担となっている理由】

- ① 動員を負担と感じる理由として最も多いのは、「人集めが難しい」
- ② 次に多いのは、「参加が特定の人に集中」、「高齢化で参加が困難」

地域社会の変化

価値観等の多様化

- ① 町会活動に非協力的な住民増加(全員参加型町会の終焉)
- ② 町会における助け合いを中心とした相互扶助的な関係、身近な町会住民と関わる必要性の希薄化
- ③ 町会活動に関わらなくても、趣向性や課題認識といったテーマに応じた多様な活動機会(NPO活動等)の増加

共働き家庭の増加

○ 女性就業率の増加

2005年 58.1% → 2022年 72.4%(+14.3ポイント)

※ データ元(男女共同参画白書)

地域社会の変化

高齢者就業率の増加

○ 人口に占める労働力人口の割合(労働力人口比率)

① 65～69歳

2005年 34.8% → 2022年 52.0%(+17.2ポイント)

② 70～74歳

2005年 21.7% → 2022年 33.9%(+12.2ポイント)

③ 75歳以上

2005年 9.1% → 2022年 11.0%(+1.9ポイント)

※ データ元(高齢社会白書)

地域社会の変化

インターネット利用状況

- インターネット利用者の割合は、13～59歳の各年齢階層で9割を超え70歳以上の年齢階層では上昇傾向

- ① 60～69歳 86.8%
- ② 70～79歳 65.5%
- ③ 80歳以上 33.2%

※ データ元(高齢社会白書)

町会の現状と課題

市からの依頼事項の多さ

- 全戸配布・回覧をはじめとする文書配布の依頼、各種役員の推薦依頼など
多くのことが市から町会へ依頼されている
このことが町会長をはじめ町会役員の負担増に繋がっている

町会の現状と課題

町会活動の多さ

- 市内にある485町会の多くは、昭和に設立されている町会運営や活動は、令和の今もほぼ昭和に近い町会もあるこの前例踏襲的な町会運営・事業や町会の業務量の多さが住民の「負担感」や「やらされ感」を生み、町会の魅力を下げる要因の一つとなっている

町会の現状と課題

時間的余裕がない

- 若い世代は共働き家庭が多く、子育てなどもあり、町会活動に関わる時間的余裕がない
また、町会の担い手として期待される高齢者も、年々就業率が増加しており、町会活動に関わりにくくなっている

松本市町会連合会の取組み

働きながらでもできる町会長・町会役員
～町会の負担軽減・効率化～

地域社会の変化や住民のニーズに合わせた
町会組織へ変化していく、
持続可能な町会づくりを進める

- ① 地域社会の変化や住民のニーズに合わせ、「何を残し、何を削減するのか」を議論しつつ、現実的な町会の将来ビジョンを描き、町会運営を変化していく
- ② 効率化等による担い手の負担感低減及び、前例踏襲的な組織運営・事業と住民ニーズとのギャップ解消による「やらされ感」の低減を図り、町会活動への参画を促す

働きながらでもできる町会長・町会役員 ～町会の負担軽減・効率化～

取組み方針(3つの柱)

① 町会依頼業務の棚卸し

- 市が各町会へ依頼する業務(役員選出等)の見直しについて、検討を進め、
町会負担軽減を推進

② 町会活動の見直し

- 町会で行っている親睦事業、広報、環境・衛生、防災・安全等、多様な業務の見直し検討を進め、
町会負担軽減を推進

③ 町会のデジタル化

- 限られた時間(働きながら等)でも会議や情報共有、効果的な情報発信ができる環境整備の検討を進め、
町会負担軽減を推進

働きながらでもできる町会長・町会役員 ～町会の負担軽減・効率化～

① 町会依頼業務の棚卸し(具体的な取組み)

(1) 町会依頼業務の調査(抽出)

- 市全部局へ町会依頼業務について調査を実施
【調査項目】
①文書配布 ②役員選出 ③書類提出 ④動員 ⑤その他
【調査内容】
①依頼業務の名称・内容
②必要不可欠な業務(市側・町会側の必要性)
③法的根拠のある業務(委員推薦等)
④町会でなければできない業務
⑤市直営やNPO等で可能な業務 など

(3) 依頼業務の必要性整理

- 各部局からの調査結果内容等を整理し、町会連合会のコメント(要望等)を記載
さらに、内容によっては、関係課のヒアリングを実施
(ヒアリング実施件数 7項目)

(2) 調査結果(項目別件数)

- 合計 100件
①文書配布 26件 ②役員選出 27件
③書類提出 21件 ④動員 3件 ⑤その他 23件

☆町会依頼業務の内容(一例)

【役員選出】

- 民生委員の推薦 ○青少年育成センター補導委員
○公民館委員 ○松本市交通安全協会
○避難所運営委員会 ○環境衛生協議会 等

【文書配布】

- 広報まつもと(全戸配布) ○公民館報(全戸配布)
○議会だより(全戸配布) ○ひろばだより(回覧配布)
○学びの森いんふおめーしょん(回覧配布) 等

【書類提出】

- 各地区・町会への補助金や交付金等の申請書関係

働きながらでもできる町会長・町会役員 ～町会の負担軽減・効率化～

① 町会依頼業務の棚卸し(具体的な取組み)

(4) 棚卸し結果

- 依頼業務の必要性の整理やヒアリング結果を踏まえ、市へ依頼業務の見直し等を要望

【棚卸し結果】

- ①削減 6件
- ②削減に向けて協議 15件
- ③内容の改善を要望 19件
- ④了承 60件

【棚卸しの基本的な考え方】

- ① 市町会連合会の目的の一つとして、「市政の運営に協力すること」掲げており、「市政の運営に協力すること」を前提
- ② しかし、485の町会は、人口規模や立地、地域性も様々なため、画一的な対応が難しい状況
- ③ そのため、町会依頼業務について、地区・町会からの相談に応じ、地区・町会の実状を勘案した対応を要望



(5) 町会依頼業務への要望等(コメント一例)

【文書配布】

- 各課が町会へ依頼する文書(全戸配布・回覧物)について、広報まつもとへの一元化掲載を検討し、配布物削減を要望

【役員選出】

- 地区・町会によっては、今後、選出が困難になる場合も想定されるため、地区・町会から相談があった場合は、実状を勘案していただいた対応を要望

【書類提出】

- 各種申請については、電子申請への移行を行い、負担軽減を図ることを要望

働きながらでもできる町会長・町会役員 ～町会の負担軽減・効率化～

② 町会活動の見直し(具体的な取組み)

○「島立地区 住民意向アンケート調査」の取組み

コロナ禍後に町会からあがる意見など

コロナ禍で中止していた茶話会復活した方がいいのかな？

町会対抗スポーツ大会の選手が集まらない。

敬老会を再開したいけど、役員が代わってどんな準備をしたらいいのか？ 参加者は集まるのか？

町内公民館で事業再開したけど、参加者がコロナ禍前より激減している。

町会の役員や委員の担い手がいない

前例踏襲的な組織運営や事業でいいのか

コロナ禍で役員の引き継ぎがなくて、どんな準備をしたらいいのか。

コロナとは関係ないが、物価上昇が激しくてこれまでと同じ町会活動を継続できない。町会費を上げる状況にもない。



私たちが行っている事業や行事が住民の方が望む町会活動となっているのか
住民の思いをしっかりと確認した方がいいんじゃないか！！

働きながらでもできる町会長・町会役員 ～町会の負担軽減・効率化～

② 町会活動の見直し(具体的な取組み)

○「島立地区 住民意向アンケート調査」の取組み

住民意向アンケート調査を実施しよう【経過】

令和5年	
10月19日	定例町会長会で住民意向アンケート調査の実施を提案、承認を受けた。
11月21日	定例町会長会で、今後のスケジュール等を検討した。
12月	地区社会福祉協議会、町内公民館長会等地区内の主要団体に意見聴取した。
令和6年	
1月～3月	地区内で活動する団体、役員等にアンケート調査項目等の調査を実施した。
4月18日	調査結果を受けて、定例町会長会で次の事項を決定し、内容については継続検討とした。 ・アンケート調査は地区内全戸に行う。 ・アンケートの回答はすべての住民が回答できるようにする。
5月15日	定例町会長会でアンケート内容を検討した。(以降、定例町会長会で継続検討を進める。)
5月24日	松本大学大蔵准教授にアンケート調査について内容等を相談する。 その後、6月1日付けでアンケート調査アドバイザーとして委嘱する。 (以降、定例町会長会での検討内容等を共有し、意見を求めた。)
8月	加えて、アンケート結果の集計について松本大学の学生の協力を得ることになった。
10月 7日	アンケート調査項目案を各団体等に送付し、意見を聴取した。
10月17日	三役会でアンケート調査の内容を詰める。
10月17日	定例町会長会でアンケート調査最終版を確認した。
11月20日	アンケート調査を配達地域指定により島立地区全戸に発送した。(投函12月16日まで)

働きながらでもできる町会長・町会役員 ～町会の負担軽減・効率化～

② 町会活動の見直し(具体的な取組み)

○「島立地区 住民意向アンケート調査」の取組み

アンケートの内容等について

- 少子高齢化、人口減少、意識の変化、価値観の多様化が進む中、現状の町会事業や行事が地域住民が望む活動となっているのか現状把握
- 調査対象は……
 - ・ 町会加入、未加入の区別をつけずに全世帯を調査対象とした。(配達地域指定)
 - ・ 世帯主だけでなく、子どもも含め世帯員全員からの回答を可とした。(回答用紙3部同封)
- 調査内容は……
 - 設問は、48問です。
 - ・ 回答者、家族構成の状況は ・ 島立に対する思いは ・ 近所付き合いは ・ 災害時の対応は
 - ・ 子どもの健全育成のためには ・ 高齢者が安心して暮らせるためには ・ 困りごとや不安なことは
 - ・ 地区や町会の活動は など
- 調査結果は……
 - ・ 発送件数 3,198通 ・ 返信件数 865通(回答用紙 1,474通) 令和7年1月15日現在

回答内容は、松本大学の学生さんの協力を得て、集計中です。

働きながらでもできる町会長・町会役員 ～町会の負担軽減・効率化～

(3) 市町会連合会のデジタル化(具体的な取組み)

① 町会連合会三役へモバイルPCを配備検討

- 町会連合会三役へのモバイルPCを配備しても、費用対効果の観点から期待効果は小さいと判断し、配備については見送り決定

【費用】

- @34,000×12カ月=408,000円
- ※ モバイルPC(8台分)

【効果(効率化)】

- 会議通知、資料のペーパーレス化
- 三役会(臨時三役会)のリモート開催
- 市依頼の審議会等へのリモート参加

② 町会連合会常任理事会通知等(11月から変更)

- 郵送通知からメール通知に変更し、郵送料削減
- ※ 常任理事の個人メルアドへ通知等送信

- LINEによる各種通知等実施(2月から実施)

- ※ LINEグループへ常任理事が登録し、通知等送信

③ 町会連合会常任理事会のリモート開催

(12月、2月実施)

- 各地区地域づくりセンターのデジタル機器を活用し、常任理事会をリモートで開催

令和6年度 まちづくりの集い

町会DX推進による 地域コミュニケーションの向上

～アプリ導入による情報共有の効率化と住民参加の活性化～

2025.02.16

大谷 聡(西原町会 情報部長)

自己紹介

大谷 聡（おおや さとし） S52.10.22 47歳

2018年に市内より西原町会へ移住。2023年より情報部長を務め、アプリの導入などを通じて町会のDX推進に取り組む。47歳、小学生の息子と妻の3人家族。出身は東京。メーカーに勤務し、DX推進を担当。

デジタル技術を活用した地域コミュニティの活性化に関心を持ち、「町会のシンカ」について皆様と意見を交わしながら、地域課題の解決と未来に向けたより良い方策を共に模索できればと考えております。



西原町会について

和田地区 西原町会



- 平成20年発足
- 和田地区で最も新しい町会
- 町会加入世帯:319世帯
- 64歳未満の割合85%
(市全体 約70%)
- 町会加入率 99%

DXって、なんだろう？



なにかと話題のAI: ChatGPTに尋ねてみました

DX(デジタルトランスフォーメーション)とは、単にIT技術を導入することに留まらず、デジタル技術を活用して企業や組織のビジネスプロセスや業務の運営、さらには顧客との接点、組織文化など、あらゆる側面を根本的に変革することを指します。

町会DXと、デジタル化(IT化)の違い

- **デジタル化(IT化):**
既存の業務をデジタルツールで効率化すること
 - 例: 回覧板をPDFにしてメール・LINEで送る
- **DX(デジタルトランスフォーメーション):**
デジタルを活用して業務や組織の在り方を根本的に変革すること
 - 例: アプリを導入し、回覧板だけでなく安否確認や住民の意見共有まで一元化、町会組織の運営と、住民とのかかわり方を変革する。

本題へ・・・

自治会組織の全国的な課題

全国的な課題

自治会・町内会の持続可能性に関する課題として、
以下が挙げられています：

1. 総務省の報告内容：

加入率低下、担い手不足、情報伝達の遅れ

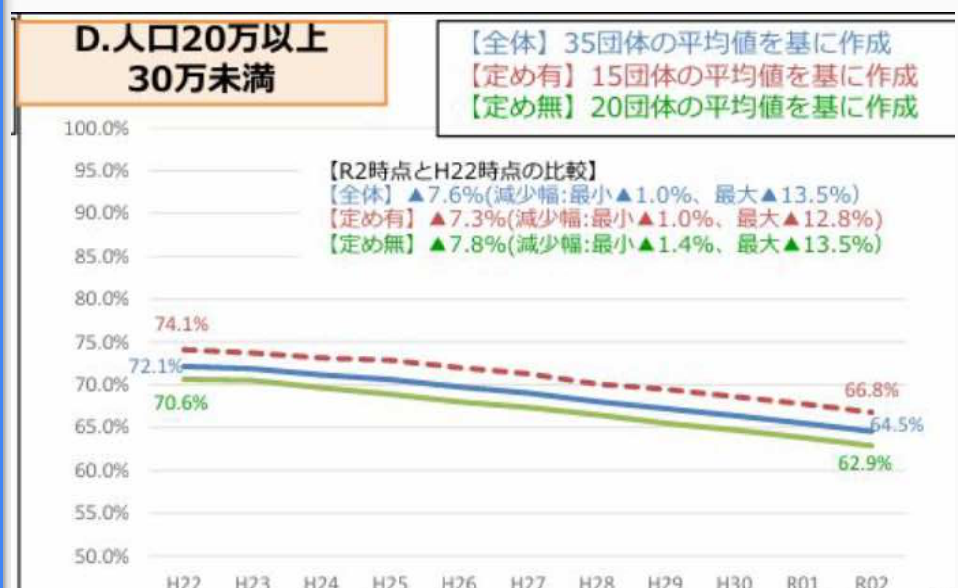
2. 地域で直面する具体的な問題：

高齢化、人口減少、コミュニティ希薄化

詳細は[こちら](#)で確認できます。

引用：総務省 [地域コミュニティに関する研究会](#)
自治会・町内会の 活動の持続可能性について
令和3年10月25日 総務省自治行政局市町村課

同規模の全国平均 自治会加入率



引用：総務省 [地域コミュニティに関する研究会](#)
自治会・町内会の 活動の持続可能性について
令和3年10月25日 総務省自治行政局市町村課

松本市 町会加入率

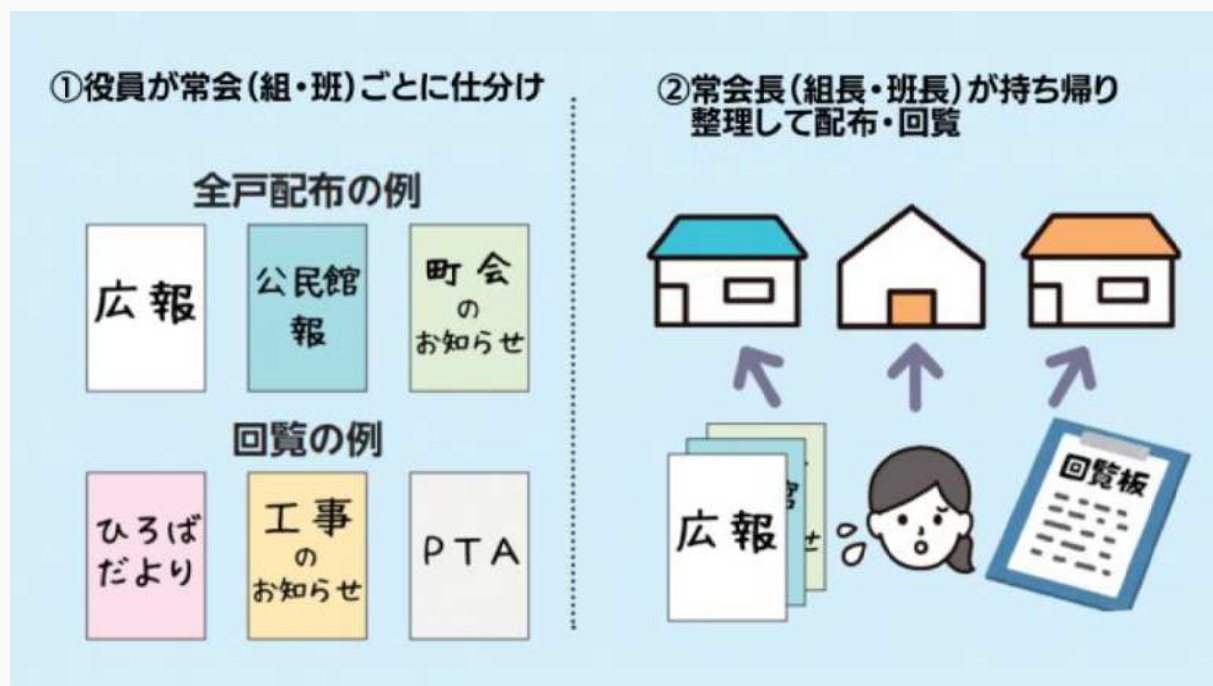
74.9%

市内全485町会の町会加入率 2023年4月1日時点
コロナ禍を含む5年間で3・8ポイント低下した。

引用:

[町会の仕事スリム化支援 松本市が方針 依頼業務見直し
負担軽減 | 地域の話 | 株式会社市民タイムス](#)

西原町会の現状と課題



解決したい課題 | より暮らし易い街づくり

1. **情報をタイムリーに発信・受信・共有することができない**。
 - a. 草刈り・雪かき・イベントの開催／中止の連絡など。
 - b. 防災防犯情報、公共工事など、行政連絡など。「迅速に伝える手段がない」
2. **回覧板の頻度が多い、期日に間に合わない、ゆっくり読めない**。
 - a. 週に数回になることもある。「また回覧板がきた」
 - b. 締め切り間近の広報連絡などが「間に合わない」
 - c. 家族の一部しか回覧版を確認できない「妻しか見てないので ...」
3. **会長役員、班長、各部会から、重要な情報の発信ができない**。
 - a. 町会役員により多くの地域貢献活動が行われているが「伝わらない」
 - b. なので...町会による活動・予算使途についての「納得感がない」
4. **同好会、文化会、スポーツ部会などの情報発信コミュニケーション**
 - a. 活動の記事、部員の募集など。部員間の「連絡・コミュニケーション」

町会DX推進の目的

目的 | スローガン

情報の共有、コミュニケーションの課題を解決し、
”より暮らし易い街づくり”に貢献する

- ・より早く | リアルタイムな情報発信 | 電子回覧版、お知らせ、
- ・より分かりやすく | 相互コミュニケーション | 活動透明性の確保
- ・より安心して | 安否確認、防災等備品管理・防災管理機能
- ・より活発に | 班別・部会別のファイル共有・チャット機能

JichiNavi導入と施策

アプリ機能

電子回覧板

西原町会 | 長野県松本市和田地区

ホーム > メニュー > 閲覧一覧 > 閲覧

編集メニュー

編集 削除

西原町会 | 長野県松本市和田地区

犬の糞害について

飼い主の皆さん、フンの処理・ルールを守って適切な処理お願い致します。

発信者 中澤 英樹

📎 0 2024/07/30 19:17 発信

添付ファイル

犬の糞害回覧板.pdf

閲覧状況

詳細

コメント (質問・確認・問い合わせなど)

登録されていません。

コメント登録 (質問・確認・問い合わせなど)

(発言は、ここに記入し、送信ボタン)

送信

閲覧

令和6年8月
西原町会

犬の飼い主の皆様へ

西原町会内で、犬のフンの放置が多く見受けられます。特に、一帯分譲地のグリーン歩道付近に多く、近くの住民の方から、多数苦情の声があります。西原町会としても、大変困っています。飼い主さんは、フンの処理・ルールを守って適切な管理をお願い致します。

犬のフンは飼い主が持ち帰しましょう

分譲地
グリーン歩道

西原公民館

ふんは飼い主が持ち帰しましょう

尿には水をかけましょう

マナーを守って
きれいなまちを

*ご近所の皆様、心当たりや情報等がございましたら、各班長までお教えてください。

イベント カレンダー

1. 例:草刈り日程

- ・予定機能で、いつでも確認可能
- ・雨天中止判断を即時通知可能

西原町会 | 長野県松本市和田地区

ホーム > メニュー > 予定一覧 > 予定一覧 (過去分)

予定一覧 (過去分)

2024
7/28
(日)

西原町会 班長会
19:00 ~ 20:00
班長会を開催いたします。
アジェンダ
追って更新されます
場所: 西原公民館大ホール
📎 0 2024/07/28 21:01 更新

2024
7/7
(日)

町内環境整備草刈り実施
6:30 ~ 7:30
令和6年度2回目
町内環境整備 草刈りを行います
各班長より集合場所等の案内が入りますので、指示に従い参加作業をよろしくお願いいたします。

雨天順延7月21日 (日曜日)
場所: 西原町会全域
📎 0 2024/08/01 00:32 更新

2024
6/23
(日)

西原町会 班長会
19:00 ~ 20:00
6月度班長会を開催します。
アジェンダ
1. 夏季スポーツ大会について
サークル活動の募集について
スポーツ部長より
2. 一斉草取り・街頭演説について
場所: 西原公民館
📎 0 2024/06/23 18:15 発信

2024
6/20
(木)

テスト2
0:00 ~ 0:00
テスト2
場所: 西原町会全域
📎 0 2024/06/10 00:03 更新

2024
6/12
(木)

テスト1 公民館
0:00 ~ 0:00
テストイベントです。
場所: 西原町会全域
📎 0 2024/06/10 00:01 更新

西原町会 | 長野県松本市和田地区

町内環境整備草刈り実施

2024
7/7
(日)

6:30 ~ 7:30

令和6年度2回目
町内環境整備 草刈りを行います
各班長より集合場所等の案内が入りますので、指示に従い参加作業をよろしくお願いいたします。

雨天順延7月21日 (日曜日)

発信者 大谷 聡

📎 0 2024/08/01 00:32 更新

場所: 西原町会全域
対象: 会員全員
主催: 西原町会

添付ファイル

回覧_町会環境整備のお知らせ_R6.7月.pdf

草刈_R6.7月_分担マップ.pdf

kusa-illust9.png

コメント (質問・確認・問い合わせなど)

ごみ違反 | 周知

1. ごみ違反を町会へ周知
連絡したいが、紙回覧で
は容易ではない
2. 班長が違反ごみを片づ
ける負荷が高い

写真つき記事で、即時
町会全体へ周知連絡可能。



イベント報告

- スキー教室
- 三九郎



西原町会 | 長野県松本市和田地区

記事

西原町会子どもスキー教室を開催しました！

西原町会 子どもスキー教室

西原町会スポーツ部

■日時 2025.1.19

■場所 鹿島槍スキー場

当日は天候、コンディションにも恵まれ今年も無事開催することができました。
小学生から大人の方まで参加された皆さんに楽しんでいただけたました。
参加された皆さん、講師の方々ありがとうございました！

公民館予約 |

1. 公民館利用の予約をネット申請できます。

2. 館長による承認

アプリ内で、いつでも利用申請が可能になります。

西原町会 | 長野県松本市和田地区

ホーム > メニュー > 施設選択 > 施設予約カレンダー

編集メニュー

追加

施設予約カレンダー

西原公民館

前月 2024年8月 当月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

施設予約詳細

登録されていません。

施設予約登録

施設

西原公民館

施設部屋（提供してください）

☐ 大広間 ☐ 和室

【部屋の説明】

大広間：大広間 和室：和室

タイトル（イベント名など）

使用開始日時

2024/08/01 同 ー ー

使用終了日時

2024/08/01 同 ー ー

使用理由

表示高を縮める 表示高を広げる

組織名や団体名

責任者名

電話番号

住所

ファイル共有 |

1. 各部の書類
2. 各班の書類
3. その他資料

アプリ内で共有し、いつでも編集閲覧可能になります。

西原町会 | 長野県松本市和田地区

ホーム > メニュー > 資料一覧

編集メニュー

フォルダ追加 ファイル追加

メニュー 資料一覧

資料トップ

番号	名称	枚数	操作
00.	会計部	0枚	操作
01.	町会明細会	0枚	操作
02.	定期総会資料	0枚	操作
03.	公民館資料	0枚	操作
04.	情報部	0枚	操作
05.	広報部	0枚	操作
06.	文化部	0枚	操作
07.	環境整備部	0枚	操作
08.	衛生管理部	0枚	操作
09.	防災防犯部	0枚	操作
10.	道路交通部	0枚	操作
11.	スポーツ部	0枚	操作
12.	町会活性化部	0枚	操作

西原町会 | 長野県松本市和田地区

ホーム > メニュー > 資料一覧

編集メニュー

フォルダ追加 ファイル追加

メニュー 資料一覧

資料トップ > 04. 情報部

ファイル名	操作
JichiNaviについてのご説明（概要）.pdf	操作
自治会アプリjichinavi総会資料_試算表.xlsx.xlsx	操作

防災・防犯機能

安否確認

災害安否一覧（一時保存分）

【アドバイス】

・ 訓練をする場合、タイトルの前に【訓練】などを入力しましょう。

タイトル 【必須】

災害時安否確認

本文 【必須】

災害が発生しましたので、安否確認を行います。

表示高を縮める

表示高を広げる

災害安否設問 【必須】

設問編集

災害安否終了

☐

リアルタイム 防犯情報の配信 Push通知

PUSH通知登録

【アドバイス】

・この機能は、PUSH通知を送信するものであり、お知らせには表示されません。

タイトル 【必須】

西原町会 | 長野県松本市和田地区

本文 【必須】

新しい情報を更新しました。

送信

住民参加型町会

住民コミュニケーション

- 意見投稿
- アンケート
- 電子投票



西原町会 | 長野県松本市和田地区

アンケート

西原祭りアイデア募集

皆様のご意見をお願いします。

発信者 大谷 聡

3 361 2024/07/28 20:50 更新

アンケート回答期間
2024/06/23 ~ 2024/08/26

Jichinaviアプリ機能一覧

1. 電子回覧板 | 随時
 - 1.1. 紙回覧廃止／配布物は継続
2. 通知 | 町内一斉配信
 - 2.1. 草刈り／雪かき／イベント開催通知
 - 2.2. 緊急連絡(工事・通行止めなど)
3. 住民からの意見要望投稿機能
 - 3.1. ご意見目安箱
4. 災害時の安否連絡機能
 - 4.1. 住民安否確認
 - 4.2. 避難指示・給水配給・避難所情報
5. ガイドライン・町会ルール掲示
 - 5.1. 電子掲示板
7. 記事 | イベントレポート配信
 - 7.1. 班長会／サポート隊／サークルなど
 - 7.2. 各種町内イベント開催報告
8. カレンダー | 年間イベント／公民館
 - 8.1. 公民館カレンダー／利用電子申請
 - 8.2. 町内年間スケジュール
9. 行政からのお知らせ
 - 9.1. 松本市／長野県 広報へのリンク
 - 9.2. 緊急工事／防災防犯情報
10. よくある質問回答／ニュース投稿
11. アンケート／簡易 WEB 議決機能

必要なときに
必要なひとへ
必要な情報を

Jichinavi導入の流れ

テーマ起案 | 定期総会

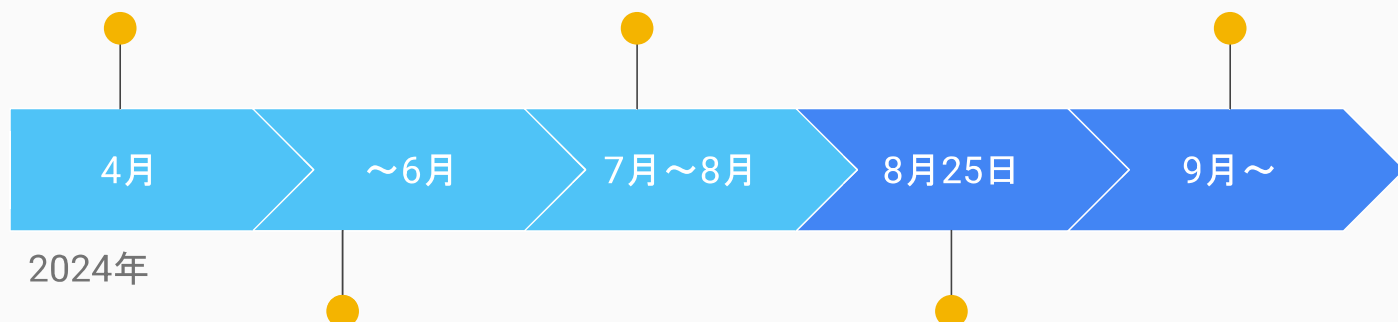
- 予算承認
- 推進開始決議

テスト環境 | 仮運用 | 3か月

- 電子回覧/お知らせ
- 役員参加
- 実際に触ってお試し期間

本運用開始 |

- 10月西原祭り
- 防災訓練
- アプリ安否確認



製作・準備 | 3か月

- アプリ製作
- ガイドライン/マニュアル準備
- 見積商談

導入決議 | 臨時総会

- アプリ導入執行決議
- テスト結果レポート
- 本契約／予算執行

住民の声と工夫

住民の声

当初は・・・
よくわからない、操作が難しい、、
でも・・・
じょじょに好評（便利、いつでも確認できる）

導入時の工夫

- 班長協力による住民間サポート
- 高齢者向けスマホ操作講習会
- 紙回覧板との並行運用



成果と今後の展望

情報共有スピード向上
防災時の安否確認迅速化
町会活動参加意識向上

今後の展望

- アプリ利用者加入率向上
- 防災機能強化
- 住民参加型の町会
- 地域活性化



私の考える・・・
DXで実現したい未来の町会の姿

町会が向かっている未来・・・？

役員、一人3役、4役。
高齢化で人が足りない。

町会が無い街が良い

できれば、抜きたい

会費だけ払うから、、、

ごみだけ捨てさせて



私の思う、町会が目指す未来・・・

地域行政の末端組織としての、
町会の役割は減らす。公募や外
注、非常勤職への転換を。

慣例慣習・慣行・惰性
助け合いのための助け合いが、
負担を増やし、本末転倒。



私の思う、町会が目指す未来・・・

防災時の自助共助も、
もちろん大切だけど、
住民の自己実現のために、
町会ができることがある
・・・かも？



私の思う、町会が目指す未来・・・

お祭りなんかは、役員がやるから負担になるけど、世話役をやりたい、参加したい！という人もいる。班長・役員が無理やりやるから、いやになる・・・

手伝いたい人が手をあげれる環境であることが、大事。



私の思う、町会が目指す未来・・・

みんながアプリを使って、
みんなのやる気をすくい上げて、
やりたいことができる町会、

住民参加型の町会運営につながっ
たらいいな。



自分らしい
ライフスタイルを実現し、
やりたいことを叶えられる街

他地域への影響とまとめ

地域の活性化に向けて

- 西原町会の取り組みが他地域へ波及したらいいな
- 松本市ホームページでの情報発信を続けて。
- そして、草の根レベルの町会DX活性化への期待

最後に

本事例の共有を通じて、松本市における草の根レベルのDXが、さらに活性化し、より暮らしやすく、活気ある地方都市モデルとなることを願います。

活動にご協力いただいたすべての町会員の皆さま、和田地区センターの皆さまに、この場を借りて心より御礼申し上げます。

Appendix: 関連資料

[広報まつもと 令和7年2月号 PDF版](#)

広報まつもとデジタル版 | [【広報まつもとR7.2月号 巻頭特集】旧態依然の殻を破れ！町会のシンカ](#)

Youtube | [【DXでシンカ】町会運営の新しい形を目指して《和田西原町会の取り組み》回覧板の負担軽減 | アプリで手軽にコミュニケーション](#)

[令和6年度 未来へつなぐ 私たちの まちづくりの集い- 松本市ホームページ](#)

引用出典

総務省自治行政局市町村課 | [総務省 | 地域コミュニティに関する研究会 | 地域コミュニティに関する研究会\(第回\) 配布資料: 1 事務局提出資料](#)

市民タイムスWEB | [町会の仕事スリム化支援 松本市が方針 依頼業務見直し負担軽減](#)

活動実践事例一覧表(R6)

回答年度	回答者所属 (地区名・課名等)	関連分野	対象	Q1		Q2		Q3		Q4		Q5	
				事業名・活動名		概要 (活動の目的、時期、場所、対象、方法、実施体制等)		実施主体 関係者・関係団体等		活動のきっかけ／取組みに至るまでの経過 (誰が、どんなことを考え、誰に相談し、どう行動したか等)		活動の成果および課題、 今後の展望等	
R6年度	第三地区	住民自治と地域資源	子ども	松本工業高校 アニメーション制作		第三地区まちづくり協議会が作成した歴史冊子「お蚕さまから生まれた街」をもとに、令和3年度に松本工業高校生徒が小学生向けのアニメーションを制作した。令和6年度も歴史冊子とアニメーションDVDを希望者へ配布している。		松本工業高校 第三地区まちづくり協議会 第三地区地域づくりセンター (公民館) 松本市文書館		・小学校低学年でも第三地区歴史冊子(漫画)の内容が理解できるようアニメーション化を検討していたが、今年度松工生が本冊子に興味を持ち、アニメーション制作に取り組みこととなった。 ・第三地区まちづくり協議会から、松工生への資料提供、プロからのナレーション指導を実施した。 ・オーブニングができた段階で、原作者であるヤボンスキーこばやし氏とともに試写会を実施。また、同内容を冊子制作時に関わった小松芳郎先生にも見ていただいた。		・松本市公式Youtubeへの投稿 ・イオンモールでの完成披露会開催 ・近隣の小中学校図書館へ設置 ・第三地区作品展での上映	
R6年度	第三地区	住民自治	子ども	夏休み子ども企画「公民館で遊ぼう！」		あがた児童センターの子どもたちを公民館へ招待し、カレー作りやニュースポーツ体験を行なった。公民館内を探検したり、広い部屋でのびのびと自由に遊べるようにした。 夏休みで児童センターの利用児童が増える時期に開催。小学校4年生～6年生対象 第三地区公民館を貸し切りにして実施		第三地区公民館 (地域づくりセンター) あがた児童センター 第三地区福祉ひろば 生活支援員 民生児童委員協議会		・地区支援企画会議の子ども向けの講座を検討していたところ、児童センターから”子どもたちの遊び場が減っている(人数が多すぎて遊戯室でのびのび遊べない)”という話をいただいたので、公民館と児童センターでタイアップして今回の企画を行うことを決めた。 ・当初は一般募集で子供の参加を呼びかけようと思ったが、児童センターの子どもたちだけで約40名いたので、今年度は児童センターの子どもを対象にして実施した。		・子どもたちの反応もよく、大満足で児童センターへ帰っていった。帰宅後に保護者に話をした子どもも多かったようで、保護者からもこのような企画はありがたいとの声をいただいた。 ・児童センターの子どもに限らず、地域に住む子どもたちの居場所づくりや、学校で体験できないことを体験する場となるように公民館としてできることを検討していきたい。	
R6年度	第三地区	地域活性化	子ども	あがたの森 水無月コンサート		地区の子供達や地域で活躍する音楽団体の演奏会		第三地区町内公民館長会 第三地区公民館 源池小学校 清水小学校 清水中学校		・例年6月に開催している。 ・コロナの影響で開催中止となっていた時期もあるが、令和5年度から復活し、令和6年度も盛大に開催された。 ・令和5年度は源池小学校の金管バンドに出演を断られてしまったが(運動会と重なり練習ができない)、第20回を迎える令和6年度はなんとか出演いただけるよう1年かけてオファーをしつつけた結果、令和6年度は源池小学校金管バンドにも出演いただき、3校そろっての出演が叶った。		・地域の方々が子供たちの演奏を聴く機会も少なく、また大人の団体の演奏を子どもたちが聴ける良い機会にもなっていて、来場者からは大変好評をいただいている。 ・部活動の地域移行も進み、学校としての出演が今後どうなっていくかは不明だが、子どもも大人も参加できるような地区の恒例行事としてこれからも続けていきたい。	
R6年度	第三地区	住民自治と地域活性化	全て	あがたの森夏まつり		地区の子供たちによる青山様、ぼんぼんの行進と、町会役員による出店(かき氷やくじ引き等)で、地区の夏まつりを開催する。		あがたの森夏まつり実行委員会 第三地区公民館		・コロナの影響で開催中止となっていた時期もあるが、令和5年度から復活し、令和6年度も盛大に開催された。 ・青山様ぼんぼんは各町会単独では人数が少なくて開催できない町会もあるため、夏まつりで他の町会と合同で行なうことで伝統行事の継承につなげる。		・子どもたちがたくさん参加してくれるので大変盛り上がる楽しい夏まつりが開催できている。 ・出店を担当している町会役員の負担がかなり大きいと思うので、軽くできる部分を検討しながらも、夏まつりの質を落とさないように今後も地区の恒例行事として開催していきたい。	
R6年度	第三地区	文化・芸術	全て	第三地区作品展		地区住民から作品を募り、2日間にわたって作品展示する。		第三地区町内公民館長会 第三地区町会連合会 第三地区公民館		・例年11月に開催している。 ・あがたの森文化会館で開催をしていたが、令和5年度より勤労者福祉センターでの開催に変更。あがたの森文化会館は特有の雰囲気ではもちろんあるが、準備が大変で会場も暗いという懸念点があった。令和5年度勤労者福祉センターで開催したところ、準備はそれほど大変ではなく、会場も明るくて作品が見やすいという声から今後は勤労者福祉センターでの開催を進めていく。 ・令和5年度に初めて抽選会を開催し、来場者も楽しんでいた。		・作品数は減少傾向にあるが、それでも500点ほどの作品が集まり、来場者も様々な作品をみることで満足いただけている。 また、この作品展に向けての作品づくりや、いかいを感じている方が多く、地区の恒例行事としてこれからも続けていきたい。 ・あがたの森で行なっていたときは観光客や文化会館の利用者など関係者以外の来場もあったが、勤労者福祉センターではそれは難しいので、来場者を増やす方法を検討していないといけない。	
R6年度	城北地区	福祉と住民自治	高齢者	井戸端会議		高齢者の生きがいづくり。毎月第1木曜日。福祉ひろば。季節の行事やレクリエーション、ミニコンサートをひろばサークル・町会の方などの協力で多彩な企画を開催。その後はお茶会を行う。 参加費100円		ひろば事業サポート隊 コーディネーター		参加者が自由に話あえる場を作る＝話が尽きない 皆さん話をしたくとしてしまうがないが、なかなか人と話す機会が少なく外に出る機会も少ない中、この事業は、そういう方に喜ばれている。 企画運営を考える中で、マンネリ化しないようにと色々考えてくれているが、苦労されている。			
R6年度	城北地区	福祉	高齢者	ふれあい健康教室		健康づくり。毎月第4水曜日。町会当番制で、レクリエーション・歌など。最後にお茶会。 事前に担当町会とボランティア・コーディネーターで打合せ。レクリエーション・歌を決めてもらう。お菓子の用意も町会。 当日は、町会さんが主体となり運営。 健康相談・血圧測定・困りごとなど、専門職員も参加		町会役員関係者 ひろば事業サポート隊 市担当職員 コーディネーター		なにより、町会が主体となり運営されていて各町会さんの特色があり、参加されている方ももちろん、役員の方たちも楽しんでいる。			
R6年度	城北地区	福祉	高齢者	レストラン「夢」		ふれあいづくり。毎月第3水曜日。一皿250円でカレーの提供。 事前予約。食材の購入は、コーディネーター。		ひろば事業サポート隊 コーディネーター		年代をこえているんな世代の方に来ていただき、男性の参加も多い。今年度から、予約申込にQRを取り入れた。 ボランティアスタッフの方も美味しいと喜んでいただけているのがうれしいと、調理・会場準備と頑張っている。			

回答年度	回答者所属 (地区名・課名等)	関連分野	対象	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5
				事業名・活動名	概要 (活動の目的、時期、場所、対象、方法、実施体制等)	実施主体 関係者・関係団体等	活動のきっかけ／取組みに至るまでの経過 (誰が、どんなことを考え、誰に相談し、どう行動したか等)	活動の成果および課題、 今後の展望等
R6年度	城北地区	福祉	高齢者	きっさ「千客万来」	交流・ふれあいづくり。毎月第3金曜日。喫茶の運営。 コーヒー・お茶菓子・お味噌汁の提供。コーヒーはサポート隊の方が早くからたててくれる。	ひろば事業サポーター コーディネーター		少しずつ、男性のお客さんや新しい方が来てくれるようになった。ゆづくりとおしやべりしながら美味しいコーヒー・お菓子を召し上がってもらえ、スタッフの方も元気をもらえている。 季節にあった企画も取り入れている。
R6年度	城北地区	福祉	高齢者	カフェ「すいれん」	住民間の絆を深め、支え合える関係を築き、誰もが住みなれた家、地域で暮らし続けられる地域（町づくり）を目指す。 平成29年11月オープン ①沢村店（沢村公民館） 毎月第2火曜日 ②白金店（白金町公民館） 毎月第4火曜日 ボランティアを募り運営（R6 24人）	地区住民		R4年度 307人（26人/月） R5年度 428人（36人/月） スタッフの高齢化
R6年度	安原地区	人権と住民自治	障がい者	地区内にある支援学級・障害者施設の支援	地区内にある支援学級、障害者施設（しなの木教室、あさひ学園、ふれっ手 等）への協力。また協働による地区イベントの実施。	地区まちづくり協議会 地区公民館 地域住民		しなの木教室・・・毎週木曜日のパン販売を地区館で行ってもらうことで、接客訓練に繋がりが、卒業後の人生に役立つ。 あさひ学園・・・地区のイベントに協力してもらうことで、社会との繋がりができる。 ふれっ手・・・月一度のいなり寿司販売を通して、社会との繋がりができる。
R6年度	安原地区	教育・スポーツ	子ども	学習支援	・令和5年度にNPO LINKSを設立し、目的の一つである学習支援をスタート ・4月から開催場所を安原地区公民館とし、日曜日14時から17時まで開催 ・対象は地域の小学生から高校生 ・元教諭、英会話学校主催者、信大教員と大学院生がサポーターとして参加	・NPO LINKS		・主要5科目だけでなく、選抜入試にも対応した学習支援を試みている ・2名の生徒が長野県科学振興会の科学研究費助成金に採択 ・卓球クラブとしても活動している
R6年度	白板地区	教育・スポーツ	子ども	丸ノ内スポーツクラブ	本市初の総合型地域クラブ 学校区の児童生徒にスポーツ教室（卓球・バドミントンなど） 学校区の児童生徒向けのイベント（公民館で遊ぼう（コロナ禍以前は公民館に泊まろうとして開催）、クリスマス会） 住民（学校区）を対象にスポーツ教室・イベントの開催 ※地区ではなく中学校区と対象が広い	住民（学校区） 丸ノ内中学校 地区公民館		・スポーツ教室から学校を巻き込んだでの事業に発展。 ・指導者は基本ボランティア ・運営は自主財源
R6年度	白板地区	文化・芸術	子ども	田川児童センター 交流会	田川児童センターを利用している子どもたちとの交流 地区内の安心の家や文化財を巡るウォーキング、しめかざり等の伝統文化を体験する	地区公民館 田川児童センター		白板地区を知ってもらう、愛着を持ってもらうきっかけとなった。地区のイベントにも顔を見せてくれる児童も複数おり、一定の成果がある。
R6年度	白板地区	福祉と交通	全て	白板地区放光寺町会移動支援事業 「お互いさまタクシー」	放光寺町会員が、通院・買い物などを目的に、自宅からタクシーを利用した場合の料金について、1回につき1,000円の利用者負担を控除した額を町会から補助するもの。 具体的には、放光寺公民館から半径3キロメートル以内のアルピコタクシー利用について、利用者にタクシーチケットを事前に交付し、月末に町会がアルピコタクシーと差額を精算する。	放光寺町会移動支援推進委員会、アルピコタクシー		令和5年度の実績として、延べ台数611台、延べ人数946名が利用。
R6年度	白板地区	福祉	高齢者	町会サロン（8町会） 白板南・白板宮本・宮刈東・宮刈日向・宮刈新橋・宮崎町・蟻ヶ崎西・放光寺	月1回～2回程度実施 体操・公園、神社清掃・茶話会の実施	各町会または老人会		課題：参加者の減少
R6年度	白板地区	住民自治	障がい者	カフェ凹凸	カフェ・夏祭り・マルシェなど不定期開催	地区内有志		今後：今以上に障がい者や認知症患者の方に参加してもらうような工夫を凝らしたものにしていきたい。 課題：資金面
R6年度	白板地区	福祉	全て	だれでも食堂 じょうねんすとりーと	毎月第4土曜日(変更有)	地区内有志		課題：資金面 今後：課題解決に向けて賛同者を増やす。
R6年度	田川地区	環境	全て	自然環境保護活動	田川地区の河川でホテル調査や生き物観察会を実施し、川に親しむ機会を設け、田川地区の自然環境を保護していくこと目的とする。 ・生き物多様性のための環境保全・調査（ホテル調査） ・川などで生き物観察会の実施（両島川生き物観察会） ・田川小学校の環境学習の講師（「生き物自然観察クラブ」等への支援）	・たがわ水辺を守る会		・川や水路の多い地域の特性を生かし、自然環境保護や環境学習などを行っている点。
R6年度	田川地区	教育・スポーツ	全て	0840ラジオ体操の会	・ラジオ体操を共に行うことにより、田川地区の健康増進と地域のつながりを作り、参加者相互の親睦を深める。 ・毎週火曜日・木曜日の8時50分～9時、田川公民館駐車場（冬季・雨天時は田川公民館大会議室）で行う。 ・対象者は、地区住民。	0840ラジオ体操の会・地域づくりセンター（地区生活支援員）		・活動8年目を迎え、年間延べ1500人ほどの参加があり、地域住民の生活に根付いている。 ・体操を通じて、互いの見守り・安否確認にもなっている。

回答年度	回答者所属 (地区名・課名等)	関連分野	対象	Q1	Q2	Q3	Q4	活動のきっかけ／取組みに至るまでの経過 (誰が、どんなことを考え、誰に相談し、どう行動したか等)	Q5 活動の成果および課題、今後の展望等
				事業名・活動名	概要 (活動の目的、時期、場所、対象、方法、実施体制等)	実施主体 関係者・関係団体等			
R6年度	内地区生活支援	福祉と住民自治	高齢者	なごみ	場所:並柳団地(A2棟 21号室) 目的:「誰もが安心して、心豊かに暮らせる」 時期:R6.9.6～ 対象:団地住民、誰でも 内容:県営住宅の空き部屋を活用して互助活動を行う。住民主体で運営し、相談や有償ボランティアによる家事サポート等を行う。(30分600円)	なごみ	①団地の少子高齢化や住民の関係希薄化、1人暮らし世帯の増加、入居者減少など、様々な課題があった ②県と住民(提案者)が共に事業をつくる県民参加型予算(提案・共創型)を活用して部屋の改修費を確保 ③同じ並柳商店街で活動する「集い場ふらっと」を運営する労働者協同組合ワーカーズコースプ事業団・松本大学などが準備に協力	・住民主体のイベントではあるが、実態は公民館で多くの部分を負担している ・今年は運動会という大枠を大人で決めてから子どもたちに種目などの細かい部分を相談した。次年度以降は何をするかということから関わってもらえるような体制づくりを進めていきたい	
R6年度	庄内地区公民館	住民自治と地域活性化	全て	ドリーム庄内”秋のつどい”	時期:毎年10月の第3か第4日曜日(日曜日の数によって変動) 目的:①多世代の交流②地域資源を掘り起こすと同時に地域愛を育む③人と人、活動をつなげ、地域の活性化を図る 体制:①これまで:まちづくり協議会を担う各団体を中心に必要ない団体へ声かけして実行委員会を組織②今年から地元の小中学校へ声をかけて、運営員を募集 内容:毎年実施するイベントを話し合いで決めるため、決まった事業はない。これまでに文化祭・運動会・お祭りなどを実施。 場所:庄内公園・ゆめひろば庄内	・まちづくり協議会(ドリーム庄内実行委員会)	①ゆめひろば庄内が開設してすぐのタイミングで市制100周年事業を各地区で実施。それを契機に地区の活性化やつながりづくりを目指して、継続した事業を実施することになった。 ②地区住民主体の事業ではあるが、コロナ禍の影響で事業が縮小。公民館が計画立案の中心に ③子どもたちも参加するだけでなく、意見を取り入れたいという意見があり、働きかけたところ、希望者が集まり今年から活動スタート	・活動が開始して19年ほど経過する。 ・10人前後が自主的に集まるようになっている。 ・高齢者が多く、フレイル予防に効果があると感じる。 ・地区内の方と交流をすることができている。 ・(夏休み期間中は近隣の子ども達も参加する) ・令和3年度、かんぽ生命保険等から、体操の普及に功績があったとしてラジオ体操優良団体として表彰を受けた。 ・今後は年に数回、ラジオ体操指導員を呼び、指導してもらうことを検討している。	
R6年度	鎌田地区	教育・スポーツ	全て	高宮北公園の会	地区住民が健康維持を目的として、毎朝6時半のラジオの放送に合わせて、自主的にラジオ体操を行っている。	高宮北公園の会 (地区住民) かんぽ生命保険 NHK NPO法人全国ラジオ体操連盟		・平成18年春から週に1度、高宮北公園の草取りやゴミ拾い、トイレ掃除を続ける地元の有志たちが、朝の時間を有効活用するためにラジオ体操を始めたことがきっかけである。 ・出欠席や名前の確認は行わないため、誰でも気軽に参加できる。 ・トイレが閉鎖となり清掃が集まることはなくなったが、ラジオ体操は継続して行われている。	
R6年度	松南地区	地域資源と教育・スポーツ	全て	地域学習会	地区住民が、地域の歴史を学びとともに、地域の現在・未来を考えていくための組織を立ち上げ、歴史資料の収集、学習会の企画を始めている。	地区町会連合会 地区館報編集委員会 地区町内公民館長会 地区公民館 ほか地域住民など	地区版館報の作成の過程で、地域の歴史が意外と知られておらず、歴史を知るための資料が少ないことから、様々な資料を収集し、成果を学習するようない取り組みを行いたいという機運が高まった。	・令和4年に地区公民館の共催事業で地区の歴史を題材とした「謎解きウォークラリーin松南」を開催し、以降、事業で使用した問題を無料配布している。 ・令和6年2月に実施した地区町会連合会設立60周年記念式典に合わせて、地区の歴史を振り返るパンフレットを作成した。 ・同上式典の記念品として、平田里古墳出土の「水鳥埴輪」を模したバッジの作成に協力した。 ・町内公民館などを会場に、地域のあゆみを学び、参加者同士で当時の地域に関する思い出を語る機会を検討している。 ・ただ昔を懐かしむだけでなく、この地域の現在・未来をどうしていくのか考えるきっかけとなるような取り組みをしたい。	・住民に身近な場所を実施することで、公民館や福祉ひろばに行くことができずにいた方にアプローチすることができた。 ・住民同士が集まる機会が減少していたため、住民同士の交流の機会にもなった。 ・松南地区9町会のうち6町会で実施したが、残りの3町会でも実施したい。また、2回目以降も継続して実施していきたい。 ・松南地区で最近、身内を亡くしてから落ち込み心身を病んでいる方も見かける中で、地区担当保健師とも話し、まちかど保健室のような形でも実施したい。
R6年度	松南地区	福祉と地域活性化	全て	出張！どこでも”えんがわ”事業	地域住民に、住民のより身近な場所(公園など)へ集まってもらい、ざっくばらんに会話や交流するもの。そこへ地区関係職員が出向いて、住民の話を伺ったり、困りごとの相談をしてもらう機会とする。 市社協で所有しているベンチ(エクセラシオン高校、蟻ヶ崎高校生徒が作成)を活用するほか、当日移動販売車を呼んで住民が集まりやすい工夫をしている。	地区生活支援員 地区関係職員(地域づくりセンター、公民館、福祉ひろば、保健師、包括支援センター、市社協など)	感染症症禍などで支援を必要とする人の声が届きにくい状況が続く、住民が公民館や福祉ひろばに集まり交流するのが難しい中、住民同士の交流や支援の必要な状況を把握する機会が必要と考え、地区生活支援員の発案・企画で実施された。地区支援企画会議で提案し、会議に参加する地区関係職員が協力して実施している。	・過去に集会で事例発表したことがある様子 ・団体の運営から携わる部員のほか、支援活動のみに携わる部員を募集している。 ・これまでは高齢者のみを対象に活動してきたが、子どもにも目を向けたり、誰もが集える居場所づくりとして、公民館や空き家の利活用にも目を向けていきたいと考えている。	
R6年度	松南地区	福祉	高齢者	生活応援隊こだま	宮田3町会(宮田東、宮田中、宮田西)にお住まいで65歳以上の支援を要する人に対し、生活支援を目的とした有償のボランティア団体として活動してきた。	生活応援隊こだま	宮田3町会の民生児童委員のOB・OGが、委員退任後も地域住民のために何かできないかと考え、団体を組織することになった。コミュニティ助成事業を活用し、主に高齢者の移動支援や傾聴などの事業を行ってきた。 現在、コミュニティ助成事業の助成期間終了、メンバーの減少・高齢化などの課題に直面し、新たなメンバーの募集、活動の見直しが必要となっている。	・過去に集会で事例発表したことがある様子 ・団体の運営から携わる部員のほか、支援活動のみに携わる部員を募集している。 ・これまでは高齢者のみを対象に活動してきたが、子どもにも目を向けたり、誰もが集える居場所づくりとして、公民館や空き家の利活用にも目を向けていきたいと考えている。	

回答年度	回答者所属 (地区名・課名等)	関連分野	対象	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5
				事業名・活動名	概要 (活動の目的、時期、場所、対象、方法、実施体制等)	実施主体 関係者・関係団体等	活動のきっかけ／取組みに至るまでの経過 (誰が、どんなことを考え、誰に相談し、どう行動したか等)	活動の成果および課題、 今後の展望等
R6年度	島内地区	地域活性化と地域資源	全て	地域の歴史的文化的遺産を活用したコミュニティづくり	住民組織「島内地区歴史文化財調査委員会」と「平瀬古城会」が中心となり、地域の歴史的文化的遺産を活用した、保全・学習・周知活動などを通じて、地域住民の愛着醸成やコミュニティづくりを推進するとともに、地域外への情報発信によって、地区全体の価値を高めるものです。	島内地区歴史文化財調査委員会 平瀬古城会 島内史談会	島内地区では、歴史文化財を活用した学習会や保全活動などを通じて地域づくりが進められてきたが、松本市特別史跡「平瀬城跡」の活用・保全を推進する住民組織「平瀬城址一口城主会」の解体を受け、新たな受け皿の必要性が生じました。一方で、地域内の文化史跡ネットワーク化や地域歴史冊子の発行を求める声が生民から寄せられていたため、平瀬城跡を核に地域の歴史的文化的遺産関係者で「平瀬古城会」を組織し(ネットワーク化)、文化財の保全・学習・周知活動を推進するとともに、地区で初めてとなる歴史冊子を発行しました。さらに、松本市文化財課の「まつもと文化遺産認定制度」へ登録し、地区の歴史文化財の価値を高めるとともに、史跡での狼煙上げを含めた「平瀬城跡狼煙まつり」を令和3年度から実施しています。令和5年度は安曇野市岩原城などとの「狼煙リレー」も実現しました。会のコンセプトは、「会員が楽しみながら、自由に意見を出し合い、積極的かつ主体的に活動する」とし、狼煙祭りも含めて皆さんでアイデアを出しながら、検討をスモールグループで進め、実施は会全体で行うという手法で進めています。	会の方針の一つに「自分たちが楽しみながら、できることを・できる範囲で実施する」ということがあるため、結果よりも「実施までのプロセスと実施できたこと」が大切なことだと考えています。 (効果・成果・結果の例えば…) ・会員が島内の小中学校で歴史に関わる授業を実施 ・平瀬城跡ピクニックウォーキングを実施 ・平瀬城跡の整備作業を実施 ・平瀬城跡のろし祭りを実施 等 ・史跡関係者の交流が進む
R6年度	島内地区	住民自治	子ども	おらんちdeランチ 昔遊びの会 など	地域の大人が地域の子供たちに対して三世代交流による団欒の場づくりのために、地区公民館で食事、学習支援、生活相談、生活体験の開催を始めた。	島内三世代交流運営委員会 (愛ランド島内) 島内公民館 島内農業文庫運営委員会 地域住民	・小学生の登校時の見守り活動を永年続けている住民から、「地域は家族」という思いが強く、子供を中心に三世代交流の場を是非つくりたいと、公民館に相談があった。 ・公民館も「思い」に協力し、小学校学習ボランティアや社協ボランティア、高齢者クラブなどの有志による実行委員会を立ち上げ活動を開始した。	・平成29年6月から月1回を目的に開催。 ・食材提供する農家や団体が現れるなど協力の輪が広がった。 ・チラシ回覧や口コミにより利用者が増え、交流の場を生み出した。また公民館の新規来館者につながった。
R6年度	島内地区	住民自治と防災	全て	島内地区防災モデル事業	令和3～5年度に実施した「地域づくりセンター強化モデル事業」の重点事業として実施した「島内地区防災モデル事業」を継続し、各町会の防災への取組みを再構築するとともに、それを支援する地区の役割について検討し、必要な取組みを進めている。	島内地区防災モデル実行委員会 モデル町会・地域づくりセンター・公民館・消防団・生活支援員・地域包括支援センター・松本大学等	・令和3年度から3年間「地域づくりセンター強化モデル事業」の重点事業として「防災モデル事業」を進めてきた。 ・モデル事業の中では、「安否確認体制」「要援護者支援」「個別計画作成」といった課題についてモデル町会を設定して取り組みを進めた。 ・地区の役割として「事業周知」「地区の人材育成」「介護保険事業所などとの連携」といった課題が出てきたため、小・中学校での防災学習プログラムの作成、福祉避難所への直接避難者の抽出方法の検討、入所施設と町会との連携といった事業にも取り組んだ。 ・事業全体について松本大学地域防災科学研究所からの指導助言をもらった。 ・こうした内容を、市のモデル事業は終了した後も、モデル町会の拡大を行うなど、令和6年度も事業を継続した。	・町会の常会や隣組を単位とする話し合いを進めるなど、「防災」や「要支援者への支援」を切り口として町会活動の再構築が行われた。その結果、防災活動としても自治活動としてもモデルとなる活動となった。 ・モデル的な取り組みが地区内でも広がっている。 ・小中学校や地域包括支援センターなど、関係機関と地域との「防災」を切り口とした連携や役割の明確化が図られている。 ・事業の継続・引き継ぎが課題
R6年度	島内地区	福祉と地域活性化	子ども	島内地区子どもひろば	趣旨：島内灯籠まつりが取止めとなり、島内地区の担い手となる子どもたちのために、夏休みの思い出づくりの場を子どもたちが運営する「子どもひろば」として再構築を目指した。 期日：令和6年8月4日(日) 12:00から13:00ころまで もあそびひろばとして「おはなしファミリー劇場」とした 場所：松本市音楽文化ホール大ホール及び小ホール 内容：「夏休みファミリー劇場(大ホール)」と「子どもあそびひろば(小ホール)」を合わせて「島内地区子どもひろば」と称した。	島内地区社会福祉協議会 島内地区子どもあそびひろば実効委員会	・島内灯籠まつりが役員の負担が大きいためなどから今後実施しないという決定を町会連合会及び島内社協がした。 ・子どもまつりを実施している子ども会育成会を中心に、子ども向けのイベントを考えたという意向が示された。 ・児童センターや学童クラブ、PTA有志などと相談し、実効委員会をつくり、各団体・グループの持ち寄りによる「あそびひろば」を当日展開することとした。 ・全体調整は実行委員会の会議において調整した。細部は事務局が調整した。	・「子どもあそびひろば」はPTAの有志が声を掛け合う中でボランティアが集まったので、スタッフが足りていない遊びのブースの応援をすることができた。 ・当日は行列ができるほど盛況な催しとなった。多くの子どもたちを「おはなしファミリー劇場」に案内することができた。 ・イベントの実施方法や人のつながりをどう生かすか、という側面で示唆が多かった。 ・来年度以降どのように運営をしていくかは課題
R6年度	島内地区	住民自治と防災	全て	防災フェスティバル実施事業	目的：①島内地区内外の人材の掘り起こしとネットワーク化をすすめる。②「防災」を切り口として関連する分野をつなげ、ネットワーク化する。③「防災」を住民の日常生活の一部にするきっかけをつくる。 日時：令和6年9月7日(土) 10:00～14:00 場所：島内小学校 グラウンド・体育館、島内公民館	島内地区防災フェスティバル実効委員会	・令和5年度に山岳フォーラム実行委員会から「防災」×「キャンプ」イベントの実施について打診があり、地区内外の関係団体で実行委員会を設置して第1回を実施。その後、実行委員会の枠を広げることと合意。 ・令和6年度は地区防災部や環境衛生協議会、その他関連企業などに声をかけをし、枠を広げて実施した。 ・地区防災部や環境衛生協議会は防災フェスに向け学習会や講習会を実施して準備した。	・地区内外の人材が持ち寄りで実施可能なブースをつくって運営するというイベントの形を示すことができた。 ・実行委員会を開催することで、各団体のリーダーの関係づくりができた。 ・昨年度並みに参加者を確保することができ、防災意識の向上は一定程度できている。 ・各ブースの運営は各団体に任せているため、取りまとめを行う調整機能の強化は課題。 ・実行委員として各団体が運動して、広報・宣伝・調整を担う、という意識が浸透しつつある。
R6年度	島内地区	福祉	全て	島内地区フレイル予防・生活支援・人材育成推進事業	目的：①島内地区にはフレイルが多いという課題を解決したい。②生活支援活動構築を町会を基盤として構築し、第3層と位置付けたい。③各町会単位で福祉ひろば出前ふれ健や百歳体操のグループづくりが進んでいることを活用したい。④健康づくり推進員や体力づくりサポーターを活用しながら人材育成を図りたい。⑤町会と地区の役割、人材育成、生活支援体制の構築といった①～④に関わる事項を一体的にとらえ、地区としての活動として構築したい。	島内地区各町会・地区社協・地区福祉ひろば・健康づくり推進員・体力づくりサポーター・通信の場各リーダー・地区担当保健師・地域包括支援センター・地域づくりセンター	・島内地区では以前から「いきいき百歳体操」を町会単位で実施しており、フレイル予防の観点からも、また、生活支援の拠点づくりの観点からも場を増やそうとしていた。 ・生活支援活動を構築するうえでは、各町会の「百歳体操」を拠点として、また各「百歳体操」のリーダーを集めて介護保険上の「協議体」として位置付けた。 ・体力づくりサポーターは町会選出ではなく、任意のボランティア団体として地区・町会で活動を実施していた。	・島内地区として健康づくり推進員会の活動は令和4年度以降も継続する方針を取った。令和5～6年で各町会から選出された推進員で活動を継続した。 ・後期高齢者健診で実施する質問表の9項目のうち7項目において、島内地区は松本市全体の平均と比べ割合が高いことが判明していた。 ・島内地区では以前から「いきいき百歳体操」を町会単位で実施しており、フレイル予防の観点からも、また、生活支援の拠点づくりの観点からも場を増やそうとしていた。 ・生活支援活動を構築するうえでは、各町会の「百歳体操」を拠点として、また各「百歳体操」のリーダーを集めて介護保険上の「協議体」として位置付けた。 ・体力づくりサポーターは町会選出ではなく、任意のボランティア団体として地区・町会で活動を実施していた。

回答年度	回答者所属 (地区名・課名等)	関連分野	対象	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5
				事業名・活動名	概要 (活動の目的、時期、場所、対象、方法、実施体制等)	実施主体 関係者・関係団体等	活動のきっかけ／取組みに至るまでの経過 (誰が、どんなことを考え、誰に相談し、どう行動したか等)	活動の成果および課題、 今後の展望等
R6年度	島内地区	福祉	全て	島内地区健康づくり推進員活動	目的：地区住民の健康意識向上、地域の担い手の掘り起こし、人材育成 時期：通年（推進員任期は2年） 対象：各町会から選出（R5・6年度は47人） 方法：年4回の定例会、各町会活動への企画・参加 実施体制： ●年4回の定例会では、1時間程度の研修会を実施。 R5年度→ふれあい健康教室で実施するレクの体験、体サポ合同研修会（レクリエーションとは）、食生活改善指導教室（力ルシウムについて）、普通救命講習 R6年度→認知症サポーター養成講座、大塚製薬出前講座 ●R6年度は、住民対象健康講座（生活習慣病予防）を開催予定 ●地区行事で健康啓発活動（防災フェスティバル、文化祭、ウォーキング大会） ●福祉ひろばのふれあい健康教室にスタッフとして参加 ●各町会のふれあい健康教室の企画、当日運営など（町会により役割は異なる） ●R5年度年度末 健康づくり推進員だよりの発行	島内地区地域づくりセンター 島内地区担当保健師 島内地区福祉ひろば	・推進員は町会役員として選出されており、40～80代の幅広い年齢層で、健康への関心度もばらつきがある。定例会・研修会を開催し、健康について学習する機会を持つことで、推進員一人一人の健康に対する関心を高めると共に、定例会で得た知識を家族や町会などへ普及し、地区住民の健康意識の向上を目指すしている。また、推進員は働いている方や子育てしている方もおり、町会活動に参加したことのない方も多い。健康づくり推進員になったことをきっかけに、町会活動やひろばの事業を知り、地域の繋がりや通いの場の大切さを感じられるような活動を行いたいと思い、推進員活動を計画、実施した。 ・しかし、R5年度は任期1年目であり、「全市民的健康づくり推進員活動は廃止されたのに、なぜ島内地区では継続になっているのか。」という疑問の声や「健康づくり推進員という組織があること自体初めて知った。何をしている組織かわからない。自分たちが何をしたら良いかわからない。」という声が聞かれ、まずは推進員活動の目的を確認し、ふれあい健康教室で実際にどのようなことを行うか体験してみたり、体サポとの交流をしながら通いの場の大切さを学ぶ研修会を開催したりなど、推進員の疑問を解消するための研修会を中心に行なった。 ・R5年度年度末にアンケートを実施し、R6年度の研修会の内容を検討した。関心の多かった認知症、生活習慣病、運動については、推進員以外で地域住民も対象に、健康講座を開催する予定。 ・任期1年目では、推進員から「推進員という組織自体知らなかった」という声が多く聞かれた。組織存続、地区からの支援継続のために、健康づくり推進員の活動を地区全体に知ってもらう必要があると考え、健康啓発も兼ねて島内地区推進員だよりの全戸配布（R5年度末）や、地区イベント（防災フェス、文化祭、ウォーキング）で推進員だよりと啓発グッズの配布を行った。	・令和2年度は複数日開催予定であったが、コロナ禍のため、同年9月に中止決定。 ・令和3年度はワークショップの申し込み開始まで進めたが、その後感染警戒レベルが5となったことで、同年8月27日に中止とした。 ・令和4年度にコロナの感染症対策を行いながら第1回目を開催し、多くの参加があったが、周知方法等を検討する必要がある。 ・令和5年度に令和4年度の反省を踏まえながら、中山地区のHPなどで周知し、中山地区らしさのあるプログラムを新たに開催した。 ・令和6年度も開催予定。
R6年度	中山地区	地域活性化	全て	2024なかやま体験フェスタ	【概要】 ・地区内の企業や、地域住民（サークル）の協力のもと、地区内複数箇所に様々な「体験型ワークショップ」を開催した。 【目的】 ・地区内外の人に楽しんでもらう機会を設け、地区外の人にも中山地区についてもっと知ってもらうため。	中山地区地域づくり協議会 地域活性化部会 考古博物館 地域住民（サークル等） 町会連合会 松本大学生 中山地区内企業 公民館	・「地域活性化」のためには、特に地区外の方にもっと中山を知ってもらうための思いから、令和元年度に長野県の元気づくり支援金により、地区を紹介するカタログを作成。 ・これに付随した取り組みとして、中山のフィールドを活かした体験型ワークショップを行うことを企画し、左記のイベントを企画した。	・令和2年度は複数日開催予定であったが、コロナ禍のため、同年9月に中止決定。 ・令和3年度はワークショップの申し込み開始まで進めたが、その後感染警戒レベルが5となったことで、同年8月27日に中止とした。 ・令和4年度にコロナの感染症対策を行いながら第1回目を開催し、多くの参加があったが、周知方法等を検討する必要がある。 ・令和5年度に令和4年度の反省を踏まえながら、中山地区のHPなどで周知し、中山地区らしさのあるプログラムを新たに開催した。 ・令和6年度も開催予定。
R6年度	中山地区	福祉と交通	高齢者	なかやまでお買い物	【概要】 松本市内の事業者に依頼し、町内公民館で移動販売を行った。また、中山地区で活動する「コーヒを楽しむ会」に依頼しコーヒの提供も行った。 【目的】 高齢者の居場所づくり、買い物弱者支援対策のため	中山地区地域づくり協議会 福祉対策部会 助け合おうぜ中山町会連合会 地域づくりセンター（福祉ひろば、支援員含む） 松本市内企業 地域住民（サークル等） 公民館	地区内での高齢者の居場所づくり、買い物弱者支援対策等の課題があったため、社会福祉協議会職員と中山地区福祉対策部員と打合せを行い、連携団体や企業の協力のもとで開催した。	・令和5年度は和泉町会で開催し、多くの参加があった。 ・普段買い物に出れない高齢者や、住民同士の交流機会が少ない方にとって、良い機会となった。 ・令和6年度は他町会で開催予定。
R6年度	中山地区 健康づくり課	福祉と教育・スポーツ	高齢者	中山は山の中体操	目的：中山地区住民に運動習慣をつけてもらうため。 時期：2017年～ 場所：ふれ健、中山文化祭等住民事業 対象：参加住民 方法：健康づくりサポーターを中心に広めている	健康づくりサポーター、中山公民館	現館長（鈴木様）が2017年、館長就任前に作曲し、当時の館長へ曲を提供。 当時の館長が、体育競技会に振付を依頼。 以降、中山住民に親しまれる運動になるように、健康づくりサポーターを中心にふれ健や、ピクニックコンサートなどで住民に周知を行っている。	中山ふれ健、出張ふれ健、体力アップ教室等、中山での集会にて地域住民とともにに行われている。 若者世代には周知できていないため、幅広い世代に親しんでいけるようにしていく。
R6年度	島立地区	福祉と交通	高齢者	島立買い物乗合タクシー	・経過と目的 島立地区における住民主体（主に子ども）の地域づくり活動の一環として、平成27年度に発足。地域づくり推進交付金を活動資金として実施。 ・実施時期と場所 概ね8月、10月、11月。山や川をフィールドに自然体験学習を行ったり、三九郎・まゆ玉づくり体験など文化の継承にも取り組む。	・島立つ子 森・杜探検隊 自然体験学習チーム (協力：島立地区町会連合会、島立地区子ども育成会、島立地区地域づくりセンター他)		・今後も拡大が見込まれる買い物弱者対策として、地域が取り組んでいる。
R6年度	島立地区	地域資源	子ども	島立つ子 森・杜探検隊 (もりもりたんけんたい)	・経過と目的 島立地区における住民主体（主に子ども）の地域づくり活動の一環として、平成27年度に発足。地域づくり推進交付金を活動資金として実施。 ・実施時期と場所 概ね8月、10月、11月。山や川をフィールドに自然体験学習を行ったり、三九郎・まゆ玉づくり体験など文化の継承にも取り組む。	・島立つ子 森・杜探検隊 自然体験学習チーム (協力：島立地区町会連合会、島立地区子ども育成会、島立地区地域づくりセンター他)		・子どもたちの生きる力を育むためには何が 良い経験になるか考え、また、子どもたちに何をやってみたいかを常に問いかけて事業を行っている。 ・五感を通じてリアルな体験を提供している。 ・地区内団体の理解と協力の上、事業が実施できている。

回答年度	回答者所属 (地区名・課名等)	関連分野	対象	事業名・活動名	Q1	Q2 概要 (活動の目的、時期、場所、対象、方法、実施体制等)	Q3 実施主体 関係者・関係団体等	Q4 活動のきっかけ／取組みに至るまでの経過 (誰が、どんなことを考え、誰に相談し、どう行動したか等)	Q5 活動の成果および課題、 今後の展望等
R6年度	島立地区	福祉	子ども	ゆいまーる こどもひろば		- 経過と目的 活動の前身であった「ゆいまーる子ども食堂」の食事提供が諸般の理由により継続困難となってしまうしたが、子どもたちの放課後の過ごし方を豊かにしたいという思いから「ゆいまーるこどもひろば」と名称を変え、学習支援、遊びの支援、フードパントリーを行っている。 - 実施時期と場所 毎月1回、島立小学校の前にある島立公民館を会場として実施。 - 高齢者が生活していくうえでのちよっとした困りごとを、地域住民が無理なくできる範囲でお手伝いする有償生活支援サービス - 令和2年8月より開始 - ゴミ出し(可燃、廃プラ、資源要相談) 草取り、雪かき(生活に支障のある箇所) - 利用申請書を地域づくりセンター(地区生活支援員)に提出 - 協力隊員とつなぎ合わせ(地区生活支援員) 支援する - 利用料…ゴミ出し(1回100円 2袋まで) - 草取り(1時間程度) …1人につき200円 - 雪かき…1人につき200円 - 草取り…1回200円 - 雪かき…500円 - 報酬費…ゴミ出し1回200円 - 雪かき…500円	- ゆいまーるこどもひろば運営委員会 (協力：おやこクラブでるる、松本大学、NPO法人ホットライン信州、島立地区師会連合会、島立地区地域づくりセンター他)		- 大学生が子どもたちの遊び相手、宿題の学習支援を行っている。 - NPO法人によるフードパントリーを行い、食の確保にもつなげている。
R6年度	島立地区	福祉と住民自治	高齢者	おたすけ隊 島立		- 高齢者が生活していくうえでのちよっとした困りごとを、地域住民が無理なくできる範囲でお手伝いする有償生活支援サービス - 令和2年8月より開始 - ゴミ出し(可燃、廃プラ、資源要相談) 草取り、雪かき(生活に支障のある箇所) - 利用申請書を地域づくりセンター(地区生活支援員)に提出 - 協力隊員とつなぎ合わせ(地区生活支援員) 支援する - 利用料…ゴミ出し(1回100円 2袋まで) - 草取り(1時間程度) …1人につき200円 - 雪かき…1人につき200円 - 草取り…1回200円 - 雪かき…500円 - 報酬費…ゴミ出し1回200円 - 雪かき…500円	島立地区ボランティア連絡協議会		独居、老々世帯、高齢の親と障がいの子供、ご近所とのつながりの薄い方、など必要は増えています。利用者からは「とてもありがたいシステムだ」と感謝されています。今は地区全体で調整をしています。町会単位での動きも出てきています。協力隊員の募集が課題です。
R6年度	新村地区	福祉と交通	全て	新村プチ送迎ボランティア		- 免許返納または、運転に自信のない方への移動支援策 - 利用先には(買い物) 梓川デリシア、山形村アイシティ(医療機関) 宮澤整形外科、小岩井医院、花村医院、岡野医院がある - 互助の精神で運転手・利用者・賛同者が年間20000円を納入 - 新村在住の方のみ利用可	新村プチ送迎ボランティア あたらしの郷協議会いざいさ部会	松本大学の学生が地区の縁側「みすず屋」でのお年寄りとの会話から「バス停まで歩くのが大変」との話を聞き、民生児童委員に相談したことがきっかけ。	(成果) 利用会員が増え続け、地区の方々に定着している移動支援策。ドアtoドアなので、利用者にとつてありがたい支援策。 (課題) 利用者が増える一方で、運転手は高齢を理由に辞めてしまう方が増えている。新車の運転手のなり手がない。 ・利用者の高齢化もすすむなか、自分での乗り降りが難しい方には、プチ送迎ボランティアの利用を断らなくてはいけない。なぜなら、運転手は介護資格を持たないあくまでもボランティアであるから。
R6年度	新村地区	福祉と住民自治	高齢者	新の里お助け隊		- 高齢者等の困っている方が少しのお金を払うことで気がねなくお願いをしやすくなる有償生活支援サービス - 令和6年2月より開始 - こみ出し(可燃ごみのみ) 草取り(玄関周り等)、雪かき(玄関から生活道路まで) - 利用申込書を地域づくりセンター(地区生活支援員)に提出 - 協力会員と利用会員をつなぐ(生活支援員) - 利用料金…こみ出し(1回150円 2袋まで) - 草取り(1時間以内) …1人につき150円 - 雪かき…(1時間以内) 1人につき150円 - 草取り…1回150円 - 報酬…こみ出し1回150円 - 雪かき…150円 - 雪かき…150円	松本市社会福祉協議会新村支会	- 令和3年11月 地域ケア会議の際、有償ボランティアの必要性(高齢者の「ごみ出し・雪かき」等)について話し合いをした。 - 新村地区困りごとアンケートの実施(75歳以上の独居または高齢者のみの世帯) 70世帯から回答。その後有償ボランティアプロジェクトチームの結成。	(成果) - 地域連携として、第2コムハウスの通所者がお助け隊の協力会員として活躍してくれました。 - 協力会員には、松本大学の先生も登録してくたさり、何かあれば学生も協力をしてくれる。 (課題) 「困りごとアンケート」を実施した際、困っている方のもっと大勢いたが、実際の申し込み者は少なく、さまざまな理由で声をあげれないとしたら、その方々の声をどう拾っていくかが課題。
R6年度	新村地区	防災	全て	新村地区の防災に関する取り組み		1 新村地区防災計画策定 (1) 経過 R3年豪雨災害時、梓川左岸・右岸堤防の一部損壊を契機に、地区防災計画の策定を進めたもの。 (2) 目的 地域住民が自ら考え話し合いながら平時の防災活動や災害時の行動を地域の特性等を踏まえ計画に示すことにより自助・共助を推進する。 (3) 実施時期 R3～R4策定 (4) 方法：新村地区防災計画策定委員会を発足し検討・策定 2 新村地区避難所運営の見直し (1) 経過 新村地区防災計画策定に伴い、松本大学地域防災科学研究所から、すでに策定済みの松本大学避難所運営マニュアルや運営委員会組織の見直しについてアドバイスを受けたことから、見直しについて取り組むこととなった。 (2) 目的 松本大学地域防災科学研究所が東日本大震災時に避難所運営を支援した経験から、現状のマニュアルや組織体制では効果的な運営が難しいとのアドバイスを受けたため、より実効性のあな見直しを図るもの。 (3) 実施時期 R5～R6 (4) 方法：現在、1回/月のペースで避難所運営見直し委員会を開催中 3 関連事業 (1) 保育園避難訓練 (2) 児童センター夏休み防災訓練、防災講座 (3) 新村地区(高綱中学校) 防災訓練	- あたらしの郷協議会(安全安心部会) - 松本大学地域防災科学研究所 - 消防団 - 民生委員児童委員協議会 - 防災士 - 保育園 - 児童センター他		- 防災はどここの地区でも重要テーマとして取り上げている。 - 新村地区防災計画は、松本市地域防災計画にも位置付けられた市内35地区初の計画である。 - 地区住民と松本大学との協働が図られている。

回答年度	回答者所属 (地区名・課名等)	関連分野	対象	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5
				事業名・活動名	概要 (活動の目的、時期、場所、対象、方法、実施体制等)	実施主体 関係者・関係団体等	活動のきっかけ／取組みに至るまでの経過 (誰が、どんなことを考え、誰に相談し、どう行動したか等)	活動の成果および課題、 今後の展望等
R6年度	新村地区	福祉	子ども	こどもの居場所、こども食堂 (笑和はうす、寺子屋、信州みんなの食堂)	・笑和はうす こどもの居場所づくり・食事提供、第2第4土曜日・公民館 ・寺子屋 こどもの居場所づくり、月末日曜日、公民館 ・信州みんなの食堂 こどもの居場所づくり・こども食堂、毎週水曜・旧レストランアングラデ	・笑和はうす (協力：こども福祉課、ホットライン信州他) ・寺子屋 (主催：松本大学考房ゆめ) ・信州みんなの食堂 (協力：こども福祉課、ホットライン信州他)	新村地区の健康課題を把握するために令和5年10月に健康意識アンケートを実施(回答数170)。そこで間食する人の割合が高いことやKDBで慢性腎臓病の医療費割合の増加、糖尿病患者の割合増加等の課題から、本講座の開催に至った。アンケートの実施、結果報告、講座の開催において、地区支援企画会議を通して地域づくりセンター長等の地区関係職員と数回話し合っって進めた。町会長にも出席し、町会長の了承を得て進めた。また、働き盛り世代の課題も把握したいため、新村保育園や児童センターの保護者にもアンケートの協力を依頼した。	・健康意識アンケートの結果より、7割が間食すると回答した。間食の内容としてはカロリーーの低いものから高いものまで幅広かった。 ・当初、健康講座の申し込み数は20人以上いたが、当日大雪のため欠席者もあり、17人参加した。 ・参加者の約70%が講座内容に満足と回答しており、自由記載で学びになったといった感想もいただいた。 ・令和5年度は悪天候だったり、参加できる人も限られてしまったので、令和6年度では出張ふれ健等でも「おやつ」をテーマにした講座を展開していく予定
R6年度	新村地区	福祉	子ども	新村地区 おやつルール講座	【目的】誰もが身近な「おやつ」に焦点をあて、正しい食べ方について普及し、糖尿病等の生活習慣病予防を啓発する目的 【時期と場所】令和6年3月6日(水)AM 新村公民館大会議室 【対象】特に制限なし ※地区事業や地区文化祭、市ホームページ等で周知し、参加者募集 【方法】おやつのおやつの食べ方についての講話と併せて、カロリリーに関する参加型のクイズも実施。講座最後に各自「おやつのマイルール」を書いてもらった	新村地区担当保健師(主体) ・新村地域づくりセンター長 ・福祉ひろば職員 ・生活支援員 ・町会長 ・新村保育園、児童センター		
R6年度	和田地区	福祉	高齢者	町会サロン (6町会)	町会内のボランティアや町会長、民生児童委員が高齢者の孤立を防ぐため、身近な場所での集い・交流・活動を行う中で通いの場を作ることを目的として始めた。	町会 町会ボランティア 町会有志	近くの町内公民館であれば歩いて行ける。同じ町会の者同士で気兼ねなく集まれる。	高齢者の孤立防止、地域の見守り、きずなづくり
R6年度	和田地区	福祉と交通	高齢者	買い物・送迎ボランティア	特別養護老人ホーム「ゆめの里」の送迎車を利用し、和田地区内の元気高齢者で、買い物に不便を感じている方に対し、週1回自宅から店舗まで送迎を行っている。	JA松本ハイランド和田支所	H28.4より 社会福祉法の「地域における公益的な取組み」推進の一環として発足。	買い物の不便解消、健康維持
R6年度	和田地区	福祉と住民自治	全て	思いやりカフェ	お茶を飲みながら、ちょっとした悩みや、認知症、介護保険サービスなどを気軽に相談できる場や、住民同士がおしゃべりを楽しみ、交流できるような居場所を作っている。また、公民館協力のもと館長、主事によるスマホの相談もできる。	和田地区地域づくり協議会 福祉健康部会	以前行っていた「認知症カフェ」の実施主体の薬局の経営が変わったことをきっかけに実施主体を変更し、リニューアルを行った。認知症本人や、介護者だけでなく住民誰もが気軽に集い、話ができる場所に変更した。	地域の絆づくり、介護予防、介護者の精神的負担軽減、情報共有、医療との円滑な連携
R6年度	和田地区	福祉と住民自治	高齢者	福祉ひろばを支える会	福祉ひろば事業の継続性と自主性を維持することを目的に、福祉ひろば推進協議会の08や経験者が裏方として事業を支援している。	福祉ひろば推進協議会08・経験者で組織されたボランティア	H11より 退任した町会役員がいつまでも福祉ひろろばとかかわりを持ち「黒子」として支援していける団体を創設した。	地域のきずなづくり、福祉ひろろば活動の強化
R6年度	和田地区	福祉	ジェンダー	フラダンスサークル	和田地区の女性有志が健康維持と仲間づくりのためフラダンスのサークルを立ち上げ活動している。	フラダンスサークル 「オヒア・レフア」		健康維持、仲間づくり、福祉活動
R6年度	神林地区	福祉と住民自治	全て	神林パイナップルカフェ	・認知症サポーター養成講座を修了した、旧民生児童委員を中心に、月1回程度町内公民館やお寺などを会場に開催。 ・日常生活のためになるお話や体操など、その時々でテーマを変え、仲間づくりを進める。 ・介護をしている人、子育て中の人、誰かとお話したい人など、皆が気軽に話す場を通じてつながりをつくり、安心して暮らせる地域を目指す。	・旧民生児童委員 ・神林地区まちづくり協議会 ・地域づくりセンター(公民館・福祉ひろば) ・JA神林支所	・地区の勉強会で信州大学の井上教授やあかはね内科神経内科医院の唐木医師から、健康維持のためには、人と人との支えあいや、生きがいづくりが大切であるという講演を聞き、地域の「つながり」が重要であることを確認。 ・当時の民生児童委員が主体となりオレレンジカフェをアレンジし認知症の方だけでなく、世代を超えて交流できる場「パイナップルカフェ」を企画。	・令和6年度で8年目。 ・現在、各町会11回の開催を目標に開催。各町会での開催となり移動手段のない方も参加できるようになった。近くに住んでいても会話の機会が減少していた住民に絆の大切さを認識していただくことができた。(久しぶりに話せてよかったなどの感想が聞かれた) ・認知症の本人、家族に対して、介護保険以外の集える場所の1つになった。 ・地域住民の薬剤師から生活の見直しや知恵や工夫を伝えてもらったり、地域に密着しているJAや信用金庫から詐欺の注意喚起や今の制度について話してもらったなど、地域の方や事業者との協働につながった。 ・参加者の固定化、開催内容のレパートリーの拡充、運営の人員の確保などが現在の課題。
R6年度	神林地区	福祉	全て	みんなのえんがわ	令和5年度開催の「出張サロンin町内公民館」から名称を変更。 全7町会の町内公民館で開催(不定期。各町会年1～2回)。 ・移動販売や相談会、お茶飲みサロンなど町会独自に企画・運営を行い、センターが支援する形で「身近な居場所づくり」を行う。	・神林地区まちづくり協議会 ・地域づくりセンター(公民館・福祉ひろば)	・コロナ禍で、自宅から歩いて行ける場所(町内公民館等)の居場所づくりが必要になった。 ・交通空白地のため、買い物難民が増加している。 ・令和5年度の活動がセンター主導で、職員間の日程調整等の課題があったため、持続的な活動となるよう今年度から町会が主体となって企画・運営を行い、センターが支援する形へと変更。	・今年度から名称を変更して始めたが、事業名と内容を周知するのに時間がかかった。 ・町会長や町会役員の方と相談しながら資料等の作成も行うため、地区住民と職員とが近い距離で活動を行うことができている。
R6年度	神林地区	福祉と地域活性化	子ども	ヒッポボ食堂	令和5年度から神林公民館を会場に子ども食堂を開催。 ・月1回、子どもの居場所づくりとして、食事提供や学習支援等を行っている。 ・町会連合会を通じて呼びかけ等で、地区住民からの食材提供なども行っている。	・ヒッポボ食堂 ・神林町会連合会	・有志の団体より地区内で子ども食堂を開きたいとの相談があり、町会連合会が協力という形で活動が開始。	・毎回定員いっぱい参加があり非常に好評。 ・単なる子ども居場所づくりだけでなく、地区内のサークル等の団体とも関わる企画を行うなど、多世代交流の場となるよう活動を行っている。

回答年度	回答者所属 (地区名・課名等)	関連分野	対象	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5
				事業名・活動名	概要 (活動の目的、時期、場所、対象、方法、実施体制等)	実施主体 関係者・関係団体等	活動のきっかけ／取組みに至るまでの経過 (誰が、どんなことを考え、誰に相談し、どう行動したか等)	活動の成果および課題、 今後の展望等
R6年度	笹賀地区担当 保健師	福祉	全て	がん検診・特定健診受診率向上PR	活動の目的：笹賀地区で行われるがん検診・特定健診の認知度や受診率の向上のため 時期：5月～2月 場所：公民館、福祉ひろば、地区事業の場など 対象：地区内もしくは地区内施設を利用するがん検診・特定健診対象者 方法： ①チラシの配布 ・公民館事業で行われるスポーツ大会での直接的なチラシ配布やPR（がん検診・特定健診） ・町会長会、健康づくり推進員情報交換会（笹賀の健康課題や強みの共有と、がん検診・特定健診のPR） ・JA笹賀支所（特定健診・がん検診のチラシ付きティッシュ） ・地区内保育施設（がん検診クーポンの利用推奨） ・回覧文書配布（がん検診） ②SNS情報発信 松本市保健師HP ③ポスター掲示 ・公民館 ・福祉ひろば ・JA笹賀支所	実施主体：保健師 関係者：地区福祉ひろば、笹賀地区地域づくりセンター 協力：地区福祉ひろば、公民館、JA笹賀支所、地区内保育施設、健康づくり推進員、町会長会等	笹賀地区の特定健診・がん検診の受診率が例年低かったこと、R4年以前の特定健診の地区会場受診者が少なかったことで、地区会場での実施可否が問われる事態となり、少しでも地区会場の受信者を増やしたい思いでR5年度からより力を入れて周知した。 JA利用者には国保加入者多いと予想したため、9月頃に保健師がJA笹賀支所の所長へ相談し、ATMと窓口にてチラシやティッシュを置いていただくことを了承いただけた。また、農協祭に合わせチラシの配布をお願いした。 12月～1月にかけて、がん検診のクーポン利用を促進するため、地区内保育施設に個別に保健師がアポイントを取り、チラシを配布した。 地区で実施したがん検診や特定健診の人数は、関心を持っていただくために1月に町会長会でも報告した。	地区の特定健診受診者数が増加（R4：9人→R5：22人） JAでチラシをもらったという方が3名ほどいた。
R6年度	笹賀地区担当 保健師	福祉	子ども	健康相談事業	活動の目的：地区住民の健康支援 時期：偶数月二子児童センター、奇数月第2月曜日笹賀地区福祉ひろば 対象：二子児童センターは主に母子、福祉ひろばは対象指定なし 方法：保健師による体重身長計測と子育て・生活に関する相談 実施体制：母子向けの健康相談は毎月第2火曜日の母子支援事業「ひよこ」でも会の終了後に毎回実施している。 R6年度からは、二子児童センター会場の実施日を第3火曜日に設定し、チラシに記載。新生児訪問や保健センターにチラシを設置・配布するほか、民生児童委員のこんにちには赤ちゃん訪問事業でもPRしていただいた。	実施主体：保健師 関係者：地区福祉ひろば、二子児童センター、民生児童委員等	①地区健康相談 笹賀地区が南北に長い地区であることや、日中移動できない母子もいることから、R4年度から隔月で会場を変えて健康相談体制をとることを考え、R3年度まで年数回不定期に出張型の健康相談を行っていた二子児童センターに相談した。R4年度は年度が始まってから日程を決めていたが、二子児童センターとの打ち合わせの中で事前に日程を周知したいと提案があり、R5年度からは年度開始前に年間日程を決めて周知を開始した。R6年度に向けての保健師と児童センターとの打ち合わせでは、さらに覚えてもらいたいよう実施曜日をなるべく固定してチラシにも掲載したいという話が挙がった。 ②ひよこでの健康相談 R3年度までは、保健師は主に手遊びと当日の育児支援のために出席していたが、短時間でも手軽に育児相談ができればと考え、福祉ひろばへ会の終了後に健康相談を行うことを打診した。	民生児童委員から、「二子児童センターの日程がチラシに掲載されるようになり、説明しやすくなった。住んでいる地区に合わせ、どちらか近いか、何をやっているのかを伝えやすくなった。ひよこのあとでも測ってもらえるからという相談しやすい」とコメントあり。 福祉ひろば会場の健康相談利用者数が増加（R4：実人数10人→R5：実人数30人）
R6年度	芳川地区	住民自治	全て	芳川地域づくり協議会	1 地域づくり協議会 (1) 目的 ・地区住民が主体となって安心して生き生きと暮らせる住みよい地域社会を構築する (2) 時期 ・平成27年に発足 ・令和4年度に規約等改正 ・令和5年度から運営委員会を年1回→毎月開催に変更 ・令和6年度地域課題である防災に特化した取り組みを行う (防災対策チーム会議を月1回開催) 2 芳川まるとと青空市 (1) 目的 若い世代が「気軽」に参加できるイベントの提案があり、芳川地区で暮らす人々の交流することも目的として開催 (2) 時期 ・モデル地区最終年の令和5年度に全4回（4町会）開催 ・令和6年度には、防災フェスタ（9／29）及び健康フェスタ（10／20）のイベント開催時に開催	・芳川地域づくり協議会	1 地域づくり協議会 活動の振り返り組織の見直しを検討し、地域課題の共有、視点・知恵の出し合いを主とし、各部会で取り組みを行う形としたもの。 2 芳川まるとと青空市 若い世代が「気軽」に参加できるイベントの提案ができなかった。 検討し、交流できるイベントを開催することとなったもの。	・モデル事業として行った「芳川地域づくり協力隊」の取組みは、芳川地域づくり協議会に引き継ぎ、持続可能な、より良い地域づくりにするため、事務局員を配置し、事業展開を図る

回答年度	回答者所属 (地区名・課名等)	関連分野	対象	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5
				事業名・活動名	概要 (活動の目的、時期、場所、対象、方法、実施体制等)	実施主体 関係者・関係団体等	活動のきっかけ／取組みに至るまでの経過 (誰が、どんなことを考え、誰に相談し、どう行動したか等)	活動の成果および課題、 今後の展望等
R6年度	寿地区	地域活性化と文化・芸術	全て	寿地区・福祉の文化祭	1 経過 ・寿地区文化祭は、今年で47回目の開催（S51から） ・福祉ひろばの開所（H10）、民間の障がい者就労施設の開所（H11）により、ひろば事業への障がいのある方の参加、文化祭参加の要望あり ・平成24年に初めて地区文化祭の前日に開催し、障がいのある方が文化祭に参加 ・今年13回目を数え、コロナ前は、寿体育館で一堂に会し直接交流 ・令和3、4年は、間接交流事業に切り替えて福祉の絆作品展・交換を開催 ・令和5年度からは、再び寿体育館で一堂に会して直接交流 2 目的 ・誰もがくらしやすい街づくりを進めていくため、寿地区の皆さんや福祉に関わる方々が一堂に会し、高齢者や障がいのある皆さんと住民や子どもたちが互いに交流を深め、お互いを知りきっかけとします。 ・また交流を重ねることで、互いに足りないものを補い支え合える「お互いさま」の心を地区全体で育んでいくことを目指すものです。 3 実施時期と会場 ・福祉の文化祭の開催 R6年9月18日（水）10：00～11：30 寿体育館 4 方法等 ・実行委員会を3回、スタッフ会議を3回開催し、話し合いを重ね準備しました。 ・今回初めての企画として、8施設が施設紹介等のブース出展とその他ダンス等、福祉の文化祭としての作品作成を行いました。	・令和6年度福祉の文化祭実行委員会（構成：寿地区福祉ひろば事業推進協議会、寿地区町会連合会、寿地区民生児童委員協議会、寿地区地域づくり協議会（福祉部会）、寿小学校、寿地区高齢者・障がい者施設（8施設）、寿地区地域づくりセンター（出張所、公民館、福祉ひろば））	昨年度は公民館があらかじめ用意した案のとおり各福祉施設が動く形となったが、今年度は企画の段階から各福祉施設や小学校が案を出し合い、最終的に全員が合意した形での開催した。	・他地区では、地区文化祭とひろば祭りが開催されているが、寿地区では高齢者・障がいのある方と地域住民、小学生が参加交流できる事業を開催している。 ・民間施設の積極的な参加協力
R6年度	寿台地区	住民自治	子ども	明善中コミュニティスクールのプロジェクト	寿台、松原、内田、中山の各公民館が持ち回りで事務局を務め、地区行事を実施するにあたって地域が抱える問題を、「総合的な学習の時間」を活用した中学生のボランティアにより解決する取り組みを行っている。	明善コミュニティスクール運営委員会（地区公民館、地区町会連合会長、PTA会長、地域づくりセンター長、中学校教職員、地域住民等）	年にわずか2回回のコミュニティスクール運営委員会の議論によって、学校のカリキュラム等運営計画や地域の行事等の営みが改善されることが非常に少なく、コミュニティスクールの業の真価が発揮されない状況となっていた。 しかし、明善中の生徒は、長年地域のボランティア活動を実施してきた。 したがって、学習要領の変革を期に、令和2年度から運営委員会を再編し、「明善中コミュニティスクールプロジェクト」が始まった。 寿台地区では、住民の高齢化により地区行事の実施が大人だけでは困難になっている。 子どもが地区行事に参加し、地域での思い出づくりをすることとで、将来の地区への定住や回帰を願う。	・「寿台夏祭」「寿台文化祭」では、出店の手伝いや、お楽しみ抽選会での景品配りの手伝い等を依頼したが、参加者からは「中学生の応援がとてもよかった」「感心した」といった好評があった。また、中学生の手伝いなしでは実施できないという声も上がっている。地域にとって中学生の力が必要であり、中学生は地域に必要とされていることを互いに実感している。
R6年度	寿台地区	福祉と住民自治	子ども	寿台ハッピー食堂	・2016年3月より事業開始 ・食事を通して、「生きる力をつける」「作ってくれた人に感謝できる」「食べ物を大切にすること」そして地域の人たちの交流により、「地域全体で子育てを応援する」という目的で活動している。 ・主に旧寿台児童館にて、月2回不定期で行っている。	・寿台町会連合会（実施主体） ・民生児童委員（協力団体）		・調理学習、生活体験（味噌作り、しめ縄作り、松本七夕づくり） ・フードロス、フードドライブ学習、学習支援などを行っている。
R6年度	寿台地区	住民自治	全て	壮青会	次世代を育成するための活動	・町会連合会(主体) ・壮青会	地区内が高齢化し、役員のなり手がなくいため、次世代を育てて将来の役員候補としたい。	壮青会を立ち上げてまだ3年のため、成果としてはまだ無いが、今後の見込みとしては、大きく育っていききたい。
R6年度	寿台地区	福祉と交通	高齢者	寿台マルシェ	買い物弱者の対応で、5～6件ほどの業者が来て衣類、靴、食品等の販売を実施。 歩いていける場所で、楽しく買い物ができること喜ばれている。	・町会連合会・地区生活支援員(主体) ・地区福祉ひろば(協力)	買い物弱者のため	6年以上行っているため、それなりの成果は出せている。他地区からの参加者も増えている。今後の展望もあり。
R6年度	寿台地区	住民自治	ジェンダー	居酒屋「よりましよ」	男性の居場所づくり、交流の場	・町会連合会(主体) ・地区生活支援員(協力)	男性の居場所づくり	足かけ10年続いていて、毎回25名～30名の出席がある。
R6年度	松原地区	地域活性化と地域資源	全て	松原モールぶろろじえくと支援	松原地区の住民有志が地区内にある「松原ショッピングモール」の活性化を図るためにコンサートやイルミネーションイベント、日常的な美化活動を行っている。	松原モールぶろろじえくと	5年先、10年先までの地域活性化について考え始めたグループが、具体的な目標として地区内のモールにあるからくり時計の修復とモールの美化活動を2018年の春から開始した。からくり時計修復の費用を捻出するため、定期的にコンサートやクリスマスのイルミネーションを時計台まわりで行い、地域住民の関心を集め募金活動を行った。	からくり時計修復を業者に頼んだ場合の費用は法外であったため、協力者の輪を広げ、全体的な目標として地区内のモールにあるからくり時計の修復とモールの美化活動を行うことができた。また、モールの美化活動については、プロジェクトメンバーと協力者により冬季以外毎週土曜日の朝7時から1、2時間かけて清掃と草取りを継続的にやっている。
R6年度	松原地区	住民自治と防災	全て	松原地区町会連合会自主防災会	松原地区の住民有志、防災防犯部長、センター職員、避難所担当職員らが、地域の防災力を高めるために防災について学習をしたり避難所運営について検討している。	松原地区町会連合会自主防災会	公民館主催で本年5月10日に山梨防災安全センターと甲府地方気象台を訪問し、防災研修を行った。その時の参加者を中心に、なかなか体制整備が進まない地域の防災体制にドライブをかけるため、研究会という形でグループを立ち上げ活動を開始した。	・現状の町会長や防災防犯部長は1年もしくは2年任期のため、地域の防災体制に対して危機感を持つても、長期的な視点で課題解決に取り組むことが難しい。それを補いサポートする形で活動を目指している。 ・地区内で最も防災体制が整っている町会の防災担当者から災害時対応マニュアルと避難所運営マニュアルを提供してもらい、地区版の各種マニュアルの整備を開始している。
R6年度	松原地区	福祉	全て	ひろばを支える会	ひろばの事業を行うときのサポート	・ひろばを支える会		・男性会員が多く、協力体制が整っている。

回答年度	回答者所属 (地区名・課名等)	関連分野	対象	事業名・活動名	Q2 概要 (活動の目的、時期、場所、対象、方法、実施体制等)	Q3 実施主体 関係者・関係団体等	Q4 活動のきっかけ／取組みに至るまでの経過 (誰が、どんなことを考え、誰に相談し、どう行動したか等)	Q5 活動の成果および課題、 今後の展望等
R6年度	松原地区	福祉と教育・スポーツ	若者	カミカミ促進運動(R5年度)	①グミ教室 8月上旬に公民館主催で小中学生対象に噛み応えのあるグミを作成。試食時に保健師より噛むことについての講話を実施。 ②松原ウォーク 9月下旬に体力づくりサポーター主催で、ウォーキング大会を実施。体力づくりサポーターの歩き方講座の後に、地区内をウォーキング。その後、食生活改善推進員が調理したカミカミ豚汁を試食し、保健師から噛むことについての講話を実施。 ③文化祭 10月下旬に福祉部と健康福祉ブースを設置。咀嚼チェックゲームや握力測定で噛む力の可視化や噛むことをテーマにしたクイズを実施した。 ④恵方巻教室 節分の日に公民館主催で、小中学生を対象に恵方巻づくりを実施。試食時に保健師より噛むことについての講話を実施。	公民館 福祉ひろば 食生活改善推進員 福祉部 体力づくりサポーター 安協松原地区 地区担当保健師	国保加入者のデータ（K08）の分析より、松原地区は”食事速度が遅い”や”血糖値が高い”、”BMIが高い”傾向があった。これらは、食事速度が遅いことによる、大食いやインスリンの過剰分泌が一因と推測し、これらの課題の解決する取り組みを行うこととした。まずは、地区企画支援会議や福祉部定例会にて、地区の健康課題を共有。その後、関係団体と事業を企画し、必要あらば他団体にも協力を依頼した。全世代へのアプローチを考え、「楽しい」と思える企画になるよう努めた。	課題を共有したことで、地区職員から「ここでカミカミの話をしたら？」や「カミカミの企画して」といった声をかけていただいた。その結果、自分だけでは考え付かなかった事業も行えて、活動の幅が広がったと考える。R5年度は、全世代に向けての企画を実施したが、実施するなかで食時速度は壮年期世代や高齢者男性で早い傾向があると感じた。R6年度は国保加入者のデータ（K08）の分析を進め、アプローチする世代を絞って企画していく。
R6年度	岡田地区	地域活性化	全て	暮らしいろどる 岡田マルシェ	・令和6年度地域自治支援交付金提案事業の一つ ・目的：岡田での暮らしや人とのつながり、新しい出会いをより楽しめる空間を目指すもの ・内容：岡田地区住民を主体とした出店者による販売、ワークショップなどを行うもの ・実施時期：令和6年10月26日（土）、12月21日（土）の2回実施予定 ・会場：岡田公民館及び岡田公民館駐車場	・岡田で楽しむ！実行委員会（信大生） ・岡田地区地域づくりセンター ・岡田公民館 ・岡田地区福祉ひろば ・地域づくり課（ユースサポート担当）	・大学生による地域活性化につながる事業である。 ・大学生と地域づくりセンター等との協働事業である。	・夏休みの実施期間には毎回50名程度のこどもの参加があった。 ・昨年度までは岡田公民館主催で、長期休暇中に学習会場をこどもたちに開放していたが、それにプラスして昼食付の事業としてグレードアップした内容となった ・昼食提供にラーメン「す八」、「おきな堂」さんの協力が得られた（元木さんの力） ・来年度以降事業継続の方向性検討（資金どうするか）
R6年度	岡田地区	住民自治と教育・スポーツ	子ども	おかBEN（おかだで勉強&弁当）	・令和6年度地域自治支援交付金提案事業の一つ ・目的：夏休みなどの長期休暇中のこどもたちの居場所づくり、地域の大人や学生による宿題や学習支援・レクリエーションを通じて多世代交流を図る、こどもたちに昼食を提供し孤食を防ぐとともに保護者の負担を軽減する ・開催日：7月23日、7月24日、7月30日、7月31日、8月20日 （春休みにも実施予定）	・NPO法人スマイルこどもの家 ・長野県支部「山ノコドモ」 ・岡田地区地域づくりセンター ・岡田公民館	・NPO法人スマイルこどもの家 ・長野県支部「山ノコドモ」 ・岡田地区地域づくりセンター ・岡田公民館	・夏休みの実施期間には毎回50名程度のこどもの参加があった。 ・昨年度までは岡田公民館主催で、長期休暇中に学習会場をこどもたちに開放していたが、それにプラスして昼食付の事業としてグレードアップした内容となった ・昼食提供にラーメン「す八」、「おきな堂」さんの協力が得られた（元木さんの力） ・来年度以降事業継続の方向性検討（資金どうするか）
R6年度	岡田地区	福祉と住民自治	高齢者	「おかだお気軽お助け隊」	・高齢者の皆さんが、住み慣れた岡田ですっと暮らしていくために、地域住民が協力隊員となり、お手伝いをする有償生活支援サービス ・令和6年4月より開始 ・支援内容：ごみ出し（可燃ごみ限定）草取り ・利用希望者は、地区生活支援員に利用申請書を提出、協力隊員をマッチングし支援する ・利用料金：ごみ出し 月200円/草取り 隊員1名につき1時間500円/30分超えるごとにプラス250円 ・隊員報酬：利用料金と同額 ・9月13日現在 協力隊員33名、利用会員14名	松本市社会福祉協議会岡田支部	・地区生活支援員が岡田地区の高齢者の皆さんの困りごとを解決するために「おかだお気軽お助け隊」を立ち上げようと考えた ・R5年度困りごとアンケートを実施、その結果「ごみ出し・草取り・雪かき」に困っている人が多い事が分かった ・R5年度マスコットキャラクターを作成し名前を募集することとで住民の皆さんにお助け隊を周知 ・R5年度協力隊員募集のチラシを作成し全戸配布、集まった隊員やセンター長と話し合いを重ね、まずはごみ出しからやってみようとなりR6年4月より開始	・利用者さんにとっても感謝されている反面、始めてみて見えてきた課題が沢山あった ・概ね2か月に一度定例会を開催し、協力隊員の活動の状況報告、活動やマッチングを通して感じた課題について、協力隊員やセンター長と話し合い、課題を解決に向け取り組んでいる ・今後も新たな課題が出てくると思うが、利用者さんに感謝されるだけでなく、協力隊員もやって良かったとやりがいを感じてもらえるような組織にしたい
R6年度	岡田地区	福祉	全て	岡田地区健康づくり推進員会	＜目的＞ 「健康」を地区住民に意識してもらえよう、地区対象及び各町会対象に意識啓発や講座開催などを行っていく。 「健康」をキーワードとした地域づくりに取り組む。 ＜時期＞ ・定例会は、約2か月に1回開催 ・健康講座は、年2回開催 ＜場所＞ ・岡田公民館	・地区住民 ＜幹事＞ ・地域づくりセンター長 ・地区担当保健師 ・健康講座は、岡田公民館共催で、電話申し込み先となっている。	・令和4年の健康づくり推進員会の見直しにより、令和5年度から人数は縮小したが、町会組織として活動を続けている。	・健康講座を年2回開催。一般住民12～25名ほど参加。 ・地区の夏祭り、サークル発表会等で健康啓発活動をしている。 ・各町会の出張ふれあい健康教室で、運営補助をしている。
R6年度	岡田地区	福祉	子ども	タッチケア講座 離乳食講座	＜目的＞ ・身近な場所ですべてに子育てに関する正しい知識を学べる場の提供 ・子育てをしている方へ相談窓口や出かけ先の周知 ・岡田地区で子育てをする方へ、公民館や福祉ひろばの認知を広める ＜時期＞ 3か月ごとそれぞれ2回ずつ ＜場所＞ 岡田地区福祉ひろば ＜対象＞ ・タッチケア講座：歩き出す前のお子さんと保護者 ・離乳食講座：4か月～1歳頃のお子さんと保護者	＜主催＞ ・岡田公民館 ・岡田地区福祉ひろば ・健康づくり課	・子育てをしている方に、保健師（相談窓口）や出かけ先の周知をし、公民館や福祉ひろばについて知ってもらいたい。また、核家族化が進み、サポート不足や地域から孤立している母子が多いのではないかと感じ、講座を立ち上げた。	・2～6組/回の参加あり。 ・その後も継続して、福祉ひろばの利用があり、きっかけ作りとなっている。 ・地区職員や民生委員との顔合わせの場所となっており、今後の支援につながる。
R6年度	入山辺地区	福祉と交通	高齢者	あじさいの会	入山辺線バスで来れる「歌の会」 目的：入山辺線バスを利用した、高齢者の通いの場の提供 時期：月2回（バス中央ルート、北ルートを利用） 場所：地区公民館 対象：高齢者 実施体制・方法：民生児童委員⇒ピアノ伴奏、曲の選曲、住民への声掛け、送迎 地区生活支援員⇒歌詞作成、地区住民への周知。	・民生児童委員 ・地区生活支援員	経緯 「集まりの場がない」「行きたくても足がなくて行けない」という高齢者の声を地区生活支援員が民生委員へ相談。 ・入山辺線のバスの時間に合わせた会を作れないか ・公民館の使っていないピアノを利用できないか ・多くの人が参加しやすいものは何か等 民生委員が中心となり、協力者と参加者を募り開催。好評により、バスの路線を変えて月一回⇒月二回に増やして実施。	成果 ・これまで通いの場にあまり参加していなかった方、歩いて来れる方、バスを利用する方、それぞれ楽しみに参加されている。 ・独唱したい方、各自の得意な楽器を披露したい方等、輪が広がっている。 ・松風園の方も今後は参加。

回答年度	回答者所屬 (地区名・課名等)	関連分野	対象	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5
				事業名・活動名	概要 (活動の目的、時期、場所、対象、方法、実施体制等)	実施主体 関係者・関係団体等	活動のきっかけ／取組みに至るまでの経過 (誰が、どんなことを考え、誰に相談し、どう行動したか等)	活動の成果および課題、 今後の展望等
R6年度	入山辺地区	福祉と教育・スポーツ	高齢者	わたげの会	グラウンドウォーキング 目的：高齢者向けのグラウンドウォーキング 時期：月1回 場所：入山辺運動広場 対象：高齢者	民生委員 地区生活支援員 包括支援センター	ひろばのウォーキングについて行けない方から、「グラウンドであれば歩ける」という声を聞き、民生委員さんに相談。入山辺運動広場を歩くだけでなく、歌も歌うわたげの会を発足。自分のペースで、おしゃべりをしながら歩く。	周辺地区の方が歩いて来て、ウォーキングと歌、おしゃべりを楽しむ会となっている。
R6年度	入山辺地区	福祉	全て	百歳体操愛好会	目的：地域の方の定期的な運動の場 時期：毎週金曜日 場所：地区公民館 対象：どなたでも	健康づくり課 地区生活支援員	百歳体操をやりたい、という声はあるが町会で発足することが難しかったため、健康づくり推進員に相談し、体験会等をして参加者を集める。地区生活支援員が地区住民へ周知し、どなたでも自由に参加できる。	住民の方なら誰でも予約なく参加できるので、気軽に参加しやすい。 当番も、機械関係のできない高齢者以外の方で回している。
R6年度	入山辺地区	住民自治と交通	高齢者	どこでも椅子	目的：移動販売の買い物に集まる高齢者がお喋りをするための椅子 時期：毎週水曜日 場所：バス停の空いたスペース 対象：移動販売を利用する高齢者	・移動販売業者 ・地区生活支援員	移動販売を毎週利用する高齢者が、買い物物の後に立ったまま、しゃがみこんで話し込む姿を見た地区生活支援員が、地区住民と、入山辺地区将来ビジョンを考える会（愛称：こんな山辺にすするじゃん会）のDIYグループに相談。住民が考案し、するじゃん会メンバーが制作を手伝う形で、3脚の「どこでも椅子」を制作。平日は地区公民館に飾り、水曜日に地区生活支援員がバス停に運び、地域の方の交流の場に使ってもらう。	するじゃん会メンバーにペンキを塗ってもらうって、座り心地がよいこともあり話がはずんでいる。今後は、椅子の入るようなクッション（座布団）を、集まりの場にあまり参加できないような地域の方に声をかけて制作の依頼予定。
R6年度	入山辺地区保健師	福祉と住民自治	高齢者	ふれあい会食会	○目的 一人暮らし高齢者等に会食又は配食サービスを通じて外出や地域住民との交流の機会を提供し、孤立感の緩和や親睦を深め、地域福祉を推進する ○時期 R5年11月21日 R6年11月26日 ○場所 入山辺公民館 大会議室 ○対象 65歳以上の一人暮らし、または、75歳以上の夫婦二人暮らし ○方法・実施体制 公民館での2時間ほどの交流会と、弁当配布	○実施主体 入山辺地区健康づくり推進員会 ○共催 入山辺地区社会福祉協議会、入山辺公民館 ○関係者・関係団体等 入山辺地区民生児童委員会（お誘い・送迎）→R6年度からは協力団体	○流れ R5年8月の健康づくり推進員定例会にて、実施内容を検討 R5年9月の民生児童委員協議会定例会にて、地区担当保健師から対象者へのお誘いを依頼 R5年9～10月に、推進員・民生委員が協力して対象者へのお誘いを実施 R5年11月、当日送迎を民生委員が実施、当日運営を推進員が実施 ○その他 ・入山辺公民館からは、会場（大会議室・運動場）借用、参加者問い合わせ等 ・入山辺地区社会福祉協議会からは補助金助成あり	R5年度は33人の参加があり、対象者の17パーセントであった。参加者からは「久しぶりに同級生に会えてうれしい」「脳トレが楽しかった」等の感想をいただいた。 R6年度は実施に向け準備中。
R6年度	里山辺地区	福祉と住民自治	高齢者	地域住民の繋がりづくり	○コロナ禍における高齢者の引きこもりや外出控えの対策 ○住民の「顔がみえ 心つながる 里山辺」を目指して取組み ・「ふれあいベンチ」の製作 散歩途中の休憩・交流の場になるよう手作りベンチを製作して設置。 ※設置場所：針塚古墳、八坂神社、薄宮神社、地区公民館等 R6年度は新たに兎川寺に設置予定 ・「青空サロン さとカフェ」の開催 地区住民が気軽に立ち寄れる場として無料のコーヒーとお茶菓子を用意し希望の場所へ出張してカフェを開催。さとカフェで使用するテーブルや紙コップを入れるカップホルダーもメンバーが手作り。 ・メンバー間で考えた企画の実施 つながろう会メンバー自身が楽しみ交流できることを企画開催。小グループに分けたメンバー内で企画し実行する。 R5年度 「安曇野めぐり」「地区内施設視察研修」「思い出のレコードコンサート」「そば打ち体験」を実施 R6年度 「地区内を走る路線バスを使った市街地井戸めぐり」、「干し柿作り又はワイナリー見学」を実施予定 ・その他 ふれあい会食会のプレゼント作り、人材育成講座の開催	・つながろう会（有志団体） 協力：里山辺地区まちづくり協議会、東部地域包括支援センター、里山辺地区地域づくりセンター（地区生活支援員）	既存事業であったが、コロナ禍により飲食の制限を受け、規模も縮小していったが、令和5年度より調理の試験運転を再開した。より多くの世代に通っていたため、ターゲットや目的を明確にし実施している。調理ボランティアについてはひろば事業推進協議会の関係団体に声掛けを行い、都度募集をしている。	・地区生活支援員や包括支援センター職員による生活支援体制整備の一環として住民と協力して立ち上げたグループであるが、リーダー等を決めず、活動は自由で、緩やかな有志グループとして活動している。 ⇒その分、地区生活支援員の関わりが大きくなる。 ・自分達も楽しめる活動をするということがモットー
R6年度	里山辺地区	福祉と住民自治	全て	喫茶「憩いの森」	○地域交流、子育て世代・高齢者への支援等を目的として行っており、令和5年より新たに調理ボランティアを募集し食事やおやつを提供を行っている。今年度より手作りのメニューを増やし、長期休みの学生や独居高齢者の食事の補助を目指した。参加者数も昨年度より増加傾向にある。今後更に地域の住民が利用しやすい環境づくり、メニュー考案を行っていく予定。	福祉ひろば事業推進協議会	既存事業であったが、コロナ禍により飲食の制限を受け、規模も縮小していったが、令和5年度より調理の試験運転を再開した。より多くの世代に通っていたため、ターゲットや目的を明確にし実施している。調理ボランティアについてはひろば事業推進協議会の関係団体に声掛けを行い、都度募集をしている。	ボランティアの数を増やし、組織化を目指す。
R6年度	今井地区	地域資源	全て	文化財保存継承活動	地区住民の活動団体である今井地区文化財委員会が、今井地区の文化財の保護調査及び歴史文化を研究し継承するために、文化財の案内板の設置、学習会等を行っている。	今井地区文化財委員会	・今井地区文化財委員会は、松本市歴史文化基本構想文化財調査時に、今井地区の文化財を調査するために発足した。文化財調査終了後、文化財を学び、保護・研究する任意団体に発展した。 ・地区内の文化財の案内板の設置、立替を行っている。 ・毎月、会報「今井の文化財」を発行している。	・月に1回定例会を開催。 ・会報「今井の文化財」の50号発行を記念し、合冊版を発行した。今井地区、地区外からも配布希望が多数あった。 ・活動を継続するため、後継者の育成が必要。

回答年度	回答者所属 (地区名・課名等)	関連分野	対象	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	
				事業名・活動名	概要 (活動の目的、時期、場所、対象、方法、実施体制等)	実施主体 関係者・関係団体等	活動のきっかけ／取組みに至るまでの経過 (誰が、どんなことを考え、誰に相談し、どう行動したか等)	活動の成果および課題、 今後の展望等	
R6年度	今井地区	福祉と住民自治	子ども	今井っ子わくわくひろば	・目的 今井地区における子どもの居場所づくり活動の一環として、地域全体で子育てを行う体制を作り、子どもの健全な育成を促し地域との関りを深めるもの ・実施時期 小学校の長期休みにあわせて実施 ・場所 今井公民館 ・対象 小学生、中学生（お手伝い） ・方法と体制 地域関係団体協力のもと、様々な学習体験や食事提供を行う。	・今井福祉協議会 ・今井地区民生児童委員 ・今井地区食生活改善推進委員会 ・今井地区子ども会育成会 ・今井地区スポーツ協会 ・今井福祉協議会健康部会 ・蕎麦道場大瀬庵 ・若妻大学(今井) ・絵画クラブ「ブルジャン・ブルー」 ・日赤奉仕団笹賀分団	地域住民から長期休み中の子どもたちの居場所が必要ではないかの声が上がリ、今井福祉協議会が核となって、地域の活動団体に声をかけを行いR5年度から活動を開始	・5日間で累計約160名が参加 ・地域住民や学年を超えた交流が広がった。 ・子どもたちの長期休みにあわせて行うことで、保護者の負担軽減につながっている。 ・ボランティアと共に行う工作や料理作りなど様々な実体験が子どもの成長につながる。 ・地区関係団体の理解と協力の向上、事業が実施できている。 ・ボランティアの積極的な参画と、職員の負担軽減が課題	
R6年度	今井地区	福祉	全て	新規地区サークル立ち上げ推進（いきいき百歳体操体験会）	活動の目的：コロナウイルス感染症の流行に伴い縮小した、今井地区内における住民の交流の機会となる場の再興 時期：7月～2月 場所：公民館、福祉ひろば(出張ふれ健)など 対象：今井地区町会長、主に高齢者 方法： ・今井地区町会長向けにいきいき百歳体操の説明会の実施 ・依頼のあった町会出張ふれ健にて体験会の実施	実施主体：保健師 関係者：地区福祉ひろば、今井地区団体方づくりサポーター 協力：地区福祉ひろば、今井地区団体方づくりサポーター、今井地区生活支援員、公民館、今井地区地域づくりセンター、町会長会等	・コロナウイルス感染症の流行の影響で今井地区内のサークルや住民の集いの場が減少傾向にあったため、地区担当保健師の取り組みとして、新たな住民の集いの場としていきいき百歳体操の実施を取り入れたサークルの設立を目指すこととした。 ・サークル設立までの流れを円滑にするため、6月に地区の町会長や地区職員に向けて、いきいき百歳体操の説明会を行った。 ・福祉ひろば、体力づくりサポーターの協力のもと、出張ふれ健もしくは希望のあった町会の公民館でいきいき百歳体操の体験会を行った。	・新たに1町会でいきいき百歳体操を取り入れたサークルが設立された。 ・そのほか体験会を行った町会からは、参加者からかねがね好評なご意見をいただいたが設立には至らなかった。実際に場所や設備の確保やメンバー集めをするにあたり、指揮を執れる方がいなかったことも原因の一つであったと考える。 ・時期によってサークル設立につながる地区もあると予想し、R6年度以降も町会長に向けた説明会と、希望がある町会で体験会を行い、新たなサークル設立に向けて活動する予定としている。	
R6年度	本郷地区	福祉	全て	スマホサロン	・防災、介護予防、生きがいづくりに役立つスマホの基本的な操作などを学ぶ ・月1回本郷福祉ひろばと南郷福祉ひろばで開催 ・地区住民	・社協本郷支会 ・福祉ひろば ・北部地域包括支援センター ・地区生活支援員	2020年夏、大雨や台風による自然災害が発生。「避難所がわからない」「防災無線が聞こえない」などの住民からの問い合わせが多発し、町会長への電話が繋がらないなどの課題が地区の会議で出された。その課題解決の一つとして包括支援センター職員と地区生活支援員の連携と福祉ひろばの協力で事業を開始	住民同士で教え合い励ましながら学ぶことで、スマホで色々なことが出来るようになってきた。今年度からお茶会も取り入れたことで、住民同士のつながりづくりが深まっている。	
R6年度	本郷地区	福祉と住民自治	全て	世代間交流会	・高齢者と小学生と一緒に楽しみながら交流し、相互理解を深めるきっかけづくり ・夏休み、冬休みの長期休みにテレビゲームのeスポーツ体験や音の遊び、子どもたちがはまっている遊びを通じて交流 ・南郷児童館、浅間児童センターに通う小学生、福祉ひろば利用者などに呼びかけ、福祉ひろばや公民館、文化センターで開催	・社協本郷支会 ・福祉ひろば ・北部地域包括支援センター ・地区生活支援員 ・信州大学ボランティアサークル	・「世代間交流会を行うことで、高齢者の課題解決に繋がるかもしれない」子どもから高齢者まで誰でも楽しむことができるeスポーツ世代間交流会を包括支援センター職員と地区生活支援員の連携で計画 ・今年度で4年目 ・信大ボランティアサークルが運営や準備に協力	・今年度は、事前に子どもを対象にした認知症サポーター講座で高齢者への理解を深めた後に交流会を開催 ・地域の障害者施設に通う方々にも声かけをして参加。障害のある方への理解を深める講座も今後検討していく予定	
R6年度	本郷地区	福祉と住民自治	ジェンダー	子育て支援講座	・育児支援講座を開催し、少しでも不安の解消に努める ①交流の場を提供することにより、同じ世代の親同士でコミュニケーションがとれる ②子育て中の親が、悩みを一人で抱え込まず、困った時に身近に相談できる先を増やす ③自分の地区に、自分のことを見守ってくれる存在がいることで孤独感を感じない ・本郷福祉ひろば・南郷福祉ひろばを会場に開催 ・本郷地区にお住まいのお子さんとその保護者 ・講師に関しては、今後事業が継続していかれるように、地域に住む助産師さんや関係職員等に依頼（本郷消防署、助産院ラフ、北部保健センター） ・民生委員の会長も趣旨に賛同。チラシの配布や主任児童委員も当日の運営を協力 ・地域の子育てボランティアさんにご協力いただいている。	・社協本郷支会 ・地区担当保健師 ・社協地区担当 ・地区生活支援員 ・民生委員、主任児童委員 ・福祉ひろば（本郷、南郷） ・子育てボランティア ・浅間児童センター（つづいのひろば） ・南郷こどもプラザ	・保健師の地区課題分析で分かったこと ①年間120人の出生があり、市内で4番目に多い ②妊娠届出で時の聞き取りで、ハイリスク妊婦が約半数いる ③乳幼児健診の問診で、育児負担感のある親が多い ④健康相談時、離乳食や食事に関する相談者が約半数で、食事に関心で不安を抱えている親が多い ・地区担当保健師と地区生活支援員とで相談し、交流の場を提供することで、一人で悩みを抱え込まず、困った時に身近に相談できる先を増やすことができるようになることを目的に、子育て支援講座を企画。 ・今年度の内容は、「幼児食への移行とおやつ・口腔機能とむし歯予防」「子どもの救急対応」「離乳食の進め方と食材アレージ」「ベビーマッサージ」の4講座を開催	・昨年までのベビーマッサージ講座は、大変好評で保護者の方向士や地域の子育てボランティアの皆さんとも交流し、顔の見える関係づくりが出来た。 ・浅間つづいのひろば職員や南郷こどもがら職員にも声をかけ、事業の共催や、当日、施設の紹介も実施 ・今年度は、さらに回数も増え地域の子育て支援の場として定着出来るとよい。	

回答年度	回答者所属 (地区名・課名等)	関連分野	対象	Q1 事業名・活動名	Q2 概要 (活動の目的、時期、場所、対象、方法、実施体制等)	Q3 実施主体 関係者・関係団体等	Q4 活動のきっかけ／取組みに至るまでの経過 (誰が、どんなことを考え、誰に相談し、どう行動したか等)	Q5 活動の成果および課題、 今後の展望等
R6年度	本郷地区	福祉と地域資源	子ども	子育て応援ボランティア 養成講座	・本郷地区の担い手育成講座として企画 ・終了後は、子育て支援講座を含む地域の子育てに関する事業や行事でのボランティア活動のきっかけづくり ・本郷公民館で地区住民を対象に1回の開催	・社協本郷支会 ・社協地区担当 ・地区生活支援員 ・地区担当保健師	・本郷地区子育て支援講座の開催をきっかけに地域の子育てに興味のある方の担い手づくりとして計画 ・「本郷地区の状況について（講師：地区担当保健師）」「乳幼児の特性と気をつけること（講師：のぼら保育園園長）」「乳幼児の保護者への接し方、気をつけることについて（講師：こどもプラザ所長）」に講師を依頼して開催	・親子への接し方を学ぶ事により、適切なかわりができるようになるとともに、安心してボランティアに従事できる体制を構築。講座終了後、今後計画している子育て支援講座のボランティア活動に参加してくださる方が多くいた。
R6年度	本郷地区	住民自治と地域活性化	全て	本郷地区ボランティア協議会「ぐさえあいの会」	・本郷地区で活躍するボランティアを支え、安心して暮らせる地域づくりをともに進めることを目指す。また、自らの健康づくりや仲間づくり、学習と研鑽を重ね、地域のボランティアが連携して本郷地区の活性化に協力することを目的としている ・本郷地区内の個人及び関係する団体なら誰でも入会可 ・包括支援センターや地区生活支援員も参加して、情報提供や個別の相談など行っている	・社協本郷支会 ・社協地区担当 ・地区生活支援員	・平成28年「本郷地区ぐさえあい講座」全6回に参加した地区住民で地域のボランティア活動に興味のある方を対象に立ち上げた ・社協地区担当と地区生活支援員が事務局 ・会員それぞれが自分の身近で高齢者や子どもへの支援活動を行っている（地区・町会サロン、銭太鼓、福祉ひろばの送迎、子どもの見守りなど）	毎年会員を対象に視察研修や講座、交流会を開催。今年度は、JICA駒ヶ根と日本聴導士協会へ視察研修を実施。ぐさえあい講座と交流会も実施予定
R6年度	本郷地区	福祉	高齢者	地域の縁側「にこにこサロン」	・本郷地区全域の方対象で、お茶のみや世間話、日常生活の困りごと相談など気軽に参加出来る気寄りの場（オレンジカフェを含む） ・月1回 シルバー人材センターえがおで開催	・サロンボランティア（地域住民） ・社協本郷支会 ・社協地区担当者 ・北部地域包括支援センター ・地区生活支援員	平成28年本郷地区ぐさえあい講座の参加をきっかけに当時の健康づくり推進員を中心に誰でも気軽に参加できる地区のサロンとして立ち上げた	地域の気寄りの場として長年活動してきたが、今後会場がお借りできなくなる可能性が高くなり、場所の問題や参加者や担い手の高齢化、限られた人しか参加できない送迎問題などの課題がある
R6年度	本郷地区	福祉	全て	町会サロン	・地域の通いの場として、町会ごとにサロンボランティアが運営、準備 ・15町会で開催 ・町会住民を対象に年数回から月1回程度、公民館や個人宅、社務所などで開催	・サロンボランティア（地域住民） ・社協本郷支会 ・社協地区担当者 ・北部地域包括支援センター ・地区生活支援員	・平成28年「本郷地区福祉を考えるつどい」で他地区の取り組みのお話などをきっかけに少しずつ町会サロンが立ち上がった ・社協地区担当や包括支援センター、地区生活支援員など立ち上げに協力	・町会ごとにサロンボランティアさんが、毎回内容に工夫を凝らし、身近な場所での通いの場として楽しみや生きがいづくりの場となっている。 ・参加者の固定化や担い手の高齢化、周知方法など課題がある。 ・課題解決や情報共有の場として、社協本郷支会が主催で「サロン主催者交流会」を定期開催している。
R6年度	本郷地区	地域資源	全て	本郷地区合併50周年記念誌発行	・本郷地区が松本市と合併し50周年を迎えるにあたり、地区の歴史を振り返り、松本市における本郷地区の存在意義を再認識するため、令和6年7月に記念誌「本郷地区松本市合併50年のあゆみ」を発刊 ・本誌の発刊作業は、町会連合会を核とし、地域住民と地域づくりセンター、公民館で編集委員会を立ち上げ、令和2年11月より定期的に実施した。	「本郷地区松本市合併50年の歩み」編集委員会	・平成28、3月に本郷地区が松本市に合併して50年を迎えるにあたり、50周年記念事業について協議 ・令和2年度、町会長会において事業内容を決定（記念式典の開催と記念誌の発刊） ・合併50周年記念専門委員会開催。専門委員（あゆみ編集委員、各種イベント専門委員）の委嘱と今後の進め方について打合せ	・発刊後、地区内だけでなく市内外から記念誌を求める声があり、本郷地区の情報発信に繋がっている。 ・公民館で記念誌をもとにした展示を計画するなど、公民館などにおける事業実施に活用している。
R6年度	本郷地区健康づくり課北部保健センター	福祉	子ども	本郷地区子育て支援講座	目的：本郷地区の住民対象で、育児支援講座を開催することにより、実際に地域を見守っている役員や子育て世代の住民の交流の場を提供することにより、一人で悩みを抱え込まず、困った時に身近に相談できる先を増やす。 時期：R6年8月から月1回実施。計8回実施 場所：本郷福祉ひろば、南郷福祉ひろば 対象：①0か月から11か月 ②4か月から11か月 ③1歳から3歳 ④未就園児 方法：①ベビーマッサージ ②離乳食の進め方と食材のアレンジ ③幼児食への移行とおやつについて&口腔機能と虫歯予防 ④子どもの救急対応法 ＜予算＞社協の助成金を活用 ＜周知方法＞7月1日号の回覧で周知、民生委員が対象の過程にチラシ持参もしくはポストイン、乳幼児健診時にチラシ配布	・健康づくり課北部保健センター ・本郷地区担当保健師 ・松本市社会福祉協議会本郷支部 ・本郷地区生活支援員 ・民生委員、主任児童委員 ・本郷福祉ひろば、南郷福祉ひろば ・子育てボランティア ・浅間つどいのひろば ・南郷こどもがらぎ	保健師の地区課題分析の中で、本郷地区は年間120人の出生があり、市内で4番目に出生が多いが、妊娠届け出時の聞き取りで、ハイリスク妊婦が約半数いることがわかった。また、乳幼児健診の問診からも、育児負担感のある親が多いことがわかった。また、本郷地区健康相談時、離乳食や食事に関する相談者が約半数で、食事に関して不安を抱えている親が多いことがわかった。 保健師と生活支援員とで相談し、交流の場を提供することで、一人で悩みを抱え込まず、困った時に身近に相談できる先を増やすことができるようになることを目的に、子育て支援講座を企画。 講師に関しては、今後も事業が継続していかれるように、本郷地区の施設等に依頼した（本郷消防署、助産院ラフ、北部保健センター） 民生委員の会長も趣旨に賛同し、チラシの配布について協力や主任児童委員も当日の運営を手伝ってくれた。福祉ひろばも会主任児童委員も当日の運営を手伝ってくれた。福祉ひろばも会場を提供してくれた。 また地区支援員主催で、子育て応援ボランティア講座を企画しようになるとともに、安心してボランティアに従事できる体制を構築した。 浅間つどいのひろば職員や南郷こどもがらぎ職員にも声をかけ、事業の共催や、当日、施設の紹介も実施。	参加した親子からは、身近な場所で行きやすかった、楽しかったという意見が聞かれ、好評であった。 現在は行政主導の企画だが、本郷地区の住民を巻き込み、5～10年後には、本郷地区の子育て支援講座を住民（主任児童委員やひろばやボランティア等）が企画できるようにしていきたい。

回答年度	回答者所属 (地区名・課名等)	関連分野	対象	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5
				事業名・活動名	概要 (活動の目的、時期、場所、対象、方法、実施体制等)	実施主体 関係者・関係団体等	活動のきっかけ／取組みに至るまでの経過 (誰が、どんなことを考え、誰に相談し、どう行動したか等)	活動の成果および課題、 今後の展望等
R6年度	四賀地区	住民自治と地域活性化	全て	四賀地区地域づくり協議会 会専門リーダーズミーティング	・四賀地区の課題解決に向け、地域づくり協議会活動の7つの柱を達成するため、部会に地区内から選ばれた専門リーダーを配置。 ・活動期間は基本的に年度単位。 ・各事業に関する企画書の作成、事業実施に向けた調整他。 ・専門リーダー間で常に情報を共有し、案件によっては複数人のリーダーが協力して事業実施を目指すもの。	・四賀地区地域づくり協議会	・令和5年度までの地域づくりセンター強化モデル事業を契機に、地域づくり協議会活動が活発化。 ・市民向けアンケート、ワークショップの開催等により、地域内の課題、資源の掘起こしを実施。 ・上記を踏まえ、地域づくり協議会活動に専門リーダーの必要性が生じ、令和6年度総会において規約改正、並びに専門リーダーを選定したもの。	・主に地域振興部会活動の企画書の作成、並びに主体性のある事業実施調整を予定。 ・既存事業に留まらない新たな視点からの事業展開、将来像を踏まえた持続可能な活動の活性化に期待。
R6年度	四賀地区	住民自治と地域活性化	全て	四賀在る会議	・地域の良さ、魅力を見つめ直し、持続可能な地域とするために、地域にあった地域づくりの取り組みを具体化する目的で開催。 ・令和5年9月から月1回のペースでワークショップ等を開催している。なお令和6年度からは必要に応じて実施するもの。	・四賀地区地域づくり協議会	・令和5年度までの地域づくりセンター強化モデル事業を契機に開催。 ・令和4年度は（仮称）若手未来会議として5回、令和5年度は四賀在る会議として4回開催。 ・令和6年度からは、専門リーダーの企画作成に必要な場合を中心に開催予定。	・強化モデル事業後も継続して四賀地区独自で行っている事業 ・従来からの在住者と移住者が交流しながら進めている他、令和6年度からは地域リーダーの企画内容に、新たな気づき、アイデアを加える化学反応に期待している。
R6年度	四賀地区	地域活性化	全て	大結が市	・地域活性化を目指し、地区内飲食店事業者等を中心としたイベントを開催 ・令和6年度は地区住民の要望を受け、夜開催も新たに実施	・大結が市実行委員会（四賀地区地域づくり協議会協力）	・地区内飲食店事業者等が、地域内の活性化を目的に声を掛け合い、イベントを開催 ・活動は実行委員会を主体に、地域づくり協議会協力により実施 ・日を中心に活動してきたが、夏の暑さ対策、地区内で夜に人が集まれる場の創出を目的に夜市も企画開催。 開催にあたり地域から協賛を募ったほか、夜開催に対応するための体制、機材、保険等を実行委員会と協議し整備。	・令和6年4月昼開催 1,000名程度参加 ・令和6年8月夜開催 1,000名程度参加 ・今後、秋冬の開催を検討
R6年度	四賀地区	地域活性化と教育・スポーツ	ジェンダー	松本ローズカップ	・スポーツを通じた地域振興、並びに女子野球の聖地を目指し、全国規模の女子野球大会の開催を支援。 ・おもてなしと防災力向上メニューとして豚汁300食、炊き出しのふるまい、町会応援団の編成、音楽隊の編成等。	・四賀地区ブロック実行委員会（野球を愛する会（四賀地区地域づくり協議会協力、元アスロジェント、日赤奉仕団、MAB（市民バンド））	・四賀地区内に在る資源（球場）を活用した地域振興、並びに女子野球の聖地を目指したいという声が地域からあがったため、実行委員会を立ち上げ、地区内の各種団体を取り込みながら拡大し現在に至る。 ・活動は実行委員会主体に、地域づくり協議会協力により実施している。	・移住者の視点から四賀地区の魅力を「里山の恵み」に注目し、その良さを気軽に感じられるよう、また、付加価値を付けられる惣菜・加工品製造・販売に取り組んでいる点
R6年度	四賀地区	地域活性化と住民自治	全て	四賀「おいしい里山」計画	・移住し、地元の人との関わりの中で気づいた四賀の里山の価値を維持していくために実施 ・五常地区にある店舗、移動販売、イベント出店等 ・四賀地区の農産物の良さを体感してもらうための惣菜、加工食品の製造・販売（交付金は、必要な厨房備品の購入に充当）	・のらどこ（代表 織田倉悠）	・村時代に「四賀村の石造文化財誌」「四賀村の寺社文化財誌」発行 ・「地区内ウォーキング」開催時に文化財の説明 ・地区内にある文化財の状況調査	・9月26日の定例教育委員会にて協議後、認定予定。 ・善光寺街道と虚空蔵山登山道の整備や、文化財案内板の設置、四賀小学校の遠足へ同行しての関連文化財説明などを計画
R6年度	四賀地区	地域資源	全て	まつもと文化遺産「虚空蔵山と善光寺街道～祈りの道～」	・虚空蔵山と善光寺街道に關係する文化財について、調査研究し、歴史と伝統の保存と保護を目的とする。	四賀文化財保護協会		児童センターから約50名、その他部会員やボランティアを含め合計約80名の参加。 ・ことも達からも大人からも好評で、またやつて欲しいとの声があがった。ゲームや昼食のカレー会を通して、こどもと地域の大人達の交流のきっかけとなった。 今後、このような顔の見える関係から、お互い支えあえる地域につながることを望める。
R6年度	四賀地区・健康づくり課	福祉と住民自治	子ども	世代間交流会	目的：地区に住む世代の異なる住民が、お互い顔の見える関係となることで支えあえる地域を目指す。 時期：小学生の夏休み期間 場所：四賀地区地域づくりセンター 対象：児童センターに通う児童及び地域住民（福祉健康部会員＋ボランティア募集で集まった方＋地区関係職員） 内容：レク＋食改協力のもと小学5・6年生とカレー作り＋昼食会に令和6年度は災害の視点（ハイズックスを使用して炊き出し＋防災の話）も加えて交流会を実施。	四賀地区地域づくり協議会福祉健康部会、児童センター	少子高齢化が進む四賀地区で、「顔の見える関係づくり」のきっかけとして世代間交流会を福祉健康部会で検討。 →児童センターと相談し、夏休み期間のひとつのイベントとして令和5年度から開催。 令和6年度は地域づくり協議会の柱のひとつに防災があることから、防災の視点も取り入れた内容をセンター職員や部会で検討し実施。	令和3年6月から月に1回開催 1 近所で誘い合わせて来場する者がいた。 2 来場者同士、話をする姿が見られた。 3 関係団体と協議をし、抱き合わせ企画を実施 5 令和5年度から、旗振り役を変更（安曇公民館→安曇地区生活支援員） 6 事業開始から4年、固定客がみられるようになり、事業継続を望む声が多い。
R6年度	安曇地区	福祉と住民自治	全て	ちよっとよっていきましょ ～月1回 診療ついでにちよっと一息～	1 目的 健康とくらしの調査の結果から見る地区の課題の悪循環を抑制し、公民館事業等の現状の改善を目的に開催するもの 2 時期 5～10月の間の月1回（年6回） 第3回目の水曜日 3 場所 大野川区事務所 4 対象 一般 5 方法 地元団体（大野川区町会等）＋行政（安曇地区地域づくりセンター等）が、通いの場をつくるもの	大野川区町会 のりくら観光協会 乗鞍うまいもの工房 大野川区民生委員 安曇地区地域づくりセンター 安曇公民館 安曇地区福祉ひろば 西部保健センター 松本市社協安曇事業所 安曇地区生活支援員	1 安曇地区関係職員情報交換会（現在の安曇地区関係職員連携会議）が、健康とくらしの調査の結果から見る安曇地区の課題を踏まえた事業計画（案）を検討 【調査結果1】 通いの場や趣味の会などに参加する割合が低い。 【調査結果2】 認知機能低下者、閉じこもり者の割合が高い。 【課題1】 公民館事業等の参加者の固定化及び参加者数が増えない。 【課題2】 特に上地区（大野川区等）の参加者数が少ない 2 課題及び事業計画（案）を地元団体と共有するとともに、主催者として関わってもらうよう調整 3 来場しやすさ等を狙い移動販売車を手配	令和5年度に開始した官民協働の取り組み 1 令和6年度は回数を増加（4→12回） 2 実施の都度、参加者からのアンケートを基に、企画内容及び実施場所等、柔軟に対応している。 3 数回は日曜開催とし、父親の参加を狙った。地域とのつながりづくりに向け、地元住民等と調整し、本事業への参画を目指す。
R6年度	安曇地区	福祉と地域活性化	ジェンダー	まつもとお山ですくすく子育てサロン	1 目的 子育て中の親の育児への不安感や、育児の孤立化の解消を目指すし、子育てをしている親同士の交流及び地域住民や保健師とのつながりづくりを目的に開催するもの 2 時期 月1回（年12回） 3 場所 ふれあいパーク乗鞍、一ノ瀬園地等 4 対象 主に0歳～5歳くらいまでのお子様を子育て中の親子 5 方法 乗鞍高原の豊かな自然の中で自然保育を実践している「のりくら自然保育木のこ」を中心に講師をお迎えし、外遊び、絵本の読み聞かせ、散歩、郷土食づくり、野菜の収穫体験等を行う。	のりくら自然保育 木のこ 安曇公民館 健康づくり課西部保健センター	1 松本市安曇地区内にある大野川区町会では、児童館等、子ども（特に未就園児）及び子育て世代同士が交流できる機会や場所がない。このことで生じる孤独感や悩み、日々の暮らしで感じる生活の不便さや、人口減少につながっていると考えた。 2 近しい環境にある者同士が交流できる場をつくることで、悩みを分かち合うと同時に、地域の魅力及び山での暮らしの楽しさを味わってもらう機会となるよう、この活動を始めた。	

回答年度	回答者所属 (地区名・課名等)	関連分野	対象	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5
				事業名・活動名	概要 (活動の目的、時期、場所、対象、方法、実施体制等)	実施主体 関係者・関係団体等	活動のきっかけ／取組みに至るまでの経過 (誰が、どんなことを考え、誰に相談し、どう行動したか等)	活動の成果および課題、 今後の展望等
R6年度	安曇地区	福祉	高齢者	出張エルダー (福祉ひろば事業)	・目的：各町会での健康増進と同じこもりの防止 ・実施時期：令和6年度から毎週（一部町会では5年度の途中から） ・場所：5会場 ・対象：5町会の6つのいきいき百歳体操サークル参加者 ・方法：5町会のいきいき百歳体操実施日に併せて実施 ・実施体制：5町会5会場毎月11回実施（1回30分）	安曇地区地域づくりセンター 安曇地区福祉ひろば 大野田町会 島々町会 樺島町会 稲穂町会 大野川区町会 安曇地区生活支援員	・月1度の福祉ひろばで開催するエルダー事業に人が集まらない。 ・安曇地区関係職員連携会議で課題として取り上げた。 ・5町会にいきいき百歳体操サークルが発足し人が集まり好評である。 ・保健師、包括支援センター、生活支援員が健康講座やお役立ち講座をいきいき百歳体操とタイアップして開催している。 ・そこへエルダーを持って出向いて行けばどうか。	・福祉ひろばで開催していた時と比べ参加者は5倍強になった。（16人⇒85人/1ヶ月） ・今後はエルダーコンテンツを幅広く使って参加者を飽きさせないようにしたい。
R6年度	安曇地区	福祉と交通	高齢者	通いの場に合わせた健康 タイアップ講座	(1)経過・目的 健康情報の普及啓発の場が乏しいという課題解決のため、町会毎定期的に集まれる場としていきいき百歳体操の場を利用し、体操前の30分を利用し、関係機関が持ち回り健康情報を発信する場とするもの (2)対象と方法 いきいき百歳体操参加者を対象に、関係機関がそれぞれ必要な健康情報を30分で講義。各町会・各サークルにおいて、2～3か月に1回を目安に企画。令和6年度は、生活支援員が「市出前講座」「防災」、包括支援センターが「介護保険制度の流れ」地区担当保健師が「フレイル健診と予防講座」「健康課題（血圧）」を講義している。 ・信州大生有志が令和3年に活動をはじめ、今年で4年目の取組み ・奈川の無農薬野菜を広めるため、有機農業サークルで培った知識を生かして減農薬・無農薬での耕作に取り組む。 ・地域イベントを企画し、子どもたちの楽しみに加えて地域の大人や大学生が交流し、奈川の魅力を再発見する機会をつくる。 ・活動場所は奈川地区全域 ・活動期間：令和6年5月から令和7年3月	・地区生活支援員（西部社協） ・西部地域包括支援センター ・西部保健センター	交通面で課題がある安曇地区において、人の孤立化、健康情報の普及啓発の場が乏しいという課題がある。課題に対し生活支援員が中心となり、安曇地区関係職員情報交換会の場で検討し実施に至った。R6年度から、いきいき百歳体操でエルダーをやらない週に、2・3か月に1回を目安に試験的に開始。	・地域や行政と連携して、活動を展開していること。 ・拠点（市営住宅）があることで、地域と深くかわることができている。 ・活動が浸透しつつあり、地域住民に受け入れられ認められている。 ・新たなメンバーを募り、地域と学生の協働コミュニティを作るなど、メンバーの入れ替わりがあっても活動を継続する意思がある。
R6年度	奈川地区	地域活性化と地域資源	全て	奈川の無農薬野菜を広めよう	・信州大生有志が令和3年に活動をはじめ、今年で4年目の取組み ・奈川の無農薬野菜を広めるため、有機農業サークルで培った知識を生かして減農薬・無農薬での耕作に取り組む。 ・地域イベントを企画し、子どもたちの楽しみに加えて地域の大人や大学生が交流し、奈川の魅力を再発見する機会をつくる。 ・活動場所は奈川地区全域 ・活動期間：令和6年5月から令和7年3月	・奈川えんがわプロジェクト		・持続可能な奈川地区推進協議会の取組みから生まれた、住民主体の新たな活動であること。 ・ボランティアの参加・協力を得て、人とのつながりでイベントを成功させることができた。 ・2回目の開催となり、来場者、出店数ともに倍増し盛会であった。今後も工夫しながら継続していきたい。
R6年度	奈川地区	住民自治と地域活性化	全て	ながわ青空マルシェ＆マーケット	・地域のワークショップで「マルシェをやりたい」メンバーがチームをつくり、主体的にイベントを企画した。 ・夏場のスキー場周辺の活用を図り、地区内外に奈川の魅力を発信しながら、大勢の人が交流する場づくりをして、地域の元氣と賑わいを創出した。 ・開催日：令和6年8月18日 ・場所：松本市フォレストフィールド奈川 ・来場者数：延べ700人（スタッフ・出店者等含む） ・出店数：30	・ながわ青空マルシェ＆マーケット実行委員会		・地域住民が主体となりながら、地域外の人たちや行政・関係団体など、多くの主体の参加と協働で推進計画の実現を目指している。 ・市内34地区に先駆けて、地域づくり推進のための体制をつくり取組みを進めている。
R6年度	奈川地区	住民自治と地域活性化	全て	持続可能な奈川地区推進事業	・少子高齢化と人口減少が著しい奈川地区において、将来にわたって奈川地区が持続可能な地域となるために、令和3年9月に「持続可能な奈川地区推進協議会」を設立し、地域住民をはじめ、関係団体や行政、専門家などが、様々な意見交換や調査、ワークショップなどを経て、令和5年8月に和地域づくりの基本姿勢と具体的な行動を示した「持続可能な奈川地区推進計画」を策定した。 ・令和4年11月から地域でのワークショップが始まり、住民主体の活動を生み出す取組みが始まった。令和6年8月にワークショップから生まれた企画（イベント）を実践した。 ・推進計画を道標として、引き続き、課題解決に向けた取組みを行ない、住民主体の活動を生み出し支援することともに、様々な取組みをコーディネートする人材の発掘と育成を行う。	・持続可能な奈川地区推進協議会		・地域住民が主体となりながら、地域外の人たちや行政・関係団体など、多くの主体の参加と協働で推進計画の実現を目指している。 ・市内34地区に先駆けて、地域づくり推進のための体制をつくり取組みを進めている。
R6年度	梓川地区	福祉	全て	梓川地区 食生活改善推進員との地区での活動	目的 食育活動の推進、食生活改善推進員の活動促進。 時期 梓川地区 文化祭(11月) 場所 文化祭会場 対象 地区住民	福祉ひろば、まちづくり協議会、地域づくりセンター、地区担当保健師	会員は、26名おり、主体的な活動が行われている。男の運動ひろばや子育て支援事業おひさまなどの福祉ひろば事業への協力を分担して行っている。コロナ前には年2回お弁当作りを行っていたが、業者に委託となり現在は行っていない。松本市内でも多くの会員を有する梓川地区の活動を広げるため以下のようない組みを行った。 5月 松本市で行っている具沢山味噌汁コンテストの周知を、文化祭参加者への試食も含めて行うことを職員連絡会で提案。実施の方向で了承。 7月 食生活改善推進員と協議し実施の方向となった。 8月 文化祭実行委員会の事務局と協議の上200食分の試食を無償で提供することとし、調理を食生活改善推進員が行う方向。 11月 実施予定	・福祉ひろば、まちづくり協議会、地域づくりセンター、地区担当保健師
R6年度	梓川地区	福祉	子ども	おひさま（子育て支援事業）	・目的：子育て支援 ・実施時期：月1回（第一木曜日） ・場所：福祉ひろば ・内容：ふれあい遊び、読み聞かせ、情報交換など、希望者には身体計測、健康相談。 ・参加人員：民生委員 6～7人 参加者 14.5人（R6. 4月～9月平均）	主体：主任児童委員、民生児童委員 関係団体：福祉ひろば、地区生活支援員、地区担当保健師	民生児童委員が、こんにちは赤ちゃん事業を実施していく中で、転入者が多くお母さん同士のつながりが薄いと感じ、訪問時に保護者からのニーズもあり平成26年から開始。主体は主任児童委員、民生児童委員であるが、福祉ひろば事業としての位置づけで事業展開している。コロナ期間中は休止していたが、R5年1月から再開している。 内容の検討は主任児童委員を中心として福祉ひろば職員や地区担当保健師と行って実施している。	R5年から、梓川東保育園、梓川西保育園と交流事業を行っており、おひさま参加者が保育園に出向き交流している。入園を想定しての見学者もあり、保育園の雰囲気を知りたい機会となっている。おひさまは未就園児の事業であるため、今後も実施が期待される。

回答年度	回答者所屬 (地区名・課名等)	関連分野	対象	Q1 事業名・活動名	Q2 概要 (活動の目的、時期、場所、対象、方法、実施体制等)	Q3 実施主体 関係者・関係団体等	Q4 活動のきっかけ／取組みに至るまでの経過 (誰が、どんなことを考え、誰に相談し、どう行動したか等)	Q5 活動の成果および課題、 今後の展望等
R6年度	健康づくり課	福祉と住民自治	高齢者	ふれあい会食会	○目的 一人暮らし高齢者等に会食又は配食サービスを通じて外出や地域住民との交流の機会を提供し、孤立感の緩和や親睦を深め、地域福祉を推進する ○時期 R5年11月21日 R6年11月26日 ○場所 入山辺公民館 大会議室 ○対象 65歳以上の一人暮らし、または、75歳以上の夫婦二人暮らし ○方法・実施体制 公民館での2時間ほどの交流会と、弁当配布	○実施主体 入山辺地区健康づくり推進員会 ○共催 入山辺地区社会福祉協議会、入山辺公民館 ○関係者・関係団体等 入山辺地区民生児童委員会(お誘い・送迎)→R6年度からは協力団体	○流れ R5年8月の健康づくり推進員定例会にて、実施内容を検討 R5年9月の民生児童委員協議会定例会にて、地区担当保健師から対象者へのお誘いを依頼 R5年9～10月に、推進員・民生委員が協力して対象者へのお誘いを実施 R5年11月、当日送迎を民生委員が実施、当日運営を推進員が実施 ○その他 ・入山辺公民館からは、会場（大会議室・運動場）借用、参加者問い合わせ等 ・入山辺地区社会福祉協議会からは補助金助成あり	R5年度は33人の参加があり、対象者の17/パーセントであった。参加者からは「久しぶりに同級生に会えてうれしい」「脳トレが楽しかった」等の感想をいただいた。 R6年度は実施に向け準備中。
R6年度	島内地区	地域活性化	全て	島高松未来づくり検討会	目的 ・町会活動の中核を担った世代から次の世代への移行期を迎える中、生活様式の多様化と相まって地域に対する無関心、定年後も働き続ける層が厚くなり、地域の担い手不足などが現実の課題となっている。そこで持続的な町会活動をすすめるため、一人ひとりの住民が「我がこと」として様々な「場」に参加し、関わることでできる町会活動のあり方を総合的に検討するための検討会を設置する。	島高松未来づくり検討会	令和3年度～島内地区防災モデル町会として全常会が安否確認、避難誘導計画等の策定に取り組み、話し合いによる合意形成を積み重ねてきた。 令和6年度 4月 第1回審議会において「町会活動活性化研究会」設置について協議 5月 活性化研究会の進め方について審議会構成メンバーにアンケートを実施 7月 第2回審議会において「島高松未来づくり検討会」設置要領を決定 8月 町会全戸に公募委員の募集を実施 町会の課題を解決するために、総会資料の活動報告及び活動計画に基づく内容を基本に検討すべき課題を整理した	検討すべき課題 ・活性化につながる役員選出のあり方について ・長期的な視点に立った町会財政の方向性について ・助け合い活動による地域の安全安心の確保のあり方について ・超高齢社会を見据えた交通弱者対策のあり方について ・町会員が自由に交流できる場づくりや通いの場について ・ICTを活かした情報発信のあり方について

未来へつなぐ私たちのまちづくりの集い
～第40回松本市公民館研究集会・令和6年度松本市地域づくり市民活動研究集会～
分科会運営委員会名簿

分科会	世話人	市民幹事	氏名	肩書等	備考
1		○	野村 茂	松本市町会連合会副会長／安原地区町会連合会長	
		○	中田 安子	長野県生涯学習推進センター公民館支援専門員	
			神田 孝文	信州大学 特任助教	
			金井 稔	松南地区地域づくりセンター長	
			忠地 智司	新村地区地域づくりセンター長	
			西村 宏美	福祉政策課 課長補佐	
			横林 緑	福祉政策課 課長補佐	
			太田 義夫	危機管理課 課長補佐	
			筒井 健介	保健総務課 主任	
			内藤 哲夫	白板地区公民館長	
			乾 由理子	本郷公民館長	
	○		栗田 幸信	第二地区公民館主事	
	○		中條 陽	島内公民館主事	
	○		塩原 航	新村公民館主事	副リーダー
	○		碓 浩平	芳川公民館主事	
	○		保科 黄	内田公民館主事	リーダー
	○		安藤 ひかり	梓川公民館主事	
2			今福 良夢	生涯学習課・中央公民館 事務員	
		○	降旗 都子	第三地区まちづくり協議会副会長	
		○	小股 祐希	松本大学総合経営学部観光ホスピタリティー学科2年	
			三村 恵美	第三地区地域づくりセンター長	
			板花 賢治	今井地区地域づくりセンター長	
			窪田 潔	和田公民館長	
			丸山 勝久	神林公民館長	
			西口 恵利子	庄内地区子ども会育成会 会長	
			百瀬 あき	島立こども広場運営委員代表	
			大蔵 真由美	島立こども広場運営委員	
			吉沢 紗也加	島立こども広場運営委員	
			濱本 初美	島立こども広場運営委員	
			磯崎 福久子	島立こども広場運営委員	
			曽根 淳子	第三地区こども育成会わかばの会副会長	
	○		深澤 佐恵	第三地区公民館主事	
	○		中條 克明	大手公民館主事	副リーダー
	○		小林 大	庄内地区公民館主事	リーダー
3			丸山 直紀	島立公民館主事	
	○		宮下 慶祐	本郷公民館主事	
		○	桑原 美由紀	精神障害者の支援 コミュニティカフェてくてくの運営	
			諏訪 智子	特定非営利活動法人ハートラインまつもと	
			青木 茂人	元寿公民館長	
			橋本 和子	松本市民	
			宇留賀 真理子	中央地区地域づくりセンター長	
			山岸 清治	岡田地区地域づくりセンター長	
			瀧澤 和子	城東公民館長	
			永田 幸彦	芳川公民館長	
	○		村田 美鈴	城北公民館主事	
	○		奥原 直弥	安原地区公民館主事	副リーダー
	○		片桐 史門	白板地区公民館主事	リーダー
4			丸山 稜雅	寿公民館主事	
			赤羽 絵美	今井公民館主事	
	○		清水 春生	生涯学習課・中央公民館 主事	
			堀 敬子	城北地区地域づくりセンター長	
			藤牧 啓吾	笹賀地区地域づくりセンター長	
			荻原 しほみ	田川公民館長	
			大野 修	安曇公民館長	
	○		降旗 一博	東部公民館主事	副リーダー
5			伊藤 貴浩	松南地区公民館主事	
	○		北澤 圭祐	和田公民館主事	
	○		丸山 貴大	神林公民館主事	リーダー
	○		斉川 史徳	入山辺公民館主事	
	○		小岩井 一樹	生涯学習課・中央公民館 主査	
			関谷 健司	たいじ屋代表	
			南 麻里子	農家レストラン&カフェO l u O l u	
			北山 英実	J A Z Z雅鳴きたや代表	
			牛丸 尚久	松原地区地域づくりセンター長	
			大野 晃永	安曇地区地域づくりセンター長	
			大槻 研一	笹賀公民館長	
6			久保田 文章	寿公民館長	
	○		田中 貢治	岡田公民館主事	
	○		市橋 佑磨	里山辺公民館主事	
	○		阿部 優磨	松原地区公民館主事	
	○		浅沼 喜之	四賀公民館主事	
	○		羽田 大樹	安曇公民館主事	副リーダー
	○		奥原 美鈴	奈川公民館主事	リーダー
			中嶋 弘美	寿台地区地域づくりセンター長	
			柏原 せつ子	入山辺地区地域づくりセンター長	
			内山 健一	地域づくり課 係長	
			中嶋 美穂	地域づくり課 主任	
			上條 泰正	今井公民館長	
			河内 正弘	松原地区公民館長	
	○		朝倉 光貴	第一地区公民館主事	副リーダー
	○		小林 弘幸	城東公民館主事	
	○		高山 美空	鎌田地区公民館主事	
	○		宇治 樹	中山公民館主事	リーダー
	○		小山 高志	寿台公民館主事	
	○		小松 一成	波田公民館主事	

未来へつなぐ私たちのまちづくりの集い
－資 料 集－

編 集：「未来へつなぐ私たちのまちづくりの集い実行委員会」
発 行：「未来へつなぐ私たちのまちづくりの集い実行委員会」
発行日：令和7年9月1日